

『小学校英語指導者のポートフォリオ』

J-POSTL エレメンタリー

教職課程における活用実践



大学英語教育学会（JACET）教育問題研究会

JACET SIG on English Language Education
<http://www.waseda.jp/assoc-jacetedu/>

『小学校英語指導者のポートフォリオ』
J-POSTL エレメンタリー

教職課程における活用実践

米田佐紀子・山口高領・長田恵理 編著

JACET 教育問題研究会

JACET SIG on English Language Education

<http://www.waseda.jp/assoc-jacetedu/>

はじめに

2021年3月に『小学校英語指導者のポートフォリオ』（通称「J-POSTL エレメンタリー」）（JACET 教育問題研究会，2021）（以下，「J-POSTL エレメンタリー」）が出来上がった。これは，CEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）とEPOSTL（ヨーロッパ言語教育履修生ポートフォリオ）の主に生涯学習（自律学習）と行動志向アプローチの言語教育理念を日本に文脈化したJ-POSTL（言語教師のポートフォリオ）と同様の規準に沿って編纂されている。これらの文書はいずれも，数ある言語学習・教育理論及び実践の中で，何をすべきか，どうすべきか，ということは提示していない。当事者がリフレクト（省察）しやすいように枠組みを示しているに過ぎない。

そこで，まだ「J-POSTL エレメンタリー」が完成していなかった2020年7月，小学校教職課程における reflection tool としてのJ-POSTL エレメンタリーの活用事例集（仮）を作成するための準備委員会が4名（久村研，山口高領，長田恵理，米田佐紀子）で発足した。

本事例集の主旨は以下のとおりである：

英語指導者が自分の置かれた教育現場によって，内容を選んで（selective に）使用することを期待して，

- (1) reflection tool としてのJ-POSTL の理念・目的・意義／小学校学習指導要領とコアカリキュラムとの整合性／コアカリキュラムの教職課程の要件に則った使用法のガイドラインを作成する。
- (2) 背景が異なる大学での具体的な実践事例をまとめて，付属の指導マニュアルとして利用者に提供する。

6回にわたる会議を経て，13名の大学教員がJ-POSTL エレメンタリーを用いた活用実践例を執筆し，ここにまとめることができた。本書によって，J-POSTL エレメンタリーの利用に伴う個々の課題について議論が深まり，各大学における独自の活用方法が開発されることが期待される。

引用資料

大学英語教育学会 JACET 教育問題研究会（2021）．『小学校英語指導者のポートフォリオ』（J-POSTL エレメンタリー）

<http://www.waseda.jp/assoc-jacetenedu/CompleteJPOSTLElementary.pdf>

2022年2月20日

編著者

編集・運営組織

監 修 : 神保尚武 早稲田大学名誉教授 (科研代表)
校閲・編集 : 久村 研 田園調布学園大学名誉教授

編集・運営委員

委員長 : 米田佐紀子 玉川大学教授
副委員長 : 山口高領 秀明大学専任講師
同 : 長田恵理 國學院大學准教授
委 員 : 高木亜希子 青山学院大学教授
同 : 中山夏恵 文教大学准教授
同 : 安達理恵 椋山女学園大学教授
同 : 土屋佳雅里 東京成徳大学助教

実践報告執筆者 (五十音順)

安達理恵 椋山女学園大学教授
岩中貴裕 山口県立大学教授
長田恵理 國學院大學准教授
檜本洋子 四天王寺大学助教
加藤拓由 岐阜聖徳学園大学准教授
高木亜希子 青山学院大学教授
竹田里香 立命館大学嘱託講師
土屋佳雅里 東京成徳大学助教
永倉由里 常葉大学教授
中山夏恵 文教大学准教授
Benthien, Gaby 秀明大学教授
山口高領 秀明大学専任講師
米田佐紀子 玉川大学教授

目次

はじめに	i
編集・運営組織	ii
凡例	iv
【解説】		
教職課程における J-POSTL エレメンタリーの基本的な活用方法 高木亜希子	1
コアカリキュラムと J-POSTL エレメンタリー 久村 研	9
【実践報告】		
➤ 教養科目での活用		
自己評価記述文を用いた話し合い活動—受講生の省察力向上の試み— 岩中貴裕	15
➤ 指導法科目での活用		
初等教科教育法（英語科）における J-POSTL エレメンタリーの活用：		
省察の促進と授業改善に活かすために 高木亜希子	25
指導者と教職履修者の橋渡しとしての J-POSTL エレメンタリー 長田恵理	35
自己評価記述文に対する理解を深めるために		
—「外国語の指導法」における活用— 中山夏恵	45
4 技能の指導を考える—自己評価記述文「II 教授法」を用いた実践— 中山夏恵	53
COVID-19 禍での教員養成科目への J-POSTL エレメンタリー導入事例 竹田里香	62
「外国語の指導法」「外国語」における J-POSTL エレメンタリー活用例 土屋佳雅里	72
➤ 模擬授業での活用		
J-POSTL エレメンタリーと KPT 3 観点による省察 安達理恵	82
模擬授業における J-POSTL エレメンタリーを用いた自己省察力の涵養 永倉由里	92
➤ 複数科目での活用		
Integrating the JPOSTL elementary into English-focused classes for pre-service teachers: Challenges and Benefits Gaby Benthien	102
➤ 授業内外での活用		
講義と外国語支援活動での J-POSTL エレメンタリーの使用法 山口高領	113
➤ 教育実習での活用		
小学校教育実習における活用事例：		
J-POSTL エレメンタリーを長期使用した学生の例 米田佐紀子	123
教育実習前後における活用例：ゼミ生を対象とした実践 榎本洋子	133
➤ ゼミでの活用		
J-POSTL エレメンタリーを用いたリフレクションと自己調整力の育成 加藤拓由	142

凡例

1. J-POSTL 関連

- ・ J-POSTL

『言語教師のポートフォリオ』（JACET 教育問題研究会，2014）の通称／略称。中等教育英語教師のためのポートフォリオ

- ・ J-POSTL エレメンタリー

『小学校英語指導者のポートフォリオ』（JACET 教育問題研究会，2021）の通称／略称。ただし，J-POSTL-E と記載している原稿もある。

- ・ 試用版

2018 年後期～2020 年前期の 4 期にわたり，小学校教職課程における調査のために作成・使用した，94 の自己評価記述文からなる J-POSTL エレメンタリーの履修生用縮刷版。

- ・ 暫定版

2020 年度の 1 年間，一般からコメントや修正意見を収集する目的で，紙媒体とオンラインで作成・配信した J-POSTL エレメンタリーの見本。

- ・ 完成

2021 年 3 月に発行された，J-POSTL エレメンタリーの完全版。

2. 検定教科書のタイトルの表記

使用学年を含めイタリックスで表記した。

（例）*Here We Go! 5*, *NEW HORIZON Elementary 6*, など。

教職課程における J-POSTL エレメンタリーの基本的な活用方法

高木 亜希子（青山学院大学）

要旨

本章では、最初に開発の背景を踏まえて、J-POSTL エレメンタリーの理念（生涯学習、行動志向の言語学習観、異文化学習）と5つの特徴を概観する。次に、J-POSTL エレメンタリーの構成と主要な4つのセクションである自分自身について、自己評価記述文、用語解説、英語学習・授業実践・研修等の記録の使い方について解説する。また、教職課程における活用の3つのポイント、「記録する」「振り返る」「相談する」を示す。最後に、6つの段階から構成される教職課程における導入モデルを提示するとともに、教職課程のどの時期に、どのような場面で、どのように利用するのかを明確にする活用の制度化について述べる。

キーワード

リフレクション 自己評価 成長 自立 導入モデル

1. J-POSTL エレメンタリーの概要

1.1 J-POSTL エレメンタリーとは

J-POSTL エレメンタリーとは、小学校教員養成課程で学ぶ履修生や小学校で英語教育を担当する先生方が、自らの専門性を高め、成長するために活用するリフレクション・ツールです。なお、本章では、教職課程での使用に焦点を当てて解説をします。

J-POSTL エレメンタリーの開発の背景には、ヨーロッパ共通言語参照枠（CEFR）に基づいて開発された『ヨーロッパ言語教育履修生ポートフォリオ』（略称 EPOSTL）、EPOSTL を日本の教育の文脈に合うように、本研究会が翻案化した中学・高等学校の英語教師のための『言語教師のポートフォリオ』（略称 J-POSTL）、平成29年に告示された『小学校学習指導要領』があります。この4つの文書に基づいて、J-POSTL エレメンタリーは、J-POSTL の小学校版として開発されました。

1.2 J-POSTL エレメンタリーの理念

J-POSTL エレメンタリーの活用により、リフレクション（省察）と自己評価の方法を身につけることができます。この2つの能力を伸ばすためのアプローチとして、J-

POSTL エレメンタリーには、CEFR の 3 つの言語教育理念と、学習指導要領で提唱されている以下の 3 つの学びが反映されています。

- ・ 生涯学習：学び方を身につける（主体的な学び）
- ・ 行動志向の言語学習観：言葉を使って何ができるか（対話的な学び）
- ・ 異文化学習：自分の文化を相対化できるようになる（深い学び）

1.3 J-POSTL エレメンタリーの特徴

J-POSTL エレメンタリーの主な特徴は以下の 5 点です。

- ・ 指導者に求められる授業力の理解：小学校の英語指導者に求められる資質・能力と授業力が具体的にわかります。
- ・ 効果的な振り返り：授業力、基礎知識・技能を効果的に振り返ることができます。
- ・ コミュニケーションの促進：同僚や指導者との話し合いが促進されます。
- ・ 自己評価力向上：資質・能力と授業実践に対する自己評価力が向上します。
- ・ 成長の記録：継続することで自己の成長を記録することができます。

2. J-POSTL エレメンタリーの構成と主要な 4 つのセクションの使い方

2.1 J-POSTL エレメンタリーの構成

J-POSTL エレメンタリーは、次の 6 つのセクションで構成されています。

- ・ 本書の使い方：使用目的、使用上の 3 つのポイント、各セクションの使い方、記入時期と方法について解説しています。
- ・ 自分自身について：教員養成課程の初期段階、あるいは、教職に就いた段階で、外国語教育に関する自己の経験や一般的な課題を考察します。
- ・ 自己評価記述文：CAN-DO 形式の記述文に基づき、リフレクションと自己評価を行うことが求められます。
- ・ 用語解説：本書で使われている言語学習・教育の基本的な概念を表わす用語をわかりやすく解説しています。
- ・ 英語学習・授業実践・研修等の記録：教育実践や研修、あるいは、学修の実績と成果を記録しておくセクションで、自己評価の裏付け（エビデンス）となります。
- ・ 利用者のために：本書の開発過程とその過程で明らかになった小学校英語指導者の特性、及び、学習指導要領との関連について役立つ情報を掲載してあります。

2.2 主要な 4 つのセクションの使い方

2.2.1 自分自身について

「自分自身について」のセクションに取り組むことは、リフレクションの仕方を学

ぶ第一歩となります。自分自身を見つめ、履修生間で考えを共有し、経験を積む中で教育観が変化していきます。本セクションでは、以下の3点を行います。

- ・ 自分自身のこれまでの学びを振り返り、良かった授業や良くなかった授業を振り返り、それを踏まえて自分はどのような教師になりたいか、自分自身の考えを書き出していきます。
- ・ 教職課程に対する期待、教育実習に臨む前の期待と不安を述べます。
- ・ 教師の資質・能力が何であるか履修生の経験やクラスメートとの話し合いから考えます。

2.2.2 自己評価記述文

J-POSTL エレメンタリーには167の自己評価記述文があります。これらの記述文は、小学校での英語教育の指導者が努力して達成することが求められる中心的な資質・能力と考えられます。それらを利用しやすくするために、7つの分野（Ⅰ 教育環境、Ⅱ 教授法、Ⅲ 教授資料の入手先、Ⅳ 授業計画、Ⅴ 授業実践、Ⅵ 自立学習、Ⅶ 評価）に分類しています。それぞれの分野は、いくつかの下位領域に分かれます（図1）。

図1
自己評価記述文の7分野と下位領域



全ての記述文の下には矢印ブロックがあり、矢印ブロックの中に、1~5の数字が並んでいます。この数字は左から右へ、1-できない、2-あまりできない、3-どちらともいえない、4-まあまあできる、5-できる、までの範囲を表わしており、自己評価をす

るときの目安となります。これらの数値は各自のリフレクションの目安であり、絶対的なものではありません。数値はあくまで履修生の自己評価のための記録であり、数値を教職課程の授業の評価に使うことは適切ではありません。右端の矢印は、たとえば自分の判断で5のレベルに達したと思っても、さらに伸びしろがあり、教師の成長には終わりが無いことを表わしています。

自己評価記述文は、チェックリストではありません。それぞれの記述文の内容をよく考えた上で、自分の学修や授業実践で得た知識や経験を振り返りながら回答します。また、実際の指導経験がなくても、自身が教壇に立ったらできそうなことを具体的にイメージして回答します。具体的には、「…ことができる」を「…する方法を知っている／…する準備ができていいる」などの表現に変えると振り返りがしやすくなります。成長を可視化するために、目安として半年に一回の頻度で、各回別の色で記入するとよいでしょう。

2.2.3 用語解説

用語解説のセクションでは、167の自己評価記述文に含まれる、43の専門用語について、できる限りわかりやすく、解説しています。記述文を具体的に理解するために、履修生に適宜参照させます。

2.2.4 英語学習・授業実践・研修等の記録

本セクションでは、以下の2つの分野について記録します。自己評価記述文に対する自分の判断の根拠や、判断が適切であるか否かを示すためのもので、クラスメイトや指導者と話し合うときに利用できます。終了証やスコアシートなどの具体的な成果物は、エビデンスになるので別途保管します。

- ・ 英語学習記録：資格検定試験の結果、留学など、英語の学習や英語学習の成果
- ・ 英語の授業実践記録：教育実習、模擬授業、授業観察、学習支援学校でのボランティア、塾講師、家庭教師、仲間とのプロジェクト学習、学校行事補助など

3. J-POSTL エレメンタリー活用の3つのポイント

教職課程における J-POSTL エレメンタリー活用の3つのポイントは、「記録する」「振り返る」「相談する」です。

①記録する：エビデンスづくり

履修生は、教職課程履修中に、必要に応じて「英語学習記録」と「英語の授業実践記録」に自己の学習や教育実践を記録しておきます。発表や面接のときなどの貴重な資料として活用できます。

②振り返る：リフレクションに基づいて自己分析をする

履修生は、教職課程履修中に、少なくとも3回は自己評価記述文で自分自身を振り返り、自己の課題について考える習慣をつけます。また、自己分析の資料として活用し、教職に就いた後も、自分の成長のためのリフレクション・ツールとして、ポートフォリオを利用の継続を促します。

③相談する：意見交換をして、今後に活かす

履修生は、指導者や教育実習先の先生にポートフォリオを見てもらい、適切な助言を受ける機会を作ります。また、クラスメイトと話し合いをすることで、振り返りの深化を促します。

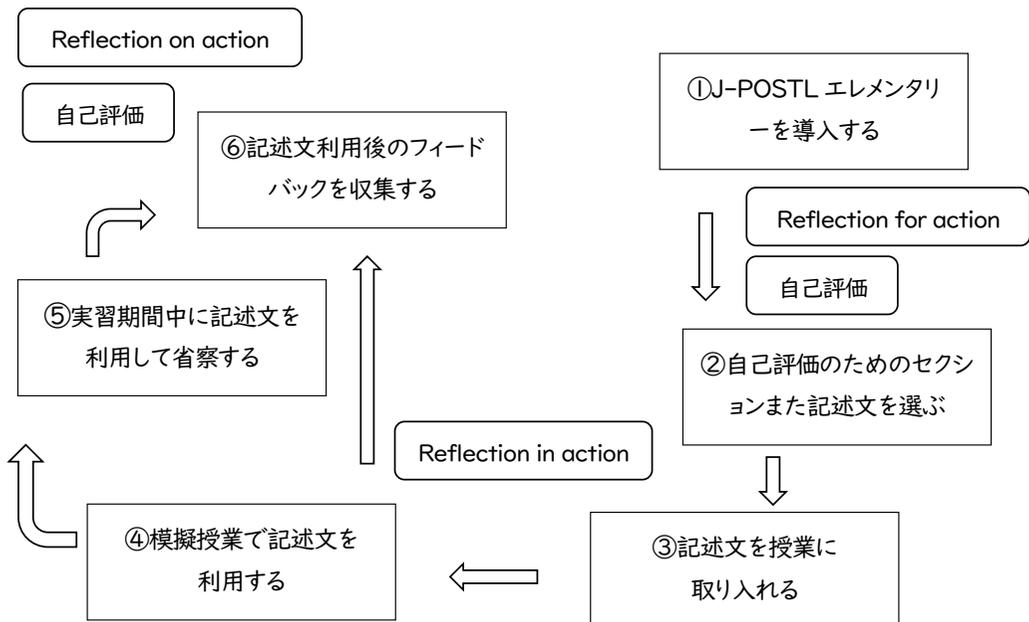
4. 教職課程における導入モデルと活用の制度化

4.1 教職課程における導入モデル

教職課程における J-POSTL エレメンタリーの活用は、大きく分けて「大学の教職課程での授業」と「教育実習」が考えられます。J-POSTL エレメンタリーを体系的かつ継続的に使用するために、教職課程における導入のモデル（図2）を参照するとよいでしょう。

図2

教職課程における導入モデル (Orlova, 2011, p. 28 を改訂)



右列の①から時計回りに進めます。教科教育法の授業で導入する場合には、おおよそ半期のサイクルになります。英語教育の担当者が複数おられる場合、相談しながら進めることを推奨します。各段階での活用方法については以下のとおりです。

①J-POSTL エレメンタリーの導入

J-POSTL エレメンタリーの導入を決めます。

②記述文の選択と自己評価

同僚や履修生と相談しながらセクションや記述文を選びます。半期の授業の場合、選ぶ記述文は15～20程度が限度でしょう。この段階で、準備段階のリフレクションとして、選んだ記述文に対して自己評価をさせ、J-POSTL エレメンタリーの冊子に記入してもらいます。

③授業での記述文の活用

選んだ記述文を時折参照させながら授業を進めます。可能であれば、記述文の理解を深めるために、記述文の語句の具体的意味や、記述文に示されていることを実現するために教室で行う指導について、履修生同士で話し合わせるとよいでしょう。

④模擬授業での活用

選んだ記述文の中から、さらに4～8程度の記述文を選び、その記述文を取り入れた模擬授業を行います。選んだ記述文に焦点を当てて、模擬授業のリフレクションをしたり、履修生同士で話し合うこともできます。

③と④の段階では、J-POSTL エレメンタリーの冊子に記入する自己評価はさせずに、簡単なメモや頭の中で即興でリフレクションをするよう指導することも考えられます。リフレクションの方法を身に付けないと、適切な自己評価を行うことが難しいため、授業を通してリフレクションの機会を何度か設けるとよいでしょう。

⑤教育実習での活用

本段階での活用は難しいかもしれませんが、もし可能であれば、③と④のリフレクションの方法を用いるとよいでしょう。教育実習での活用の利点は、実習期間中に履修生がどのような授業力の項目について重点的に取り組むのか、教職課程担当者と実習先の指導教員が共通理解を得ることができることです。また、履修生が実習中に集中的に取り組む授業の課題に基づいて記述文を選ぶことで、実習の目的を明確にし、実習終了後のリフレクションにも役立てることができそうです。

⑥最後の自己評価と記述文利用後のフィードバックの収集

模擬授業や実習の最後のリフレクションの機会となります。指導者や履修生仲間と協議をしながら、自分の実践や学習の成果について振り返り、自己評価を行います。その際、自己評価記述文と関連づけて、授業や教育実習の学びを振り返り、レポートの形で提出させることも考えられます。同時に、指導者は、自己評価の結果、レポート、アンケート調査等に基づき、履修生からJ-POSTL エレメンタリーの自己評価と活用について定期的にフィードバックを得ることで、教職課程でどのように活用すれば

よいか、指導者も振り返って考え、次の指導に活かすことが可能となります。

以上のようなプロセスを、次の学期にも繰り返すことで、履修生はリフレクションの方法を体得し、自己評価の能力を高め、自立した教師への土台を固めていくことができます。また、指導者も継続的に J-POSTL エレメンタリーの活用方法を工夫することで、授業やカリキュラムの改善にも役立てることができるとでしょう。

4.2 活用の制度化

J-POSTL エレメンタリーはすべてを利用する必要はありません。各大学のカリキュラムに合わせて、利用できる箇所を柔軟に考えるとよいでしょう。J-POSTL エレメンタリーの活用効果を最大限発揮するには、漠然とした利用ではなく、指導者と履修生の両方が明確な利用目標を持ち、カリキュラムに組み込むことで「制度化」することが必要です。「制度化」とは、教職課程のどの時期に、どのような場面で、どのように利用するのかを明確にすることです。4.1 で示した導入モデルのサイクルを回すことが難しい場合は、部分的な導入も可能です。以下は例として、利用場面別に、利用方法を整理しましたので、参考にしてください。

利用場面①：教職科目における J-POSTL エレメンタリー導入時の授業

利用箇所：自分自身について

利用方法：特に「過去の英語学習経験」と「小学校英語指導者としての抱負」についてそれぞれが記入した後に履修生同士で議論のテーマとして利用します。「資質・能力について」は時機を見て利用すると効果的です。

利用場面②：教職課程履修開始から終了時

利用箇所：自己評価記述文

利用方法：授業の内容に合わせて、該当する記述文を利用してグループで話し合いをさせるなど、記述文の背景にある教師の資質・能力や授業力について理解を深めます。

利用場面③：教職課程履修開始から終了時

利用箇所：英語学習・授業実践・研修記録表

利用方法：模擬授業や教育実習をはじめ教職や英語学習に関する学習・授業実践の記録をつけるよう指導します。授業案、学習ノート、英検の受験結果などは自己評価の証拠資料として保存させます。

利用場面④：教職科目における模擬授業

利用箇所：自己評価記述文

利用方法：模擬授業のテーマに沿って選んだ記述文を基に授業案を作成するよう指導

します。模擬授業終了後に、履修生同士で選んだ記述文に基づいて授業評価や実践を支える理論について話し合う時間を設けます。

利用場面⑤：教育実習指導

利用箇所：自己評価記述文の「授業計画」と「授業実践」

利用方法：教壇実習前に記述文を選んで授業の狙いや目的を設定するよう指導します。実習後は利用した記述文を基に履修生と授業実践を振り返ります。

参考文献

Orlova, N. (2011). Challenges of integrating the EPOSTL into pre-service teacher training. In D. Newby, A.-B. Fenner, & B. Jones (Eds.) *Using the European Portfolio for Student Teachers of Languages* (pp. 19-28). Council of Europe Publishing.

コアカリキュラムと J-POSTL エレメンタリー

久村 研

要旨

コアカリキュラムと J-POSTL エレメンタリーの拠り所となる学習理論と指導の留意点についてまず明らかにします。次に、両文書の親和性について、コアカリキュラムの到達目標と J-POSTL エレメンタリーの関連領域とを対応させた表によって示します。

キーワード

第二言語習得理論 行動志向アプローチ リフレクション・ツール

1. 言語学習理論

1.1 拠り所となる理論

コアカリキュラム（以降コアカリ）では、第二言語習得理論（以降 SLA）を学習指導の根幹に据え、特に音声指導から開始するよう規定しています（下記「引用 A」参照）。一方、『ヨーロッパ言語共通参照枠』（以降 CEFR）を源泉とした『ヨーロッパ言語教育履修生ポートフォリオ』（EPOSTL）の流れをくむ J-POSTL エレメンタリー（以降エレメンタリー）は、特定の学習理論に基づいてはいません（下記「引用 B」参照）。しかし、両文書は互いに相容れないということではありません。CEFR に関する引用 B の最後の引用を見れば、主に CEFR の言語学習観に依拠しているエレメンタリーは、コアカリの理念を包摂していると考えられます。次項で若干の説明を試みます。

<引用 A>

- ・ 『教職課程申請の手引き』（p.183）の到達目標に関する記述から：
 - (2) 子供の第二言語習得についての知識とその活用
 - 2) 音声によるインプットの内容の類推から理解へと進むプロセスを経ることを理解し、指導に生かすことができる。
 - 3) 児童の発達段階を踏まえた音声によるインプットの在り方を理解し、指導に生かすことができる。
 - 5) 受信から発信、音声から文字へと進むプロセスを理解し、指導に生かすことができる。
- ・ 『研修ガイドブック』（p.148）から：

1 第二言語習得理論に基づく指導のエッセンス

(2) 音声による活動から始める — 聞く活動 —

第一言語の習得（日本人にとっては日本語の習得）と同様に，外国語活動や外国語科の指導も，音声から言葉を学び始めるように授業を構成する必要がある。指導者の話，歌，チャンツ，読み聞かせ等を利用して，じっくり聞かせる活動を優先する。聞く活動を十分に行うことが話す活動へとつながっていく。

<引用 B>

- ・ CEFR (p.8) から：

非教条的 (non-dogmatic)：どんな理論や実践方法であっても，それが変更の余地ない，唯一無二のものだとして，固執するようなことはしない。

- ・ CEFR (p.139) から：

現在のところ，学習者がどのように学習するかについて，研究に基づく合意が充分得られているわけではない。従ってこの CEFR がどれか一つの学習理論を拠り所にすることはできない。

- ・ Newby (2011) (pp.15-17) から：

CEFR と EPOSTL の理念には近年の 4 つの言語・文化指導理論が色濃く反映されている。コミュニカティブな指導法 (CLT)，認知的・構成主義的言語使用・学習観，学習者自律，文化能力である。

1.2 理論をめぐる指導の留意点—エレメンタリーを利用するにあたって—

- エレメンタリーでは，音声インプットから学習指導を始めるべきであるとは主張していないので，コアカリ (引用 A) の 2), 3), 5) と『研修ガイドブック』の文言と直接に対応する記述文は含まれていません。現在使用中の教科書のほとんどの Unit，あるいは，Lesson は，聞く活動から始まっていますが，自分が置かれた教育現場によって，教科書と J-POSTL の記述文の内容を選択的に使用することが期待されます (表 2 参照)。
- エレメンタリーは第二言語習得理論だけではなく，様々な言語学習・教育観を取り入れて編纂された CEFR の能力 (competence) と運用 (performance/utterance) を記述した行動志向アプローチ (AoA: Action-oriented Approach) に依拠しています。AoA とは，目的を達成するためのツールとして，言語をスパイラルに使いながら習得する方法です。しかし，未だ確立した手順や指導法はありませんが，類型は示されています (Piccardo & North, 2019 を参照)。
- エレメンタリーの AoA に基づく教育理念は，コミュニカティブな指導法 (CLT) に親和的であり，「気づき—理解—内在化—統合」の認知プロセスの「気づき」における「理解可能なインプット」(聴く，読む) の概念は否定していません。ち

なみに CLT とは、教室で知識を獲得して、それを後の実生活で使う、つまり、学んでから使う、というステップを踏む教授法です。AoA の「使いながら学ぶ」とは真逆の学習法に思えますが、特に CLT にタスクに基づく指導法 (TBLT) を組み合わせると、さらに親和性が増すと考えられます。

- エレメンタリーは何をなすべきか、どうすべきかを指示しているわけではなく、当事者が省察しやすいように枠組みを提供しているリフレクション・ツールです。
- 引用 A の最後の行にある「聞く活動を十分に行うことが話す活動へとつながっていく」ようにするためには、次のような点に心がける必要があります。
 - ・ 聞く活動を行う時間を十分に確保する、
 - ・ 歌やチャンツが聞く活動につながるよう工夫する（意味の理解を伴って行う）、
 - ・ 英語を使って授業ができる指導者になる、
 - ・ 児童を引きつけて読み聞かせができる指導者になる。

上記 4 点ともに、言うに易しく行うに難しですが、特に限られた時間の中で、聞く活動を十分に確保することは至難です。授業時間ばかりでなく、日常的に英語を聞く機会を設けるなどの工夫が必要になるでしょう。

2. コアカリキュラムの到達目標と J-POSTL エレメンタリーとの対応表

2.1 外国語の指導法【2 単位程度を想定】

2.1.1 授業実践に必要な知識・理解

表 1 小学校外国語教育についての基本的な知識・理解

コアカリの到達目標	エレメンタリーの関連領域
1) 小学校外国語教育の変遷、小学校の外国語活動や外国語科、中・高等学校の外国語科の目標、内容について理解している。	I 教育環境 A. 教育課程
2) 主教材の趣旨、構成、特徴について理解している。	III 教授資料の入手先
3) 小・中・高等学校の連携と小学校の役割について理解している。	I 教育環境 A. 教育課程
4) 様々な指導環境に柔軟に対応するため、児童や学校の多様性への対応について、基礎的な事柄を理解している。	I 教育環境 B. 目標とニーズ D. 組織の設備と制約

表2 子供の第二言語習得についての知識とその活用

1) 言語使用を通して言語を習得することを理解し、指導に生かすことができる。	V 授業実践 E. 教室での言語
2) 音声によるインプットの内容の類推から理解へと進むプロセスを経ることを理解し、指導に生かすことができる。	II 教授法 A-2 発表 C. 聞く活動 D. 読む活動
3) 児童の発達段階を踏まえた音声によるインプットの在り方を理解し、指導に生かすことができる。	II 教授法 A-1 やり取り E. 文法, F. 語彙
4) コミュニケーションの目的や場面、状況に応じて意味のあるやり取りを行う重要性を理解し、指導に生かすことができる。	II 教授法 B. 書く活動, D. 読む活動
5) 受信から発信、音声から文字へと進むプロセスを理解し、指導に生かすことができる。	V 授業実践 E. 教室での言語

2.1.2 授業実践

表3 指導技術

1) 児童の発話につながるよう、効果的に英語で語りかけることができる。	V 授業実践 E. 教室での言語
2) 児童の英語での発話を引き出し、児童とのやり取りを進めることができる。	V 授業実践 E. 教室での言語
3) 文字言語との出合わせ方、読む活動・書く活動への導き方について理解し、指導に生かすことができる。	II 教授法 B. 書く活動, D. 読む活動

表4 授業づくり

1) 題材の選定、教材研究の仕方について理解し、適切に題材選定・教材研究ができる。	III 教授資料の入手先
2) 学習到達目標に基づいた指導計画(年間指導計画、単元計画、学習指導案、短時間学習等の授業時間の設定を含めたカリキュラム・マネジメント等)について理解し、学習指導案を立案することができる。	IV 授業計画 A. 学習目標の設定 B. 授業内容

3) ALT 等とのティーム・ティーチングによる指導の在り方について理解している。	I 教育環境
4) ICT 等の効果的な活用の仕方について理解し、指導に生かすことができる。	V 授業実践 D. 授業運営
5) 学習状況の評価(パフォーマンス評価や学習到達目標の活用を含む)について理解している。	VII 評価

2.2 外国語に関する専門的事項 【1 単位程度を想定】

2.2.1 授業実践に必要な英語力と知識

表5 授業実践に必要な英語力

1) 授業実践に必要な聞く力を身に付けている。	II 教授法 C. 聞く活動
2) 授業実践に必要な話す力 [やり取り・発表] を身に付けている。	II 教授法 A. 話す活動, D. 読む活動
3) 授業実践に必要な読む力を身に付けている。	II 教授法 D. 読む活動
4) 授業実践に必要な書く力を身に付けている。	II 教授法 B. 書く活動

表6 英語に関する背景的な知識

1) 英語に関する基本的な事柄(音声, 語彙, 文構造, 文法, 正書法等)について理解している。	II 教授法 E. 文法, F. 語彙
2) 第二言語習得に関する基本的な事柄について理解している。	I 教育環境 C. 言語教師の役割; II 教授法 C. 聞く活動; V 授業実践; E. 教室での言語; VII 評価; F. 誤答分析
3) 児童文学(絵本, 子供向けの歌や詩等)について理解している。	III 教授資料の入手先 II 教授法 C. 聞く活動, D. 読む活動
4) 異文化理解に関する事柄について理解している。	II 教授法 G. 文化; VII 評価 E. 国際理解(文化)

参考文献

- 文部科学省 (2017) . 『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』
https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afielddfile/2017/07/07/1387503_1.pdf
『教員養成・研修 外国語(英語) コア・カリキュラム』
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/126/shiryo/_icsFiles/afielddfile/2017/04/12/1384154_3.PDF
- 文部科学省 (2018) . 『教職課程認定申請の手引き』 (令和3年度開設用)
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afielddfile/20191213-01-000003171_1267643_01-1.pdf
- 吉島茂, 大島理枝 (他) 訳・編. 『外国語教育 II 外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』. 朝日出版社.
- Council of Europe (2001). *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment*. Cambridge University Press
- Newby, D. et al. (2007). *European Portfolio for Student Teachers of Languages*. Council of Europe.
- Newby (2011). Issues in using the EPOSTL. In D. Newby, A-B. Fenner & B. Jones (Eds.), *Using the European Portfolio for Student Teachers of Languages*. Council of Europe.
- Piccardo, E. & North, B. (2019). *The Action-oriented Approach – A Dynamic Vision of Language Education*. Multilingual Matters

自己評価記述文を用いた話し合い活動

—受講生の省察力向上の試み—

岩中 貴裕（山口県立大学）

要旨

本実践では、自己評価記述文について話し合いを行わせることによって受講生の省察力を向上させることを試みた。『小学校英語指導者のポートフォリオ』（J-POSTL エレメンタリー）中の「A-1. やり取り（Spoken Interaction）」と「A-2. 発表（Spoken Production）」で示されている12の自己評価記述文を熟読させ、記述されている内容を達成するために何をすればいいと思うかをペアで考えさせた。15回目の授業終了時にポートフォリオを用いた本授業を受けることによってどのような気づき、および発見があったのかをレポート提出させた。

キーワード

自己評価記述文 言語学習観 話し合い 省察力 気づき

1. 実践の背景と概要

1.1 実践の背景

実践を行った大学は、実践者が2021年9月30日まで所属していた教育学部教育学科のみで構成される単科大学である。卒業生の多くが教育職及び保育職に就いている。保育士、幼稚園教諭、小学校教諭、中・高等学校教諭（英語）、特別支援教諭の免許状を取得することが可能である。ここで挙げたすべての免許状を4年間で取得することはできないが、多くの学生が複数の免許状を取得する。卒業後は教育者または保育者になるという意味を持って入学してくる学生が多いのが特徴であると言える。

実践を行った大学のもうひとつの特徴として挙げられるのが実務家教員の充実である。校長経験者、教育委員会勤務経験者が複数在職しており、自らの豊かな経験に基づいて学生指導を行っている。実務家教員と研究に基盤を置く教員が協力して教育者、保育者を養成するという指導体制が整っている。

小学校教諭免許状を取得する学生は大きく分けて3つに分類される。一つ目は子ども教育のスペシャリストを目指すグループである。彼等の多くは保育士資格、幼稚園教諭免許状、そして小学校教諭免許状を取得する。二つ目は英語教育に関心を持って

いるグループである。彼等の多くは小学校教諭免許状と中学校教諭免許状（英語）を取得する。三つ目は特別支援教育に関心を持っているグループである。彼等の多くは小学校教諭免許状と特別支援教諭免許状を取得する。

英語科は体育科や音楽科と共通する要素を持っていると、実践者は考えている。例えば、上手に泳ぐことができるようになるためには、何度も試行錯誤しながら本人が実際に泳ぐ以外に方法はない。指導者によるアドバイス等は必要であるが、それだけで上手に泳げるようにはならない。楽器を上手に演奏できるようになる場合も同様である。自らが試行錯誤を繰り返すことによって技術の向上がもたらされる。

これはエピソード記憶 (episodic memory) , 意味記憶 (semantic memory) , 手続き記憶 (procedural memory) の観点から説明できる。エピソード記憶は「個人が経験した出来事についての記憶」である。「昨日の夕食は唐揚げだった」, 「今朝は道路がいつもより渋滞していた」のような記憶がエピソード記憶である。経験した内容と共にその時の感情等が記憶されている。エピソード記憶が特定の場所や時間に関係した記憶であるのに対して, 意味記憶は一般的な知識や情報についての記憶である。「三人称単数形現在時制では動詞に-sをつける」, 「be 動詞は主語が I の場合は am になる」のような英文法についての知識は意味記憶である。手続き記憶とは「無意識・自動的に機能する記憶」のことである。楽器を演奏する時, 運動する時, そして母語を使用する時にこの記憶は用いられている。この記憶は同じような体験に繰り返し従事することによって獲得される。行動が記憶に反映されているのが手続き記憶の特徴である (太田, 2021)。

学習者が英語をコミュニケーションのために使用することができるようになるためには, 手続き記憶の獲得が求められる。英語指導者の役割は, 手続き記憶の獲得を促す機会を授業内に創出することであると実践者は考えている。「英語は習ってから使うものではなく, 使いながら体験的に学習するもの」という実践者の持っている学習観 (体験的学習観) を受講生が獲得するような指導を心掛けている。

言語学習観はそれぞれの学習者の学習経験に基づいて形成されており比較的, 安定している。これを変容するためには長期的な教育的介入と省察の機会が必要である。実践者が担当する授業は, 受講生同士のコミュニケーション活動を重視している。実際に英語を使うという経験を通して受講生が徐々に体験的学習観を育むように働き掛けている。彼らが教壇に立った時に, 教員による説明中心の授業ではなく児童同士が英語で伝え合う活動を中心とした授業を行えるようになって欲しいと考えている。

実践者は担当するすべての授業において省察を重視している。実践者の経験に基づいた判断になるが, 多くの受講生はプレゼンテーション等の課題に従事した後, 終了時の達成感と安堵感のため改善点を検討する機会を失ってしまう。成長を実質化するためには自らの実践内容を省察する機会が不可欠である。しかし, 漠然と自分の実践を振り返って感想を述べるように指示しても効果は限られている。省察を効果的に行

うためには、省察を行うための基準点（reference point）が必要である。基準点を意識することによって、成長を促す効率的な省察が可能になる。基準点に基づいた省察の機会を提供するためのツールとして、J-POSTL エレメンタリーを使用した。

1.2 実践の概要

2021 年度前期に実施した。実践を行ったのは「英語 I」という授業科目名で共通教育の選択英語授業である。受講者数は 64 名で、彼等の英語力は CEFR の基準で A1 から B1 レベルであった。A2 レベルの受講生が最も多かった。共通教育の英語科目であるが、受講生の大半は卒業後に小学校教諭になることを強く希望していた。授業実践力を高め自らを振り返るためのツールをして J-POSTL エレメンタリーを使用した。受講開始時に同ポートフォリオを紹介する動画を視聴し、理解を深めた。

本実践では同ポートフォリオ中の「自分自身について」、「自己評価記述文」、「用語集」を扱った。「自己評価記述文」は A-1（やり取り）と A-2（発表）を重視した。詳細については次節で説明する。

2. 実践内容の詳細

2.1 ポートフォリオについての説明

初回の授業を J-POSTL エレメンタリーに対する理解を深めるための時間とした。ポートフォリオを用いた省察を通して自らを成長させるという経験がある学生が受講生であれば、配布して目を通しておくように指示するという指導で十分だと考えられる。しかし、ポートフォリオを活用して省察させることによって、自らの気づきを促し成長をもたらすという指導は、欧米と比較すると日本では一般的ではないように実践者は感じている。受講開始時にポートフォリオ活用の価値を内在化するための時間確保が必須である。

配付後、J-POSTL エレメンタリー紹介動画¹を全員で視聴した。これにより J-POSTL エレメンタリーの概要を短時間で効率良く理解することができたと思われる。その後で、同ポートフォリオの使い方を説明した。説明は、ポートフォリオ中の「本書の使い方」（pp. 4-6）²を利用した。実践者の経験に基づいての判断になるが、ポートフォリオ使用開始時の説明は受講生のその後の取り組みに大きな影響を与える。

説明後は「自分自身について」（pp. 7-8）の記述を行うための時間とした。授業時間内に終了しなかった受講生には、翌週までに記述を終えておくように指示した。受講生全員に対して「英語学習・授業実践・研修等の記録」（pp. 64-68）の箇所を記述するように指示した。また、履修生対象の「自己評価記述文」を熟読し、内容を理解しておくように指示した。

2.2 自己評価記述文の使用法

受講開始時（4月上旬）に履修生対象の記述文全項目に回答するように指示した。理解できない場合は時間をかけて考えるように指示したが、回答を強制しなかった。本実践の受講生は大学2年生であり、教育実習をまだ経験していない段階であった。学習指導要領や教科の指導法（英語科）に関する授業も受講していない段階での実践であった。熟考した上で判断できない場合は、無回答でも良いという指示を出した。

自己評価記述文は受講生に深く考えることを促すための材料である。過去の学習経験等を振り返りながら省察することを促すツールである。しかし、実践者がこれまでに行った実践では、ひとつひとつの項目について深く考えることなくとりあえず義務的にチェックしてしまう受講生がいた。この傾向は、ポートフォリオ使用開始直後に行う第1回目の回答の際に強いと実践者は感じている。これについてはある程度は避けられないと考えるべきである。ポートフォリオを用いた授業を受講することによって受講生は一つ一つの自己評価記述文を、自身のこれまでの英語学習経験等を振り返りながら検討する力を少しずつ身につけていく。

自己評価記述文は複数の時点で記入することによって自らの成長を確認することができるようになってきているが、第一時点での回答よりも第二時点での回答の方が、数値が高くなっていないといけないというものではない。J-POSTL エレメンタリー紹介動画内で説明されているように、省察する能力が高まった結果として第二時点で評価の数値が下がることはよくあることである。省察力の向上がもたらされた結果、適切な評価ができるようになったと解釈すべきである。

ひとつの授業ですべての自己評価記述文を深く扱うのは不可能である。本実践では「II 教授法 (Methodology)」(pp. 16-26)中の「A. 話す活動 (Speaking)」に焦点を当てた。「A. 話す活動 (Speaking)」は「A-1. やり取り (Spoken Interaction)」(p. 17)と「A-2. 発表 (Spoken Production)」(p. 18)で構成されている。それぞれ6項目ずつで合計12項目である。

受講生の多くが話すことの指導に対して自信がないと受講開始時に述べていた。また話すことの指導技術を身につけたいと思っている受講生が多かったことを考慮し、この12項目に焦点を当てた。毎回の授業の中で、自己評価記述文について話し合いを行う時間を確保した。毎回の授業で一つの自己評価記述文を扱った。「A-1. やり取り (Spoken Interaction)」の自己評価記述文を一つ例に挙げて手順を示す。

- (1) 児童を話す活動に積極的に参加させるために、協同的な雰囲気を作り出し、具体的な言語使用場面を設定できる。

自己評価記述文を提示し、「自己評価記述文に書かれている内容を達成するために

は何をしたらいいと思いますか？」という指示を与えてペアで話し合いを行わせた。話し合いの後で、何組かのペアを指名して話し合った内容を報告させた。「A. 話す活動 (Speaking)」には自己評価記述文が12項目あるので、15回のうちの授業の12回でこの活動を行ったことになる。学生による発表に対してフィードバックは与えたが、実践者が模範解答を提供するという事はしなかった。前述したように自己評価記述文は、省察を促すための道具である。教師が「この自己評価記述文を達成するためには〇〇をすればよい」のような説明を行ってしまうとそこで受講生の成長はそこで止まってしまう。受講生の省察力が向上すれば同じ問いを与えられてもそれに対する反応は変わっていくのである。受講生による発表の後で実践者が模範解答を提示しないということに対して、当初は受講生が戸惑っていたようである。毎回の授業終了時に提出させたリフレクション・ペーパーに、「どうしたら達成できるのかを具体的に説明して欲しい」と記述していた受講生がいた。これに対しては翌週の授業で実践者の意図を丁寧に説明した。具体的には、「模範解答は存在しないこと」、「同じ自己評価記述文を読んでも自分自身が成長すると捉え方が変わること」、「自分自身のこれまでの経験を振り返りながら深く考えることがこの活動の目的であること」を、受講生に伝えた。

授業内では話し合いのみ行ったが、15回目の授業終了時にすべての項目を読み返し、それぞれの項目に示されている内容を達成するために何をすべきと思うかをレポートとして提出させた。必要であればこれまでに自分が受けた英語の授業について触れるようにという指示をした。以下に紹介する3つの例は、(1)を達成するために何をしたらいいのかを受講生が提出したレポートの中からの抜粋である。

- (2) 友だちと話さないといけないゲームを用いる。例えば、ビンゴの中に英語で質問がかかれています、友だちに聞かないとビンゴができないというゲームを用いて、児童一人一人が積極的に参加できる雰囲気を作る。また、グループ活動や、ペア活動をし、まずは話すことに慣れる活動をする。
- (3) 私のいた小学校は、英語の授業を視聴覚室で行い、そこにあるテレビを使って映像を見せて、英文と日本語訳、そしてその使用場面を視覚的に教えており、その方法が素晴らしいと感じたため、映像を使った視覚的な情報を活用した授業を展開したいと思う。
- (4) まず、ペアやグループでの活動を積極的に導入する。その際、What fruit do you like? や、Do you like English? など、活動をする際に行う会話をあらかじめ紙に書いて黑板に提示することで、児童が何について話すのか、どの様な英語を使ったらよいかを簡単に理解し、グループ活動が充実することで授業に積極的に参加するのではないかと考える。

具体的な内容については2.4で説明するが、受講生は毎回の授業で英語をコミュニ

ケーションのために使用する活動に従事した。またペアで自己評価記述文について話し合いを行う際は、これまでの自分自身の英語学習経験を振り返りながら話し合いを行うようにという指示を出した。(2), (3), (4)からは、実践を行った授業内で自分自身が体験したことや小学校で自分が体験した時のことを振り返りながら、(1)を達成するために何をしたらいいのかを熟考していることが窺える。

次に「A-2. 発表 (Spoken Production)」の自己評価記述文に記述されていることを達成するために何をすべきかについて受講生がどのように回答したのか、(5)の自己評価文を例に挙げて紹介する。

- (5) 少ない語彙や非言語コミュニケーションを用いて積極的に話す力を育成するための活動を設定できる。

上記の自己評価記述文を達成するために何をしたらいいのかに対する回答はさまざまであったが、ジェスチャーについて触れている受講生が最も多かった。例を二つ紹介する。

- (6) 身振り手振りをを用いて、少ない語彙でも相手に伝わることを知ってもらう活動をする。そうすることで、積極的にその授業で身振り手振りを使うようになり、次の授業からも児童が率先して身振り手振りを活用するような授業をすることを心がける。
- (7) 「言葉だけでは相手に伝えたいことの半分も伝わってないんだ」ということを生徒に繰り返し語りかけ、非言語こそ大切だということを教え、自分が教卓で何かを教えるときもジェスチャーを使って見本を見せることで、実際の対面の活動に生徒自身が取り入れやすくする。

母語を含めて自然なコミュニケーション場面では、非言語的要素が大きな役割を担っている。英語学習初期の段階から児童に非言語的要素の大切さを教えて、話すことに対する積極性を養うことは小学校英語指導者の大切な役割である。

自己評価記述文をどのように利用するかは各実践者が決めることである。本実践では、省察力を高めるためのツールとして自己評価記述文を利用した。受講生が自らの学習経験等を振り返り、深く考える機会を提供することができたと思われる。

2.3 小学校英語科の授業に対する理解

本実践の受講生は小学校5・6年生の時に外国語活動を受けているが、教科として英語を学び始めたのは中学校に入ってからである。小学校における英語科の授業は、教師による説明ではなく児童同士の活動を中心としたものであるべきだと実践者は考え

ている。2020 年度より小学校で実際に使用されている英語の教科書（*NEW HORIZON Elementary English Course 6*）を用いて、実践者が授業内で小学校の英語科の授業を再現した。受講生は小学校 6 年生になったつもりで、実践者が再現する 45 分間の小学校の英語科の授業を受けた。

小学校の英語科の授業を再現する際に重視したのは、受講生同士が英語を用いてコミュニケーション活動を行う機会を十分に確保することである。教室を自由に歩き回って³なるべく多くのクラスメートと英語でやり取り（interaction）するように指示した。実際に受講生に行わせたコミュニケーション活動の一部を表 1 に示す。

表 1
コミュニケーション活動の例

Unit	教師の指示	目標言語形式
2	Please ask your classmates what they usually do.	(A) What do you usually do on Sunday? (B) I usually watch TV on Sunday.
	Please ask your classmates about their treasure.	(A) What is your treasure? (B) My treasure is my bike.
8	Please interview your classmates and write down their answers.	(A) What school event do you want to enjoy? (B) I want to enjoy a school festival. (A) What are you good at? (B) I am good at playing the piano.
	Please interview your classmates about what club they want to join and what they want to be in the future.	(A) What club do you want to join? (B) I want to join the table tennis club. (A) What do you want to be in the future? (B) I want to be a teacher.

活動を行う際はワークシートを配布し、聞いた内容を記入するように指示した。コミュニケーション活動後は何名かの受講生を指名して、インタビューをしたクラスメートのことを紹介させた。

受講生が従事したコミュニケーション活動は、小学校6年生を対象としたものである。実践内で扱った言語形式を知らない、または理解できないという受講生はいなかったが、最初のころは活動後の振り返りの際に、「知っていることなのに実際に使うのは難しかった」、「話すときはワークシートを見ながらになってしまった」のような内容を記述していた受講生が複数いた。

1.1 で触れたように、英語をコミュニケーションのための手段として用いることができるようになるためには、手続き記憶の獲得が求められる。では手続き記憶はどのようにして獲得されるのであろうか。意味記憶を持った状態でそれを使うという活動に繰り返し従事することによって、手続き記憶は徐々に獲得されていくのである。本実践ではほぼ毎回の授業で何らかの形でコミュニケーション活動に従事させた。繰り返し実施することによって、英語使用に対する積極的な態度を養うことができた。

2.4 レポート課題

15回目の授業終了時に「この授業を受講することによってどのような気づき、発見がありましたか」という内容でレポートを提出させた。受講生が提出したレポートの一部を紹介する。

- (1) 授業での生徒たちの活動を具体的に考えることで、将来教師になった時の授業の進め方などをイメージすることができました。
- (2) 児童が英語に慣れ親しむためには、苦手意識を与えないために文法など細かい事に着目して指導するのではなく、英語を使ってコミュニケーションをしようとする姿を評価することが重要だと考えました。
- (3) 子どもたちに授業をする際にも、「間違えても大丈夫」という雰囲気作りができるよう声かけを行い、子どもたちがお互いの意見や考えにより、さらに学びを深められるようにしたいと感じた。

実践を通して小学校で英語を指導するための何が必要なのかを学ぶことができたという内容が最も多かった。多くの受講生が(2)や(3)のように英語を使おうとする態度を育てることの重要性、間違いを恐れずに英語を使おうとする大切さについて触れていた。これは実践者が英語を指導する際に常に重視している点である。英語は使いながら学んでいくもの、つまり体験的に学んでいくものである。小学校英語指導者が理解しておくべきことである。13名の受講生が振り返りレポートでポートフォリオについて触れていた。

- (4) これから、もっとポートフォリオの使い方を詳しく知りたいと思いました。
- (5) 英語という科目での成績の判断基準や良い授業方法を、ポートフォリオを使って

教えてくださったのも、将来指導案や授業計画を立てる上で重要となるので、これからも手元において復習したいと思った。

- (6) ポートフォリオでは、まだ想像の内ではないけど、私の中で子ども達がいかに英語を、身につけることができるか活動ができるか、これまで受けてきた小中学校の英語の授業でやっていたことを振り返り一生懸命考え、英語の授業での工夫やポイントをおさえ、意識を高めることができました。

将来、小学校で英語を指導するための必要となる資質・能力を習得するために J-POSTL エレメンタリーが役に立つということを多くの受講生が感じたようである。ポートフォリオを拠り所として省察を行うことによって、漸進的かつ着実な成長がもたらされることを受講生に伝えることができたと感じている。

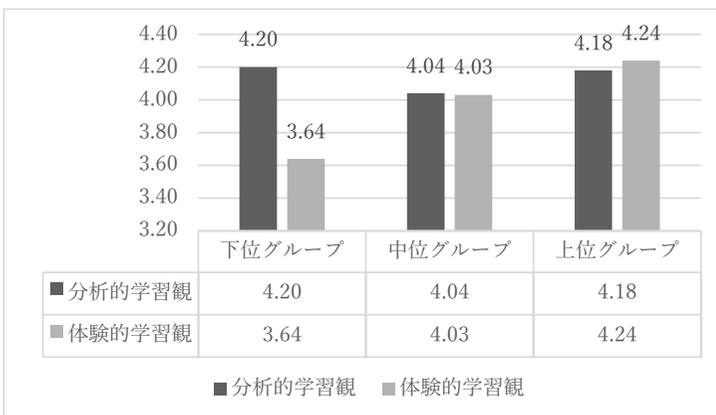
3. まとめと今後の活用計画

本実践の受講生は、2022 年度前期に実践者が担当する「子ども英語」の授業を受講する予定である。2022 年度前期の実践では以下の二点に焦点を当てる予定である。

一つ目は受講生の学習観を教育的な介入によってより望ましいものへと変容させることである。小学校英語指導者は児童が活動に従事することが中心となる授業を行うことが求められている。それを行うためには教員自身が体験的な言語学習観を持つことが望ましいと実践者は考えている。図 1（檜垣・岩中，印刷中）は 73 名の学部生を調査参加者として実践者らが行ったアンケート結果である。

図 1

言語学習観と英語コミュニケーション能力



図中の下位グループはCEFRの基準でA1レベル以下の学生である。上位グループはB2以上である。英語コミュニケーション能力が高い学習者は、体験的学習観が高いという傾向が確認できる。これと同様の結果をOgawa and Izumi(2015)も報告している。

二つ目は記述文に対する自己評価の変化を明らかにすることである。本実践において、受講生は4月上旬と7月下旬に履修生対象の記述文全項目に回答した。しかし2.2で触れたように、4月上旬は自己評価記述文の持つ意味を深く考えることができていなかった受講生もいたと考えている。実際、評価がなされていない項目がいくつかあった。これに対して、7月下旬はすべての項目に対して評価が行われていた。2021年7月下旬の自己評価と2022年7月の自己評価を比較し、なぜそのような評価を行ったのかについて考えさせる機会を授業に取り入れる予定である。

注

- 1 紹介動画 http://www.waseda.jp/assoc-jacetenedu/JPOSTL_Elementary_Video.mp4 を参照。
- 2 『小学校英語指導者のポートフォリオ（J-POSTL エレメンタリー）』中のページ番号を示す。
- 3 コロナ禍のため、15回の授業のうちの5回がオンラインでの実施となった。オンラインで授業を行った際は、ブレイクアウトルームに5名ずつの受講生を振り分け、グループ内でコミュニケーション活動に従事するように指示した。

謝辞

本実践を行った授業の受講生の皆さんに感謝します。

参考文献

- 太田信夫(2021)。「認知心理学における顕在記憶・潜在記憶の研究」鈴木涉, 佐久間康之, 寺澤孝文(編著)(2021)。「『外国語学習での明示的・暗示的知識の役割とは何か』3-16. 東京:大修館書店。
- 檜垣英夫・岩中貴裕(印刷中)。「言語学習観と英語コミュニケーション能力—体験的学習と分析的学習」『山口学芸研究第13号』
- Ogawa, E., & Izumi, S. (2015). Beliefs, strategy use, and confidence in L2 abilities of EFL learners at different levels of L2 proficiency. *JACET Journal*, 59, 1-18.

初等教科教育法（英語科）における J-POSTL エレメンタリーの活用： 省察の促進と授業改善に活かすために

高木 亜希子（青山学院大学）

要旨

2021 年度前期の初等教科教育法（英語科）（3 年次配置・2 単位・必修）において、J-POSTL エレメンタリーを活用した。本稿では、省察の促進と授業改善を主たる目的とした活用方法と、履修生の活用状況や認識について概観する。活用したセクションは、「自分自身について」「自己評価記述文」「用語解説」である。初回では「自分自身について」を用いた。第 2～12 回では、授業で学んだことの省察のために、また第 13～15 回の模擬授業では、授業計画・実践と省察のために「自己評価記述文」を用いた。「用語解説」は 3 回に分け、授業外課題として扱った。本実践により、個人の省察の促進にはある程度の成果が見られたが、協働的省察のための話し合いの時間の確保とフィードバックの充実に関して課題があり、改善の必要性が示唆された。

キーワード

省察 授業改善 模擬授業 自己評価 初等教科教育法

1. 実践の背景と概要

1.1 実践の背景

実践を行った大学は II 学部から成り、筆者が所属している教育人間科学部は教育学科と心理学科で構成されている。教育学科 | 学年の定員は 188 名で、幼稚園教諭 | 種免許状、小学校教諭 | 種免許状、中学校教諭 | 種免許状（国語・社会・英語）、高等学校教諭 | 種免許状（国語・地理歴史・公民・英語）の取得が可能である。毎年教育学科の 3 割以上の学生が小学校教職課程を履修し、2020 年度の小学校教諭 | 種免許状取得者は 68 名であった。中学校の英語科教職課程も同時に履修する学生も数名いるが、ほとんどが小学校のみの履修である。

小学校教諭 | 種免許状で、免許法施行規則に定められている科目である「外国語コミュニケーション」として、1 年次に「Oral English I」を 2 単位履修するが、この科目は学部の必修の外国語科目でもある。教科に関する専門的事項として、「初等英

語概説」(2年次配置・2単位)、各教科の指導法として「初等教科教育法(英語科)」(3年次配置・2単位)が開設されている。その他に小・中・高等学校の外国語(英語)教育に関する科目やゼミは開講されていない。「初等英語概説」の担当者は1名、「初等教科教育法(英語科)」の担当者は筆者を含めて2名である。「初等教科教育法(英語科)」は、3コマ開講されており、筆者は前期と後期で各1コマ(計2コマ)を担当している。本科目は2019年度の入学者より必修となり、筆者は彼らが3年生になった2021年度に初めて開講された。

実践者は、民間の語学学校、公立小学校で児童を対象に英語指導を行った経験があり、2007年度から小学校の現職教員研修に携わるようになった。2010年から大学で小学校の英語指導に関する教職科目を担当している。同時に2007年度から中学校外国語科(英語科)の教員養成及び教員研修に携わっている。特に関心のある研究テーマは、教師教育で、J-POSTLの編集委員の一人であり、2012年度から中学校・高等学校の英語科の教職課程で使用してきた。この経験から、小学校教職課程においても履修生の省察の促進と成長に役立つと考え、2021年度前期から初めて使用することにした。

1.2 実践の概要

初等教科教育法(英語科)(2単位・必修)の前期・後期の授業においてJ-POSTLエレメンタリーを使用した。本稿では、前期に焦点を当てて報告する。履修生は、18名(3年生17名、4年生1名)であった。扱ったセクションは、「自分自身について」「自己評価記述文」「用語解説」である。主たる使用目的は、省察の方法を学ぶことと、模擬授業における授業者として個人による省察とクラスでの話し合いにおける協働的省察の視点を明確にすることであった。J-POSTLエレメンタリーはシラバスに組みこみ、評価資料の一部として使用した。また、履修生の自己評価記述文に対する省察の根拠と用語の理解度、活用に対する認識を把握することで、2022年度に向けて授業改善に役立てることも意図した。模擬授業の話し合いを除いて、全て授業外の課題として使用した。使用教科書は、樋口忠彦他編(2017)『新編小学校英語教育法入門』、Aiba Chizuko 他(2016) *Hello English*で、模擬授業用の教材は、*Let's Try! 1*, *Let's Try! 2*, 検定教科書 *NEW HORIZON Elementary 5*, *NEW HORIZON Elementary 6*であった。J-POSTLエレメンタリーに関する課題の提出やアンケートの回答は、全学で使用されている教育基盤システム CoursePower を利用した。なお、本実践報告におけるデータの使用については、受講生からの許可を得ている。

2. 初等教科教育法（英語科）での活用例

2.1 授業の構成と J-POSTL エレメンタリー使用の概要

授業の構成と J-POSTL エレメンタリー使用の概要は、表 1 に示すとおりである。15 回の授業のうち、第 1 回はオンデマンドで、各自が J-POSTL エレメンタリーの紹介動画を視聴し、Word ファイルで「自分自身について」のセクションの記入と提出を行った。また、文部科学省作成の『小学校の外国語教育はこう変わる！前編・後編』の動画を視聴させ、感想を掲示版に記入してもらい、クラスメイトと共有した。

表 1

授業の構成と J-POSTL エレメンタリーの使用

回	授業テーマ	J-POSTL エレメンタリーの 授業外課題
1	オリエンテーション J-POSTL エレメンタリーと省察/ 小学校の外国語教育について	J-POSTL エレメンタリーの動 画の視聴/「自分自身につい て」の記入
2	外国語教育の目的と目標	
3	コミュニケーション能力と異文化間能力	I 教育環境 A. 教育課程 B. 目 標とニーズ/用語解説 (1)
4	指導者の役割, 資質と研修/教材の構成と内容	I 教育環境 C. 言語教師の役割
5	第 2 言語習得の基礎/ 児童に適した外国語教授法(1)	用語解説 (2)
6	児童に適した外国語教授法(2)	用語解説 (3)
7	言語材料と 4 技能の指導 聞くこと(1)	
8	言語材料と 4 技能の指導 聞くこと(2)	
9	言語材料と 4 技能の指導 話すこと	II 教授法 A. 話す活動 C. 聞 く活動
10	言語材料と 4 技能の指導 読むこと・書くこと	II 教授法 B. 書く活動 D. 読 む活動
11	指導目標, 年間指導計画の立て方/ 授業過程と学習指導案の作り方	IV 授業計画 A. 学習目標の設 定
12	評価のありかた, 進め方	III 教授資料の入手先
13	模擬授業(1) 3・4 年生	
14	模擬授業(2) 4・5 年生	
15	模擬授業(3) 5・6 年生	V 授業実践

第2～12回は、対面1回、オンデマンド1回、Zoomによるオンライン9回の形態で行われた。毎回、授業の冒頭(約15分)で、*Hello English*を使用し、教室英語に慣れ親しむようにした。その後、各テーマに沿って、ペアでディスカッションをしながら、理論について学ぶとともに、活動の体験及び文部科学省作成の授業動画視聴を通して、実践への理解を深めた。課外の課題として、授業で扱ったテーマに関連する教科書の章を指定して読んでもらい、掲示板に授業の振り返りを投稿させた。第2回の授業で冊子版のJ-POSTL エレメンタリーを配布し、CoursePower のアンケート機能を用いて、「自己評価記述文」と「用語集」のセクションから課題を出した。

第13～15回は、対面で模擬授業を実施し、「自己評価記述文」のセクションを使用した。また、最終レポートにおいて、授業を振り返り、今後の展望について記述する際に、J-POSTL エレメンタリーの使用に関する意見も含めるように指示した。

2.2 「自分自身について」の活用

第1回に「自分自身について」記入させ、これまでの英語学習経験を振り返るとともに、教職課程や教育実習に対する期待や不安について言語化させた。また、小学校英語指導者の資質・能力について、履修生自身が考えることで、現時点でどのような認識をもっているのか、教師が把握することも意図した。本項目については、履修生同士で話し合うことが推奨されているが、話し合いができなかったため、記入した項目についてなぜ重要と考えるか、理由を記入させた。セクション全体において、履修生により、非常に詳しく記入しているものもあれば、そうでないものもいた。

今回、オンデマンド授業だったため、時間が確保できなかったが、資質・能力については、新たな視点を得るために、履修生同士での話し合いの必要性が感じられた。また、初回と最後の授業の2回、話し合う機会を設けることで、資質・能力に関して挙げられた項目の重要度に対する認識が変化すれば、履修生と教師の両方が授業での学びを確認できるだろう。

2.3 授業の振り返りとしての「自己評価記述文」の活用

「自己評価記述文」の分野・領域の中から、授業で扱った内容に関連する自己評価記述文を教師が複数選択し、CoursePower のアンケート機能を使い、授業外の課題として6回の自己評価を行わせた。本課題の目的は、授業で得た知識を振り返り、理論について理解を深めたり、自身が教壇に立った時をイメージして具体的な内容を考えることであった。同時に、教師の視点からは、履修生がどの項目に難しさを感じているか把握することも意図した。したがって、5段階の自己評価のみならず、それぞれの判断の根拠を書いて提出してもらった。扱った分野は、4分野7領域30項目であった。各回で選択した分野・領域と自己評価記述文の項目数は以下のとおりである。

- 第3回 I 教育環境 A. 教育課程（2項目） B. 目標とニーズ（4項目）
 第4回 I 教育環境 C. 言語教師の役割（4項目）
 第9回 II 教授法 A. 話す活動（4項目） C. 聞く活動（2項目）
 第10回 II 教授法 B. 書く活動（2項目） D. 読む活動（3項目）
 第11回 IV 授業計画 A. 学習目標の設定（4項目）
 第12回 III 教授資料の入手先（5項目）

例えば、理論に関して、「I 教育環境」「A. 教育課程」の「4. 英語を学習することの意義を理解できる」の回答を見てみよう。全体の自己評価の割合は、3（23.5%）、4（23.5%）、5（52.9%）で、1と2を選択しているものはおらず、概ね理解していると言える。その判断の根拠を確認すると（表2）、履修生1の記述から、授業での説明だけでは十分に納得できていないことがわかる。また、履修生2は、100%理解しているわけではないことから、4と判断している。5と判断している履修生3は、英語を学ぶ意義を具体的に述べている一方で、履修生4は授業での説明に納得しているという理由を述べており、判断の根拠を書かせることで、省察の内容が可視化される。

表2

英語を話すことの意義の自己評価と判断の根拠

履修生	自己評価	判断の根拠
1	3	英語を学習する意義は理解しているが、近年の技術の発達により、その説明では納得できないところが出てきたから。
2	4	英語を学習することの意義をすべて理解しているとは言えないと考えるため。
3	5	世界共通語としての英語を学び話せるようになることはこれからの時代を生きる上で必要不可欠だと思うから。
4	5	英語を学習することの意義はこれまでの授業で納得できる説明を受けているため。

別の例として、具体的指導に関して、「II 教授法」「C. 聞く活動」の「2. 児童が英語を聞く前に、教材のトピックについて持っている経験や関連知識を使って内容を予測するよう指導できる」の回答を見てみよう。全体の自己評価の割合は、1（18.8%）、2（6.3%）、3（31.3%）、4（31.3%）、5（12.5%）で、履修生によって、ばらつきがわかる。履修生5は、授業で児童の立場を経験しても、実際に教壇に立たないと児童の反応がわからないため、厳しく1と評価している。履修生6は、授業中の体験により指導のイメージはあるが、自分が教えた経験がないため、3と判断してい

る。履修生 7 は、5 と判断しているが、自身が指導できるか否かについての言及はなされていない。これらの記述から、具体的な指導のイメージがあっても、自身が指導した経験がない場合、厳しく判断する履修生がいることがわかる。また、高い自己評価をしていても、その根拠について深く省察できていない場合があり、判断の根拠を確認する必要がある。なお、12 回までの授業では、自己評価記述文について話し合う時間は設けなかった。話し合いをすることで、自己評価記述文の背景にある資質・能力や授業力の理解が深まり、判断の根拠もより明確化されると推察される。

表 3

児童の経験や関連知識を使った聞く内容の予測の指導の自己評価と判断の根拠

履修生	自己評価	判断の根拠
5	1	これまで授業の中で、大学生が子どもの役割をして授業の流れを学ぶことはあったが、実際に子どもがどのようなリアクションをし、どんな知識を持っているのかは、子どもを相手にしないとわからない面があると思うから。
6	3	授業で子どもの聴くリスニングの英語量が意外と多く、教師のサポートが大切であることはわかっているが、指導の経験はしたことがないため 3 にした。
7	5	導入として児童の興味・関心を引くために必要であり、そうすることによってよりよい授業にすることが可能であるから。

2.4 模擬授業における「自己評価記述文」の活用

第 13～15 回の授業では、指定教材に基づきペアで 45 分の指導案を作成し、15 分の模擬授業をできるだけ英語を使って行ってもらった。「V 授業実践」（「A. 授業案の使用」「B. 内容」「C. 児童との交流」「D. 授業運営」「E. 教室での英語」）の 14 の自己評価記述文からペアで 3 つ程度選択し、自己評価記述文を意識して指導案を作成した。選択した自己評価記述文は指導案にも記載し、模擬授業後の履修生同士の話し合いの際にも使用した。児童役の履修生は授業内で各ペアに対するコメントを記述し、教師がコメントを集約して各ペアに渡した。

模擬授業は動画撮影をした。各自が動画を視聴し、以下の 3 点について記述してレポート課題として提出した。

- ①自己の教授行動の分析とその改善策：動画を視聴し、自己評価記述文、及びクラスメイトからのフィードバックと照らし合わせながら、自身の授業を振り返り、分析と改善点を記述する。
- ②授業設計：授業計画の際に意識・工夫したこと及び、同じ授業をもう一度行う場合、

学習指導案や活動のどの箇所についてどのような修正を行うかを記述する。

③模擬授業を通して学んだこと：模擬授業の準備、実践、省察を通して学んだことを記述する。

9 ペアのうち、1 ペアは 4 つの自己評価記述文を選択し、残りの 8 ペアは 3 つの自己評価記述文を選択した。選択された自己評価記述文は、表 4 に示す 8 種類であった。

表 4

「V 授業実践」から履修生が選択した自己評価記述文

選択された自己評価記述文	選択ペア数
A. 1. 児童の興味・関心を引きつける方法で授業を開始できる。	5
B. 1. 授業内容を、児童の持っている経験、知識、身近な出来事、文化などに関連づけて指導できる。	6
C. 1. 児童中心の活動や児童間の交流を支援できる。	6
D. 1. 個人学習、ペア活動、グループ活動、クラス全体などの活動形態を工夫できる。	1
D. 2. フラッシュカード、図表、絵などの準備や視聴覚教材を活用できる。	4
D. 3. ICT などの教育機器を効果的に活用できる。	3
E. 1. 英語の教科内容や学習の方法などを、視覚的ヒント、ジェスチャー、デモンストレーションなどを利用して英語で指導できる。	1
E. 3. 児童が授業活動において英語を使いたくなるように設計し指導できる。	2

一方、選択されなかった自己評価記述文は、以下に示す 6 種類である。

A. 2. 個人活動、ペア活動、グループ活動、クラス全体など、状況に応じて学習の形態を柔軟に調整できる。

A. 3. 授業案に基づいて柔軟に授業を行い、授業の進行とともに児童の興味・関心に対応できる。

A. 4. 児童の集中力を考慮し、授業活動の種類と時間を適切に配分できる。

A. 5. 本時をまとめてから授業を終了することができる。

C. 2. 授業開始時に、児童が授業に注意を向けることができるように指導できる。

E. 2. 英語を使って授業を展開するが、必要に応じて日本語を効果的に使用できる。

各ペアが選択した自己評価記述文が指導案に記載されていたため、各ペアが重視した視点は、児童役の履修生と共有されたが、模擬授業後の履修生同士の話し合いでは、

自己評価記述文に特に言及されず、多角的な視点で議論が行われた。また、レポート課題においても、自己評価記述文について明確に言及し、それぞれに対応する形で記述していたのは3名のみであった。授業計画、授業実践後の話し合い、各自の振り返りの各段階において、一貫して自己評価記述文に焦点を定めるためには、より一層明確な指示をすることの必要性が明らかになった。

2.5 「用語解説」の活用

「用語解説」は、第3回、5回、6回の計3回に分けて、課題として読んでもらった。J-POSTL エレメンタリーの編集・運営委員である山口氏の実践からヒントを得て、それぞれの項目について、「解説を読む前に用語の意味をほとんど理解していた」「解説を読んで用語の意味を理解した」「解説を読んでも用語の意味が理解できない点がある」の3つの選択肢から選ぶ形式で、アンケートの回答をしてもらった。

「解説を読んでも用語の意味が理解できない点がある」が選択されたのは、「学習ストラテジー」「受容語彙」「評価尺度」(各1名)、「ポートフォリオ学習」(2名)の4項目のみで、ほとんどの項目は、解説を読めば理解できることがわかった。「解説を読んで意味を理解した」を8割以上の学生が選択した項目は、多い順に、「コア・カリキュラム」(100%)、「オーセンティック」(100%)、「社会文化的能力」(100%)、「発信語彙」(100%)、「受容語彙」(94.4%)、「スキニング」(94.4%)、「学習ストラテジー」(94.1%)、「プロジェクト学習」(88.2%)、「スキミング」(88.9%)、「英絵辞典」(88.2%)、「形成的評価」(88.2%)、「言語活動」(83.3%)、「学習リソース」(82.4%)、「言外の意味」(82.4%)の14項目であった。この課題は、履修生に用語の理解をしてもらうとともに、実践者の観点からは、アンケート調査に基づき用語の理解度が把握できた。今後2~3回、同じ課題の実践とアンケート調査を実施して傾向を把握した後は、本課題を授業で課すことは辞め、履修生になじみのない用語だけを抽出して、授業で適宜言及する予定である。

2.6 最終レポートにおける J-POSTL エレメンタリーの使用に関する履修生の認識

最終レポート課題として、前期の授業を振り返り学んだことと、今後外国語活動・外国語科を指導するにあたり、授業で学んだことをどのように活かしたいか、今後の展望を記述させた。その際、授業における J-POSTL エレメンタリーの使用(「自分自身について」、「自己評価記述文」に基づいた振り返り、「用語解説」)についての意見も含めるよう求めた。18名の履修者のうち、14名が J-POSTL エレメンタリーについて言及していた。履修生の記述のテーマ分析をしたところ、「J-POSTL エレメンタリーの活用による学び」と「J-POSTL エレメンタリーの活用の課題」の2つのテーマに大きく分けることができた。「J-POSTL エレメンタリーの活用による学び」については、言及した履修生が多い順に「授業計画・実施・評価の視点の明確化」(9名)、

「自己の強みと課題の把握」（5名）、「用語の理解の促進」（5名）、「成長の可視化」（3名）の4点が挙げられた。

「授業計画・実施・評価の視点の明確化」については、実践の経験がなく、自己評価が難しいことを言及する履修生もいたが、英語指導者として必要な資質・能力が明確になり、授業計画と実践の際や自身の授業を振り返ったり、他者の授業を評価したりする際にも視点が明確化されることが述べられた。

J-POSTL エレメンタリーに関しては、使用することで、英語の指導するに当たって何に留意すべきでどのような力が必要なのかが分かり、その力を自分がどれくらい持っているかやどこをもっと勉強すべきなのかと自分を振り返ることの出来る教材であり、教師を目指す学生にとってとても助けになるものだと感じた。

「自己の強みと課題の把握」については、実践者が意図したとおり、毎回の授業テーマに関連した項目について、理解の確認と自己の強みと課題の把握ができていた。

J-POSTL エレメンタリーは、項目ごとに振り返りをすることで、毎時の授業で理解できた点とそうではない点、また、現時点の自己の課題を明確にすることができたため、使用してよかったと思う。

また、下記の2つの引用が示すように、強みと課題の把握は、授業力向上や成長につながることを指摘している履修生もいた。

J-POSTL エレメンタリーをしっかりと毎回記入していくことによって自身の長所や改善点がわかるため、授業の向上や教師の成長につながると思う。

「教員としての成長」について、J-POSTL エレメンタリーの活用が大きかった。このポートフォリオを使うことで、自分の不足している能力に気付けたし、今後どのような能力を伸ばしていけば良いかの指針となったと感じている。

「用語の理解の促進」については、「用語解説のページでは、曖昧だった用語を正しく理解し直すことができた」とあるように、用語解説を読むこと自体が理解につながったことが述べられた。また、次の引用に見られるように、授業の文脈の中でも用語に触れることで、理解が深まっていたことがわかる。

J-POSTL エレメンタリーの利用について、最初は解説を読まなければ理解することができなかった言葉も今では言葉を聞いただけで理解できるまでになっ

た。それは、授業の中で、先生が何度も口にしていたことや授業内で多く取り上げられていた事柄であるからだ。

「成長の可視化」については、記録に残すことによって、英語指導に対する自身の理解度や考え方が可視化されることが言及された。また、本授業のみならず、実習や課外のボランティア活動でも使用したい旨を述べる履修生もいた。

授業内での J-POSTL エレメンタリーの使用によって、自分の理解度や考え方の変化が分かりやすくまとめられて記録しやすかったと感じる。今後実習やボランティアに行った際にはまた記録をして、過去の自分との変化が生まれているか確認できる良い資料となった。

「J-POSTL エレメンタリーの活用の課題」については、4 名が言及したが、下記の例に見られるように、全て自己評価の難しさに関することであった。

ほとんど実践経験がない状態での評価だったため、具体的な事例を思い浮かべられなかったりして、正しい評価ができなかった部分もあるが、授業を計画するときや実施するとき気を付けるべきポイントが明確になったので、とても参考になった。（下線筆者）

3. まとめと今後の活用計画

本稿では、省察の促進と授業改善を主たる目的として、J-POSTL エレメンタリーを活用した授業について、その活用方法と履修生の活用実態や受け止めを概観した。個人の省察の促進については、ある程度成果が得られたが、2 点改善が必要である。1 点目は、授業中における指導者の資質・能力及び自己評価記述文に基づく話し合いの時間の確保である。本実践の結果、個人の省察のあり方には、履修生によってばらつきがあり、他者の別の視点を得て個人の省察を深めるため、協働的省察の機会を増やすことの必要性が示唆された。また、模擬授業の話し合いにおいても、自己評価記述文を十分に活用できたとは言い難いので、趣旨の説明と指示を明確に行いたい。

2 点目は、フィードバックの充実である。今回の実践では、指導者からのフィードバックが十分にできなかった。例えば、第 2～12 回の授業で記入してもらった自己評価と判断の根拠を、次の授業のクラスで共有し、他者の振り返りの視点を知って、話し合いにつなげることで、1 点目の課題とも関連づけて、省察を深化させ、授業の改善をすることが可能となるであろう。

指導者と教職履修者の橋渡しとしての J-POSTL エレメンタリー

長田 恵理（國學院大學）

要旨

筆者は外国語科が必修となる以前から、教職課程の外国語指導法の授業においては学生に振り返りを促し、適宜フィードバックを行いつつ、期末には学生が作ったポートフォリオの提出を課していた。しかし、コアカリキュラムが発表される前のことであり、その指導内容は筆者個人の経験のみに基づくものであった。2017 年、現行の『小学校学習指導要領』が告示、コアカリキュラムが策定され、この二つの指針に沿うように「J-POSTL エレメンタリー」ができたことで、指導内容の骨子がより明確になった。本稿では教師教育者である筆者の実践と学生の振り返り内容を示しながら、どのように学生の振り返りを授業で取り上げ、学生への Feedback をし、また、自身の指導内容を軌道修正していったかについて記述する。

キーワード

小学校外国語教育 教職課程 J-POSTL エレメンタリー 省察

1. 実践の背景と概要

1.1 実践の背景：対象の学生について

筆者の勤務する大学は 2021 年度現在、文系学部のみ 5 学部を擁する中規模大学である。このうち、文学部では以前より中高国語科・社会科の教員を多く輩出しており、「教職の國學院」と呼ばれてきた。2009 年 4 月に初等教員養成課程を擁する学部を新設し、小学校教員を目指す初等教育学科のほか、中高保健体育の免許取得を目指す健康体育学科、幼稚園教諭免許および保育士資格の取得を目指す子ども支援学科が置いている。初等教育学科は定員が 100 名であるが、系列短期大学から 2 種免許を持って編入してくる学生が 14 名ほどいる。健康体育学科の学生は中高保健体育の免許取得を条件に小学校教員免許を取得することも可能である。一方、初等教育学科では主免許が小学校教員免許になるが、これをベースに保健体育・国語・英語・社会・特別支援の教員免許も取得することが可能である。初等教育学科では学部創設時、すなわち外国語（英語）が教科ではなかったころから「児童英語基礎指導論」という科目を必修

とし、小学校教員が英語を指導することを見据えていた。2019年度からは新しいコアカリキュラムに沿って、指導に関する科目は「初等科教育法（外国語）」が教員免許取得に必要な科目として2年次必修であるだけでなく、専門的事項に関する科目としてコアカリキュラム上は選択必修となっている「外国語概説」が学科のカリキュラム上で3年次必修科目となっている。また、共通教育の英語として、1～2年次に週1コマ（2単位）の授業があるが、こちらは汎用的な英語の授業であり、英語指導を目的としたものではない。今回の実践で対象とする学生ではないが、2017年度に「児童英語基礎指導論」を受講した学生に実用英語検定所持級を尋ねたところ、108名の回答者のうち、3級25名、準2級34名、2級8名であった（長田，2022）。

筆者は児童英語講師と並行して、2000年に文部科学省による「地域ですすめる子ども外国語学習の推進」事業の委嘱を受けた北関東にある0市での英語指導に携わり、のちに2005年度に英語教育特区となってからは担任教員とのTTで小学校での英語指導員として1～6年生までのシラバス作成や指導をした。筆者自身の指導経験から、ただ経験を積むだけでなく、実践で迷いや躓きを感じたときに戻っていきべき理論が大切であり、省察を通した理論と実践の往還が欠かせないと考え。これまでの指導法指導においても、理論を説明するテキストを使用しつつ、経験に基づく指導を行ってきたが、J-POSTL エレメンタリーを使用することで、教職課程の学生が考えを整理しやすくなるだけでなく、教師教育者としての自分にとってよりどころになると考えた。

1.2 実践の概要

本稿で紹介する実践は2つある。いずれも指導法に関する科目の「初等科教育法（外国語）」の授業であるが、1つは2020年度、もう1つは2021年度のいずれも前期に行われた授業である。

表1
実践の概要

	2020年度	2021年度
授業形態	すべて遠隔（ZOOM）	5月を除き、対面
受講者数	約150名（3クラス展開）	113名
使用版	試用版 Google forms	完成版 冊子
使用箇所	自分自身について 自己評価記述文 94項目	自分自身について 自己評価記述文（主にⅡ教授法）

筆者は以前より、指導法に関する授業において、学生に学びを可視化させることを

目的として、配布資料と受講生各自がとったノートをフォルダに挟み込む自作ポートフォリオを最終課題として提出させて評価の対象としていた。しかし、省察の観点や方法について明示的に指導していたわけではなかったため、詳細にわたってメモを取り、省察の文言が書かれているものもあれば、配布資料に申し訳程度にメモが書かれているものまで、実に様々な成果物があつた。このことから、省察の方法・観点を広く授業学生に認知してもらい、全体的な学びの深まりを目指して、J-POSTL エレメンタリーを使用することにした。具体的な実践内容については次のセクションで述べる。

2. 実践事例

2.1 事例Ⅰ：ZOOMによる全面遠隔授業の中での指導例

2020 年前期は、すべての授業が遠隔授業となり、演習の要素が強い指導法の授業も例外ではなかった。オリンピックイヤーであったため特別に 13 回に設定されていた学期であったが、これにコロナによる緊急事態宣言のために学期開始が遅れたため、合計 12 回の授業となった(表 2)。策定されたコアカリキュラムに沿って作成した電子シラバスは J-POSTL エレメンタリーの記述については特に明記されていないが、授業開始後に「オンラインポートフォリオについて」と題した説明書を配布するとともに、2 度省察を行うこと、および、記入内容は評価の対象とはならないが、記入すること自体は課題として評価の対象になることを伝えた。

表 2

2020 年度前期 「初等科教育法(外国語)」の学修内容

1	小学校外国語教育の歴史 小学校外国語活動・外国語科のめざすもの 【課題】小学校教員として外国語(英語)を指導する際に大切だと思われる資質・能力について記入
2	小中高等学校の実践と連携 小学校の外国語教育の役割 児童や学校の多様性とユニバーサルデザイン 【課題】J-POSTL エレメンタリー記入①
3	第二言語習得の特徴(1) インプットとアウトプット 音声から文字への過程
4	第二言語習得の特徴(2) 目的, 場面, 相手に配慮したコミュニケーション
5	クラスルームイングリッシュ ティーチャートーク ティームティーチングのあり方

6	年間指導計画・単元計画・1単位時間の学習指導案作成の考え方
7	評価について
8	3年生の外国語活動の実践（ICTの活用を含む）
9	4年生の外国語活動の実践（ICTの活用を含む）
10	5, 6年生の外国語科の実践（ICTの活用を含む）
11	読む活動・書く活動へ導く指導 【課題】J-POSTL エレメンタリー記入②
12	教科内容を取り入れた活動・CLIL

初回授業後の課題として、「自分自身について」p.8の「小学校英語指導者の資質能力について」の記入を課した（記入例は図1を参照）。第2回の授業でこの結果を示し、英語力や英語指導力、異文化間理解能力などにまとめられることを共有したうえで、実はもっと多様な、あるいは詳細にわたる資質能力があり、J-POSTL エレメンタリーの記述文がそうした資質能力を示していることを紹介して、この回の課題として記入を促した。

図1

学生が書いた「資質・能力」例（「英語」に関するものの例）

● 英語で自分を表現することができる。
● 英語と日本語の違い（ニュアンス・文化・歴史・背景）を理解している
● 英語に対して苦手意識を持つ児童を減らすことができる
● 英語に対する興味を引き寄せられる力
● 英語に馴染みがない生徒に興味を持ってもらえるような工夫ができる
● 英語の歌をうまく授業に取り入れ、子どもに興味、関心を持たせることができる。
● 英語の会話を素早く理解することができる。
● 英語の楽しさを伝えられる
● 英語の正しい発音ができる

記入は Google forms で作成されたものを使用し、翌週には、学生の記入をもとに平均値を棒グラフであらわしたもの（図2）を示しながら、これからの学修について全体で確認した。なお、この実践は試用版を用いたものであるが、利便性を考えて番号は完成版のものを用いる。平均値が低かった記述文は、

- I-A-2. 学習指導要領に従って、小学校英語の教育課程や年間指導計画を立案できる。
- IV-A-6. 予期できない状況が生じたとき、授業案を調整して対処できる。
- IV-C-3. 授業中、児童の注意をそらすことなく授業に集中させることができる。

であり、逆に平均値が高かった記述文は、上位から3つ取り上げると

I-B-4. 英語を学習することの意義を理解できる。

I-C-3. 同僚や授業見学者からのフィードバックを受け入れ、自分の授業に反映できる。

I-C-4. 授業や学習に関連した情報を収集できる。

であった。この授業は2年生の前期必修であり、他教科でも指導法の授業は始まったばかりの時期であったことから、自分で授業を作りまたは調整することについてイメージすることが困難であった可能性がある。一方、「英語を学習することの意義」についてはこの省察をする直前の授業で扱っている内容である。また、9を「他者の意見を聞いて自分のものとする」、10を「資料収集」と読み替えれば教科教育に特化したものではない汎用的な能力でもあるので、具体的にイメージすることができたことが平均値が高かった理由かもしれない。

図2

学生に示したグラフ

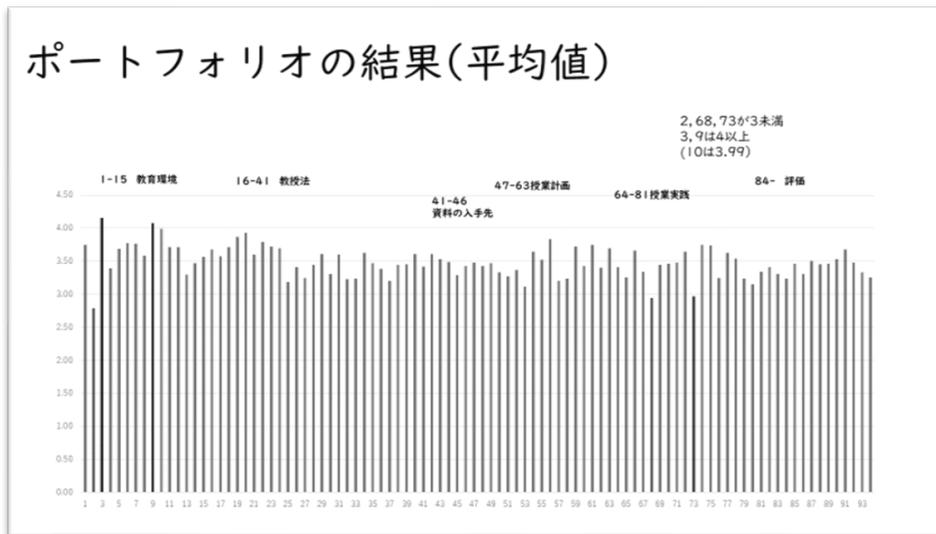


図3は第1回省察と第2回省察の平均値を比較したものである。前年度シラバス作成時にはグループごとの模擬授業を考えていたが、完全遠隔が決定し、学生は大学に入構することもままならなかった。学生が自宅等で模擬授業を行って動画を提出させ

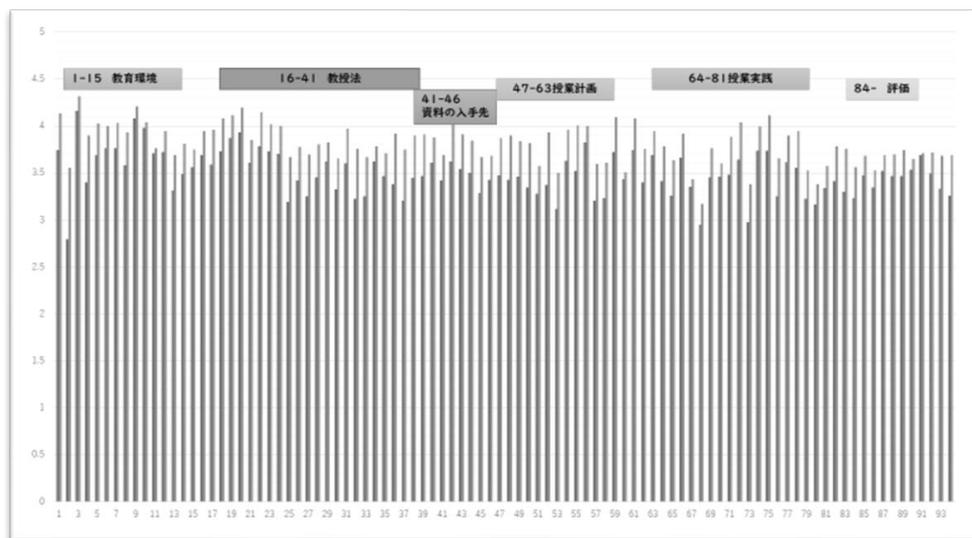
ることが考えられたが、指導者側にとっては150人以上の学生の動画を一つ一つ見てフィードバックを与えることは現実的ではないと考え、実施は見送り、インターネット上にある授業や、大学の授業で見せることの許可を得ている筆者が撮影した授業映像を見せて学びを記述させたりすることで代替し、45分の指導案は最終課題として提出させた。第2回の省察もGoogle formsで行ったため、前回自分がどの数値を選んだのかは見にくい（学生によっては第1回記述の写しを見ながら書いた可能性は排除できない）状態での記入であったと考えられるが、全体的に平均値は上がっている。

第2回の省察時は、学生にはいくつかの質問をしている。「記入をしてよかったこと」については以下のような回答が得られた。

- 自分が授業をして適切な評価までできるか、今の実力が分かった。
- 外国語を指導するときのポイントがわかった。
- 今までの授業で身についたことが確認できた。
- 思いつかなかった観点があったので、そこを意識しようと思えた。
- 授業においてどの観点から児童や自分を評価するのか知ることができた。
- 自分の変化を確認できる点。
- 1回目は実際の場面を想像しながら書いたのだが、2回目は1回目より現実的に捉えて考えることができるようになった。自分の成長を可視化することができて、良かった。

図3

省察の平均値の比較（青：第1回，オレンジ：第2回）



一方で、記述文数が 94 であることが学生の負担となっているような感想も見られた。中には、「同じような文が何回も出てくる」と書いている学生もいた。これに関しては例えば「興味・関心」をキーワードにすると、

- II-C-1. 児童の興味・関心に適した教材を選択できる。(教授法 - 聞く活動)
- II-D-3. 児童のニーズ, 興味・関心, 到達度に適した教材を選択できる。(同 - 読む活動)
- II-G-1. 英語学習をとおして, 自分たちの文化と異文化に関する興味・関心を引き起こすような活動を設定できる。(同 - 文化)
- III-2. 児童の年齢, 興味・関心, 英語力に適した教材を選択できる。(教授資料の入手先)
- IV-A-1. 児童のニーズ, 興味・関心を考慮し, 学習指導要領の内容に沿った学習目標を設定できる。(授業計画 - 学習目標の設定)
- IV-B-1. 児童のやる気や興味・関心を引き出すような活動を設定できる。(同 - 授業内容)
- V-A-1. 児童の興味・関心を引きつける方法で授業を開始できる。(授業実践 - 授業案の使用)
- V-A-3. 授業案に基づいて柔軟に授業を行い, 授業の進行とともに児童の興味・関心に対応できる。(同 - 授業案の使用)

があるが、最後の二つを除いてそれぞれが異なるカテゴリーにあり、場面が異なる。これは筆者の説明不足に起因するものと考えられ、今後、J-POSTL エレメンタリー使用開始前に適切な指導が必要であることを痛感した。

2.2 事例 2：対面授業において記述文を限定しての指導例

2021 年度前期の初等科教育法(外国語)の授業は、対面形式で行われることになったが、緊急事態宣言が再び発令されたため、5 月のみ遠隔授業となった。また、オリンピックが延期になったことに関連して、半期 14 コマの授業となった。今回のシラバスは以下の通りである。

表 3

2021 年度のシラバス

1	オリエンテーション 小学校外国語教育の歴史・外国語活動外国語科の目指すもの
2	小学校の外国語教育の役割・中高等学校の実践と連携

	児童や学校の多様性とユニバーサルデザイン クラスルームイングリッシュ
3	第二言語習得理論・インプットとアウトプット 目的・場面・相手に配慮したコミュニケーション 気づきを促すティーチャートーク
4	年間指導計画・単元計画 一単位時間の学習指導案作成の考え方 3年生の外国語活動の実践（ICTの活用を含む）
5	ティームティーチングのあり方 4年生の外国語活動の実践
6	3, 4年生の活動 micro-teaching
7	5, 6年生の外国語科 聞く・話す
8	音声から文字への過程 5, 6年生の外国語科 読む活動・書く活動へ導く指導
9	CLIL(内容言語統合型学習)について 評価について
10	外国語科指導案作成(グループで1つ) Tutoring
11	NHE6年生のUnit5,6を中心に (CLIL)
12	5, 6年指導 micro-teaching (各グループ説明も含めて持ち時間10分)
13	5, 6年指導 micro-teaching (各グループ説明も含めて持ち時間10分)
14	模擬授業の全体でのフィードバック 補足 まとめ

J-POSTL エレメンタリーは冊子の完成版を使用し、初回の授業で渡して、「自分自身について」(p.8)の記入を宿題とした。翌週は、資質・能力についてまずそれぞれが考えて記入したのち、グループで考えを共有し、確認と補足説明を行った。記述文については、主に「II教授法」に特化し、自己評価を行う記述文は、指導者である筆者が授業内容に合わせて以下のように選択し記入させた。なお、カッコ内の数字は記述文数である。

第7回 A.話す活動(12) C.聞く活動(4)

第8回 D.読む活動(3) B.書く活動(2) *評価理由を記入

第11回 F.語彙(2) G.文化(2) *各セクションで1記述文を選んで理由を記入

第13回 III授業実践 A.指導案の使用

第14回 A.話すことA-I やりとり(5)

*第7回で記入したなかで、A-Iの教職課程生用のみ取り上げ、2回目の記入

第 11 回ですべての記述文ではなく 1 つ選んで理由を書かせたのは、記入に多くの時間を与えることができなかつたことに加えて、すべてとすと思いつかない場合があるかもしれないが、「選んで」とすれば理由が思い浮かぶものを率直に書けるのではないかと考えたからである。自己評価の理由については例えば、読む活動については、指導者が毎回絵本の読み聞かせをしていたことにつなげて「できる」としていたり、書く活動についても同様に、授業でのフォニックス学習が現場で活かせるから「できる」と評価しており、授業内容が今後の実践に生きると予測している例が見られる一方で、「～な活動を設定できる」のような記述文に対して「自分自身が苦手なので考え付かない」と自分の英語能力をもとに判断している例も散見された。ポートフォリオに記入をしない日は別途、学生が各自用意しているルーズリーフに自由に振り返りを記入してもらった。指導者は、ポートフォリオや自由記述について、おおよそ 2 回に 1 度程度の頻度でランダムにコメントを入れるようにした。興味深いコメントや時折書かれている疑問については授業内で取り上げ、共通理解を図るようにした。

2.3 推察される指導効果と課題

2021 年度の実践では最後にアンケートは実施していないため、学生自身が J-POSTL エレメンタリーを使ったことに関してどのように感じたかを直接知ることはできないが、2020 年度を受講生の意見をまとめると「成長を可視化できること」「成長を見る際の多様な観点を知ることができること」を良い点だと考えている。未来の指導者にとって省察することはもちろん大切であるが、省察の方法・観点を知らなければ次の指導に活かすことはできないと考える。将来教員になってからはもちろんのこと、学生同士であっても例えば模擬授業について自己・他己評価をする際にも共通の観点があることによって「伝わる」言葉(用語)を用いて説得力のある評価を与えることができるのではないだろうか。また、教師教育者にとっても 2 つの面で有効であると考ええる。1 つ目は、学生の振り返りを読むことによって指導内容がしっかり伝わっているか、それも正確に伝わっているかどうかを見ることができる。そのためには、数値評価だけでなく、なぜその数値を選んだのかの理由を含め、自由記述も有効だと考える。また、筆者は指導経験者であるからか自分の経験に頼りがちになってしまうが、J-POSTL エレメンタリーという指標があることによって、重点を置くべきところがより明確になったと考える。

課題としては、些末なことかもしれないが冊子の扱いがある。使いたいときに「忘れられました」と言われるのを避けるため、また、記述を点検し適宜フィードバックを返すために、筆者の授業では宿題にした初回以外は毎度、冊子を回収していた。結果、学生は授業時間にしか冊子を開かず、また授業時間に記入したページ以外をじっくり見る時間を取るができなかつたため、2021 年度の学生は全体を見通せていない。

3. まとめと今後の活用計画

筆者は、以前より、振り返りを含むポートフォリオの作成を学生に課し、それぞれが学びに責任を持つことを求めてきたが、2020年度および2021年度はJ-POSTL エレメンタリーを使用して、学生の学びが深まるように、時に気づきを促す声掛けをしながら、記入を促した。受講生は概ね、J-POSTL エレメンタリーを用いて自己の力を様々な観点から見る省察の方法を知ったと考える。また、教師教育者にとっても、指導内容をより一層多面的に検討できる指針となっている。筆者が一番大切にしていることは、学生が記述したことに対し、何らかの方法でフィードバックを返し「見ていますよ」ということを伝えることであるが、毎回全員に返しているわけではないにせよ、100名を超える受講生がいるため、フィードバックにかかる時間は相当なものになる。全体で共有したい場合は授業時間に口頭で伝えているが、個別のフィードバックの方法に関しては効率的で効果的な方法を再考したい。この2年を通して、もう1点筆者自身をもっと丁寧にすべきであったと考える点は、J-POSTL エレメンタリーを使う意義をもっと詳しく受講生に伝えることである。当該年度は、「J-POSTL エレメンタリー紹介動画(mp4版)」(JACET 教育問題研究会, 2021) が作成され、使用することができたにもかかわらず、時間の制約のため、授業中に見せることができなかったが、全体を見通し、省察の意義を伝えることの重要性を指導者として痛感しており、全15回の授業が行われる次年度からは紹介動画を活用したいと考える。

参考文献

- JACET 教育問題研究会 (2021). 「J-POSTL エレメンタリー紹介動画(mp4版)」
http://www.waseda.jp/assoc-jacetenedu/JPOSTL_Elementary_Video.mp4
- 長田恵理 (2022). 「初等教職専門科目での英語接触時間の確保—英語による指導力向上を目指して—」『人間開発学研究』第13号. 33-44.

自己評価記述文に対する理解を深めるために — 「外国語の指導法」における活用—

中山 夏恵 (文教大学)

要旨

本稿では「英語教育Ⅰ」において行った実践について報告する。本授業は、教育学部2年生を対象とした必修科目であり、コア・カリキュラムの「外国語の指導法」にあたる科目である。対象の学生は、本授業以外では、1年時に「英語概説」を8週間受講しているが、それ以外に英語教育関連の授業を受けた経験はない。また、英語教授経験もない。そこで、本授業では、J-POSTL エレメンタリーの自己評価記述文を授業の中心に据え、段階を踏んで記述文に対する理解を深められることを意図して授業を計画した。その結果、最終回に実施した自己評価記述文の自己評価が、27の記述文において有意に上昇した。これらの記述文は、授業での学びに関連するものであった。また、期末レポートの感想欄からは、学生がエレメンタリーを、成長のための指標として、また実践を振り返る際の観点として、活用する様子が観察された。

キーワード

自己評価記述文 改訂版ブルームのタクソノミー オンデマンド 模擬授業

1. 実践の背景と概要

1.1 実践の背景

「英語教育Ⅰ」は、筆者が所属する教育学部の小学校教職課程に設置された、半期2単位の必修科目で、2年生全員が受講する。本学の教育学部には、2つの課程（発達教育課程・学校教育課程）が設置され、専門性や取得できる免許の種類に応じて、計13の専修が準備されている。2021年度は全7クラスが設置され、受講生は、所属する専修ごとに割り当てられたクラスを受講する。筆者が担当したクラスはその中の1クラスで、受講生は、数学専修と理科専修に所属する学生53名であった。

本学のカリキュラムでは、コア・カリキュラムの「外国語に関する専門的事項」にあたる「英語概説」が、1年次科目として置かれている。そこで、受講生は、小学校の外国語教育に関する背景的な知識については学習しているが、実際の英語教授経験

はない。また、英語を専門とせず、英語に対する苦手意識がある者も一定数存在する。しかし、受講生の多くは、小学校教員を目指しており、教師として生涯にわたり自律的に学び続ける姿勢を持つことが求められる。加えて、コロナ禍によりオンラインで授業が中心であったため、学習者には受け身の姿勢から脱却し、今まで以上に主体的に学習に取り組むことが求められた。そこで「生涯学習の視点から『学び方を身につけること』を重視（JACET 教育問題研究会，2021）」する言語学習・教育観を持った J-POSTL エレメンタリー（以降エレメンタリー）を授業の中心に位置づけ、授業を展開した。

1.2 実践の概要

「英語教育 I」は、半期（15 週）科目である。本授業の目的は、以下のとおりである。

小学校外国語活動・外国語科の指導において指導者に求められる資質や能力を身に付けるために、外国語教授法、教材開発、第二言語習得理論、関連する領域について教材を通して考察するとともに、実際の指導において必要となる知識と技能を体験的に身につける。（シラバスより）

授業は、初回のみリアルタイムで実施し、それ以外の回はオンデマンド形式で実施した。学習管理には、株式会社朝日ネットによる manaba を利用した。オンデマンド形式の授業運営にあたり、受講生が孤独感を感じる可能性が考えられたため、他の受講生の存在を可視化したり、協同する場面を多く設けたりすることで学習コミュニティを形成できるよう意識した。具体的には、良くてきていた課題を授業のコンテンツページで紹介したり、manaba のプロジェクト機能¹を用いて小グループを作成し、グループ間で作成した課題の回覧やコメントをしあう機会を設けたりするなどである。なお、グループ編成は、半期間固定とした。

本実践において使用したエレメンタリーのセクションは、「自分自身について」と、「自己評価記述文」である。エレメンタリーを使用した目的としては、学びを深めるため、そして省察の方法を学ばせるためである。本科目の受講生は、全員が 1 年時に「英語概説」（1 単位 8 週）を受講し、学習指導要領の概観や英語教育に関する基本的な事柄については学習している。しかし、実践に結び付く体験は限定的であった。授業 13 週目に行う模擬授業においてエレメンタリーを活用するうえで、自己評価記述文（以降 SAD）の理解は不可欠であると捉え、授業では、まず SAD への理解を深めることを意識した。本稿では、授業内実践した SAD への理解を深めるための工夫と、模擬授業における活用について報告する。

2. 「英語教育 I」におけるエレメンタリーの活用

2.1 「自己評価記述文」の理解を深めるために—「自分自身について」と「自己評価記述文」の利用—

SAD への理解を段階的に深めることを目指し、授業を計画した。改訂版ブルームのタクソノミー (Anderson et. al., 2001; 以降タクソノミー) を参考に、行った活動の目標を分類したものが表 1 である。

表 1

改訂版ブルームのタクソノミーと SAD を利用した活動の目標の対応

授業 回	授業の流れ	記憶 する	理解 する	応用 する	分析 する	評価 する	創造 する
1	①「自分自身について」「4. 教師の資質・能力」について検討し発表 ②エレメンタリーに目を通し、アンケートに回答	②	②		②		
2	③アンケートで上がったわからなかった語について feedback ④第 1 回目のエレメンタリーの SAD を自己評価		③			④	
3~ 10	⑤授業で扱った項目と関連する SAD を授業内にて取り上げる		⑤				
11	期末課題の説明(模擬授業+振り返り)⑥模擬授業計画, 振り返りの際の観点として SAD を各 1~3 選定。				⑥		
13	模擬授業の実施						
14	⑦模擬授業動画に対するピア・フィードバック(SAD を参考に)				⑦		
15	教師によるフィードバック, モデル授業の視聴, ⑧SAD の自己評価(2 回目)記述文に回答・⑨2 回目の自己評価を比較し, 意識が特に変化した項目について記述				⑨	⑧	

2.1.1 「自分自身について」の利用（第1回授業）

初回授業では、「自分自身について」の内「過去の英語学習経験（p.7）」と「小学校英語指導者の資質・能力について（p.8）」についてまず個人で考え、オンラインで即時的に入力できる manaba のレポート機能に記入させた。その後、zoom のブレイクアウトセッションを用いグループごとに意見を共有させ、資質能力の内重要度の高いものとして挙げたものを集約しグループごとに発表させた。発表後、学生は、全167のSADに目を通し、オンライン・アンケートに回答することが求められた。アンケートでは、以下の3点について尋ねた。

- 1) 自分が挙げた資質能力と重なるものがあつたか。
- 2) 自分が身に着けたいと思う資質能力はどれか。
- 3) 記述文の中に、用語や内容についてよくわからないものはあつたか。

各活動の意図をタクソノミー（表1）と対応して説明する。まず、「自分自身について」を個人で取り組み、その結果をグループで共有する過程を通じ、SADの記述文を読むことに対するレディネスを高めることが意図された。加えて、メンバーの様々な経験や意見を聞くことで、記述文とメンバーや自分自身の経験との関連付けが促されることを期待した。アンケートでは、項目1)と2)は、自身の経験と記述文の分類・関連付けを明示的に促すため、3)は、記述文に対する理解の深化を意図した。表1では、これらのプロセス（②エレメンタリーに目を通し、アンケートに回答）を記憶する、理解する、分析するに分類した。ここでいう「記憶する」という段階に対応する動作動詞として、タクソノミーの動作動詞表では、リスト化する、みつける、関連付けるなどが挙げられている。そこで、②をこの段階に分類した。

アンケートを実施した理由として、筆者が学習者理解を深めるという目的もあった。項目1)の回答から、多くの受講生がSADに回答する前から「児童のやる気や興味を引き出す活動を設定できる」「児童の興味・関心を引く方法で授業を始められる」「児童の知的好奇心を考慮できる」など児童の興味関心に関する項目を重要な資質・能力と捉えていたことが明らかになった。本授業の受講生が教育学部の学生であり、全教科の指導法に関する授業を受講していることから、児童理解の重要性に対し高い意識を持っている様子が垣間見えた。加えて「学習指導要領の内容理解」を挙げた受講生も複数名いた。1年時に受講した「英語概説」をはじめとする「概説」科目による影響と思われる。項目2)（身に付けたい資質能力）では、回答は多岐にわたったが、「話すこと」に関わる記述文を挙げる受講生が多く、たとえば発音などに対するの不安感を挙げるものもあつた。項目3)の結果、多くの受講生が「わからない」と指摘した用語をまとめたものが、表2である。これらの語は、第2回授業において解説を行った。英語教育に特有の表現が多く含まれており、英語を専門としない本授業の受講生にとっては、なじみがなかったと判断される。

表 2

本受講生にとってなじみがないとされた用語

オーセンティック，学習ストラテジー，コア・カリキュラム，プロジェクト学習， 受容語彙，発表語彙，スキミング，スキヤニング，建設的フィードバック，フラッシュカード

2.1.2 「自己評価記述文」の利用（全授業を通して）

授業は全期間において SAD を活用しながら行った。前半では、授業の後半に実施する模擬授業に向けて、各 SAD の内容理解を段階的に深められるように意識した。そして、後半では、模擬授業の計画及び実践後の振り返りに関して注目する観点となる SAD を受講生自ら選定させた。以下に、本授業の流れと SAD の活用を 4 つの段階に分けて説明する。

(1) SAD の導入及び記述文の理解を深めるための活動

初回授業では、「小学校に英語指導者に求められる資質能力」に対する受講生のスキーマを活性化するために「自分自身について」を活用後、SAD を導入した（表 1①参照）。そして授業後に、導入されたエレメンタリーの理解を深めるため、宿題としてエレメンタリー紹介動画の視聴を課した。

第 2 回授業では、まず、わからない語として挙がった用語の解説を行った。その後、受講生は、小学校の教員に求められる授業力や英語力について筆者による授業動画を視聴し、SAD の内、筆者により選定された 94 記述文に回答することが求められた（タソノミーでは「理解」と「評価」に分類）。

(2) 授業内容と関連する SAD の内容確認

第 3 回から第 10 回には、英語教育に関わる様々なトピックを取り上げた。たとえば、学習指導要領の内容理解、4 技能の指導、教材選定、授業の計画、学習評価などである。受講生は、これらのトピックに関する動画を視聴し、課題を行うことが求められた。授業動画の中では、関連する SAD を取り上げ、学習した内容と関連付けしながらその内容について改めて考える時間を設けた。

(3) 模擬授業に向けた活用（注目する SAD の選定）

第 11 回は、それまで学習した内容を踏まえつつ模擬授業に向けての準備を行った。授業では、指導案の作成について扱った。また、期末課題に向けた説明を行った。期末課題は、以下のとおりである：①指定された Unit の学習指導案の作成（導入時に行

う Small Talk の台本を含む) ②模擬授業の実施(冒頭の Small Talk 部分を動画で撮影し提出) ③自身の模擬授業動画を視聴し振り返りのレポートの作成。そこで第 11 回授業では、これらのプロセスを振り返るための観点として SAD から各自が注目したい記述文を選定することが課された。具体的には、指導案を振り返る際の観点、また、Small Talk を実施する際の観点をそれぞれ最大 3 つの記述文を選ぶことが求められた。学生が自分にとって重要と思われる観点を一連の課題を行うプロセスにおいて常に意識することを期待し、選定する SAD の数を限定した。課題提出時に設けた授業の感想を書く自由記述欄には、SAD に関連した意見が 9 件(全 53 件中)寄せられた。5 件は、SAD を授業実践等に活用する意欲、3 件は、SAD を改めて読み直した際に感じた視点の変化、1 件は、授業計画における有用性に関するものであった。視点の変化について書かれた意見からは、2 回目となる SAD の通読では、1 回目の自己評価をした時と比べ、より教師としての視点を意識する様子が観察された。

そして、第 13 回授業では、各自が自身で選定した SAD の観点に基づき、指導案の作成と、Small Talk の動画を作成・提出した(模擬授業の実施)。

(4) 模擬授業の振り返りのための SAD 利用

14 回、15 回授業では、期末課題(自身の模擬授業についての振り返りレポートの作成)に向け、自らの実践に対する異なる解釈を得る機会を設けることが有用であると考えた。そこで、異なる視点に出会える機会として、様々なフィードバックを取り入れた。

1 つ目は、ピアからのフィードバックである。14 回授業では、半期間共にグループワークを行ってきたグループメンバーの授業動画を視聴し合い、manaba プロジェクト内にあるグループ共有のコメント欄に、コメントし合った。浅岡(2019)は、「実践の場がまだ少ない教職課程履修性の場合、他の人の授業実践を観察し、振り返ることはリフレクティブ・プラクティスの導入として取り入れやすい活動」(p.86)であると説明する。ピア・フィードバックでは、参考として、Small Talk 実践に関する SAD を教員が選定し、観点として提示した。

2 つ目は、教員によるフィードバックである。第 15 回授業では、manaba のコメント欄機能を用いてそれぞれの模擬授業動画に対し教員がフィードバックを行った。これらの 2 種のフィードバックを踏まえ、学生は(3)において選定した SAD の観点から、模擬授業を振り返る期末課題に取り組んだ。

最後に、学生は、SAD に対する 2 回目の自己評価を行った。そして、1 回目の自己評価の結果を比較し、意識が特に変化した項目について記述した。

3. まとめ

本授業では、授業期間を通して SAD を利用した。授業前半は、各記述文の内容理解を段階的に深められることを目指した。授業の第1・2回には、記述文を自分自身やクラスメートの経験と関連付けながら理解できるように、第3回以降は、各講義の内容と関連付けすることで、知識との関連付けを通じて理解を深められるように意識した。授業の後半回（第11回～第15回）には、模擬授業における振り返りの観点として利用した。使用する観点は各自が自身の目的に応じて選定することで、模擬授業の計画段階から意識できることが期待された。そして、期末課題には、自身の実践を選定した SAD から振り返ることが求められた。

第2回授業と第15回授業に主な SAD の記述文の自己評価を行った。1元配置の分散分析と多重比較を行った結果、27項目において有意に高い結果が得られた ($p=0.05$)。これらの SAD の分野を見ると、Ⅰ教育課程 (5項目)、Ⅱ教授法 (14項目)、Ⅲ教授資料の入手先 (4項目)、Ⅳ授業計画 (1項目)、Ⅵ自立学習 (1項目)、Ⅶ評価 (2項目) であった。いずれも肯定的な変化であり、2回目の調査において意識の向上が観察された。有意差が確認された記述文は、模擬授業の計画・実施に関係するものが中心を占めた (聞く活動: 4記述文, 話す活動: 4記述文, 教材選定: 4記述文, フィードバックに関わる記述文: 3記述文など)。

2回目の SAD の自己評価と合わせて、変化した理由を尋ねた自由記述アンケートからは、全53件の意識が確認された。テーマごとに分類すると、「授業での学習や実践を通じて理解」という意識が28件と大半を占めた。自由記述には「実際の小学校の授業の様子を見させていただいたり、どのように『やり取り』の活動を取り入れるか模擬授業を計画しながら考えたことでこのように変化した」という意見があった。一方、「授業での学習や実践を通じてできないと実感」という意識 (15件) があがった。自由回答として「一回目の回答では想像だけで答えていて二回目に現実的に考えるとまだまだであると思ひ、一回目よりも大幅に変化したと思ひます。」などがあつた。これらの意見から、SAD の自己評価の結果は、上がった場合も下がった場合においても、学びの深まりの反映と解釈できるだろう。

期末課題の振り返りレポートに設けた授業の感想に関する自由回答欄には、全49件の意見の内エレメンタリーの有効性に関するものが6件観察された。SAD の内容が学びにつながつたというもの (2件)、自己評価の観点として意識するようになった (1件)、今後さらに学びを深める際の指針としての有効性 (3件) である。これ以外で、学習内容や模擬授業の振り返りについで、SAD にある文言を用いながら記述するものが3件 (「児童の意欲を高める目標の設定」, 「児童の教に関心を引く活動」, 「英語を使って授業を展開するが、必要に応じて日本語を効果的に使用」など) があつた。本授業において繰り返し活用することで、学生自身も、成長のための指標と

して、また実践を振り返る際の観点として、活用する様子が観察された。

注

1. 協働学習や PBL (Project Based Learning) 等をサポートするツール。教員は、学生 (生徒) を指定し、複数のチームを作成できる。作成されたチームごとにスレッドが作成され、課題もチーム単位で課することができる。(株式会社朝日ネット, 2019)

参考文献

浅岡千利世 (2019) . 「4. 授業観察を用いたリフレクション」 玉井健・渡辺敦子・浅岡千利世 (著) 『リフレクティブ・プラクティス入門』, 85-90. ひつじ書房.

株式会社朝日ネット (2019) . 「機能紹介」『manaba』

<https://manaba.jp/products/function/>

JACET 教育問題研究会 (2021) . 『小学校英語指導者のポートフォリオ (J-POSTL エレメンタリー) 』 <http://www.waseda.jp/assoc-jacetenedu/JPOSTLElementary.htm>

文部科学省 (2017) . 『小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 外国語活動・外国語編』

https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/fieldfile/2019/03/18/1387017_011.pdf

Anderson, L. W., Krathwohl, D. R., Airasian, P. W., Cruikshank, K.A., Mayer, R., Pintrich, P.R., Raths, J., Wittrock, M.C. (2001) . A Taxonomy for Learning, Teaching, and Assessing: A Revision of Bloom's Taxonomy of Educational Objectives. New York: Longman.

4 技能の指導を考える

—自己評価記述文「II教授法」を用いた実践—

中山 夏恵（文教大学）

要旨

本稿では、「英語教育2」における実践を報告する。教育学部の3年生を対象とした選択必修に位置づけられる本授業では、主に4技能の指導に対する理解を深めることを目的とした。授業では、各技能に2週にわたり注目し、1週目は、指導に関わる理論や原則の理解、2週目は、各技能に注目した活動例の発表とフィードバックを中心に展開した。エレメンタリーの使用箇所は、自己評価記述文の内、4技能に関わる32記述文（「II教授法」のA.話す活動B.書く活動C.聞く活動D.読む活動）である。これらを、1週目は、注目する技能に対する理解を深める際の指針として、2週目は、活動例へのピア・フィードバックの観点として利用した。まとめ回には、4技能の記述文を概観し、記述文の内容を実践する際の留意点や活動案についてグループごとに議論し、オンラインのパドレット上にまとめた。パドレットの記述からは、受講生が、授業を通じた学習内容や実践経験と記述文を関連付けて理解しようとする様子が観察された。

キーワード

自己評価記述文 II教授法 4技能の指導 パドレット

1. 実践の背景と概要

1.1 実践の背景

本実践で紹介する「英語教育2」は、教育学部の選択必修科目である。本授業は初等教科教育法科目に分類され、小学校で学ぶことになる10科目分が準備されている（国語科教育II、図画工作科教育IIなど）。筆者の所属する教育学部学校教育課程では、各教科を専門的に学べる専修が準備されており、これら10科目の内、自専修に係る科目は選択する必要がある。つまり英語専修生は「英語教育2」を必ず受講する。しかし、実際は、学生の興味関心や、卒業単位との兼ね合いなどから、自専修科目に加え、他専修科目の教育法科目を受講することも一般的である。本授業の配当年次は3年である。

2年次配当科目の「英語教育Ⅰ」（実践の詳細は、本誌に収録）の発展科目と位置づけられる本科目では、「英語教育Ⅰ」で学んだ内容を活用し、深めていくことが求められる。2021年度は、3クラスが開講され筆者はその内1クラスを担当した。

1.2 実践の概要

本実践は、2021年度秋学期に開講された「英語教育Ⅱ」において行ったものである。受講生は、3年生計52名である。その構成は、前年度、筆者が担当する「英語教育Ⅰ」を受講した英語専修生27名、そして、本授業で初めて筆者のクラスを受講する理科専修・体育専修の学生25名から成る。英語専修の27名は、前年度（2020年度）の春学期に「英語教育Ⅰ」の授業においてエレメンタリーを活用してきており、全体的な構成は理解している。しかし、2020年度春学期は完全オンラインであり、冊子版を手にするのは初めてである。また、前回の利用時から1年以上がたっている。それ以外の25名は、本授業で初めて手にしている。そこで、初回授業では、簡単にエレメンタリーの全体像を紹介した。しかし、実際の授業においては、授業の目的に沿うSADの「II教授法」の内4技能に関わるものを中心に活用した。

秋学期開始時には、コロナウィルス感染症の拡大の影響から、再びオンラインでの授業が課された。そこで、授業形態は、授業回の目的に応じて、オンデマンド（OD）とリアルタイム（RT）の併用とした。表1は、授業内容をまとめたものである。第4回から第11回は、4技能の内1つに注目し、2週にわたり取り上げた（たとえば、第4回・第5回はリスニングなど）。1週目は、オンデマンド形式にて注目する技能の指導法や関連する理論等を動画にて学び、課題として、学んだ内容を利用し、活動例の略案や教材を作成した。2週目は、1週目に学習した内容を体験的に理解することを目指し、既存の教材や授業実践動画を分析したり、1週目課題として作成した略案や教材をグループにて検討したりした。このように2週目は、発表や議論が中心となるためRT形式で実施した。なお、第6回から、対面授業への移行が可能となったため、授業計画に従い、RTを予定していた回は、対面へと移行した。

表1

「英語教育Ⅱ」の授業内容

授業回	主な内容	授業形態
1	導入（小学校外国語の目標と英語指導者に求められる資質・能力）	RT
2	子どもの発達と外国語学習	RT
3	指導原則と指導計画	RT
4	リスニング指導Ⅰ（理論や指導法を中心に）	OD

5	リスニング指導 2 (前回の内容確認, 教材分析, 活動手順の計画)	RT
6	スピーキング指導 1	OD
7	スピーキング指導 2	対面
8	リーディング指導 1	OD
9	リーディング指導 2	対面
10	ライティング指導 1	OD
11	ライティング指導 2	対面
12	4 技能の指導 (まとめ)	対面
13	模擬授業の準備	対面
14	模擬授業	対面
15	模擬授業の振り返りとまとめ	対面

授業では、エレメンタリーのうち「自分自身について」と「自己評価記述文 (SAD)」を活用した。SAD は、上述の通り「II 教授法」の内 4 技能に関わる 32 の SAD を中心に扱った。第 1・2 回授業では、受講生それぞれが授業を通じた目標を設定するため「自分自身について」を用いた。第 4 回から第 12 回授業では、講義の内容理解を深めるために活用した。具体的には、教員が授業内容を計画する際の指針として活用したり、活動例の発表の際のピア・フィードバックの観点として使用したりするなどである。そして、第 14 回には、クラスメートの模擬授業に対するピア・フィードバックの観点としても活用した。本稿では、主に、初回に行った「自分自身について」の活用例と、講義と関連した SAD の活用例を中心に報告する。

2. 「英語教育 2」におけるエレメンタリーの活用

2.1 「自分自身について」の指導例—目標設定のための活用

初回授業では、受講生それぞれが目指す教師像や、それを旨とするうえで必要になる資質・能力について考えることで、各自が本授業における目標設定ができることを目指した。授業では、まず、各自のティーチング・フィロソフィーを振り返るため、教師として、子どもたちに英語を学習する理由をどのように説明するか尋ね、グループ間で意見交換し、その結果を報告させた。

その後、学習指導要領 (小学校: 外国語活動・外国語科) の目標や、中央教育審議会 (2012) による『教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について答申』などを取り上げ、国として、小学校の外国語教育を通じてどのような力を育むことを目指しているか、これからの教師にどのような資質・能力が求められると

いわれているか確認した。しかし、いずれも枠組みを提示するものであり、また、英語教育に特化した教師の具体的な資質能力を考える必要性について言及した。

第2回授業では、エレメンタリーの「自分自身について」を導入した。「小学校英語指導者の資質・能力について」を活用し、これまで英語を教わってきたことを振り返り、良かったあるいは良くなかったと思う教え方や授業内容等を踏まえ、小学校教員として外国語（英語）を指導する際に大切だと思われる資質・能力とその重要度について、意見交換させた。その際、グループごとに、オンラインで共同的に書き込みができるパドレットのページを割り当て、議論の結果を図示させた（図2）。

図1

学生による小学校教員に求められる資質能力の図示例—パドレットを利用して—



作成したパドレットの図をグループごとに発表後、エレメンタリーを導入した。今後の使用に際し、エレメンタリーの概観の理解が重要と考え、紹介動画の内、開発の背景、理念、そしてその特徴を説明する箇所を視聴した（動画：00:44- 03:31）。そして変化の激しい現代社会においては、学習者に求められる能力も変化すること、教師自身も学び続ける必要性、「省察的実践家としての教師像」などに言及し、宿題として全てのSADの自己評価を課した。

2.2 4 技能の指導に対する理解を深めるために—自己評価記述文の活用—

第4回から第12回は講義の内容理解を深めるためにSADを活用した。授業では、4技能の内1つの技能に2週にわたって注目した（表1参照）。そして、第12回は4技能全てのまとめを行った。本稿2.2では、授業内での使用として第4・5回の実践と、第12回のまとめ回の実践を取り上げる。

2.2.1 第4・5回授業での活用―「リスニング指導」の内容理解を深めるために―

第4・5回授業において注目する技能は、リスニングである。そこで、2週にわたり、リスニング指導の内容理解を深めるためにSADを活用し、授業を計画・実践した。

第4回は、オンデマンド形式にて、リスニング指導の基本的な知識に関する動画を提示した。第4回授業では、SADを明示的には扱わなかった。しかし、第5回授業では、使用することになるため、注目するSADの内容理解につながる理論や指導法、用語等は、第4回授業において取り上げた。たとえば、トップダウン処理・ボトムアップ処理やそれらを意識した指導法、指導のプロセス、学習指導要領による「聞くこと」の目標やリスニング指導の留意点などである。このように、教師が授業で扱う内容を検討する際の指針としてSADを利用した。

そして、学習した内容の理解を深めるため、以下の2種の課題を課した。1つ目のレポート課題では、以下の2点を分析・検討を求めた（①筆者の提示した活動例が、ボトムアップ処理技術とトップダウン処理技術のどちらに重点を置いていると判断されるか、②リスニング指導（ここでは、While Listening活動）を行うとき、インプットを分かりやすくするためにどのような工夫ができるか。2つ目では、活動例の作成で、検定教科書（*New Horizon Elementary 5*: 東京書籍, 2019）の指定されたダイアログを用いてPre-Listening活動を計画することを求めた（図2）。

図2

リスニング活動例作成課題の概要

課題3:リスニングの活動例の作成

教科書Unit1またはUnit2のStarting outにあるダイアログを用いて活動例を計画しましょう。

提出先: Manaba プロジェクト

【設定】本時は第1時間目（全8時間）です。授業の展開部に行うリスニング活動(Starting Out)を円滑に進めるため、皆さんが先生だったらどんなpre-listening活動を行いますか？Pre-listening活動を計画し略案を完成させなさい。

(略案は、以下に添付する書式(テンプレート)に沿って作成しましょう。参考までに、下に張り付けますが、同じものは、プロジェクトにも添付します。黄色でハイライトされたセルに記入してください。なお、略案の頭の部分は、すべてpre-listening活動に関して書いてください。)

(参考テンプレート)

Unit1:



Unit1 Hello, friends_指導案.docx - 2021-09-30 15:26:14

Unit2:



Unit 2 When is your birthday_指導案.docx - 2021-09-30 15:26:30

第5回授業はRT形式で行った。本授業の後半には、ブレイクアウト・セッションを利用し、第4回の授業課題であったリスニング活動案をグループごとに発表し、ピア・フィードバックを行った。その際、観点として、以下を提示した。

- ・ 活動は、目的に沿っていたか
- ・ Starting Out のPre-Listening の役割を果たしていたか
- ・ 活動間 (Pre-Listening 活動と Starting Out 活動) のつながり
- ・ 児童の興味・関心に適した教材 (題材) を選択できる。(エレメンタリーⅡ教授法 C1)
- ・ 児童が英語を聞く前に、教材のトピックについて持っている経験や関連知識を使って内容を予測するよう指導できる。(エレメンタリーⅡ教授法 C2)
- ・ 児童が教材のポイントをしぼって聞くことができるような活動を計画できる。(エレメンタリーⅡ教授法 C3)

これらの観点の内、下の3つは、SADを活用したものである。リスニング活動に関わるSADは、4つ準備されているが、ここでは、本課題の目的に沿った3つを選定した。このようにフィードバックの観点としてSADを活用することで、学生が記述文を実践と関連付けながら解釈・分析できることが期待された。後半のピア・フィードバックを円滑に進めるため、授業前半には、注目するSADに含まれる概念や用語について改めて取り上げた。

第15回の前半は、前回の課題のフィードバックを中心に進めた。まず、課題①(リスニング活動がトップダウン・ボトムアップの内どちらの処理に重点を置いているか)は、模範解答と解釈のポイントを説明した。その後、リスニングの授業動画を視聴し、SADのC2(児童の経験や関連知識を使って内容を予測させる指導)に関連し、動画の指導者がPre-Listening活動としてどのような指導を行っているか、それがトップダウン・ボトムアップの内どちらの処理に重点を置いていると捉えられるかグループごとに分析し、発表した。続いて、課題②(While Listening活動を行う際、児童に英語を聞き取りやすくするための工夫について記述する)に対し、学生のレポートに書かれたアイディアの内良かったものを、筆者がテーマごとに集約し、全体で共有した。学生が提出したアイディアは、第4回授業で提示した指導上のポイントに関連したものが多く、筆者により選定された全27件の工夫の内、テーマとしては、題材の選定(2件)、注目する点の明示(3件)、聞き取りやすくする活動計画(5件)、視覚化して整理(3件)などがあがった。いずれも3つのSADを考える際に参考になる視点であり、SADの内容を具体的にイメージする手がかりとなることが期待された。

授業後半には、グループごとに分かれ、活動例の発表をした。その後、上記の3つ

の SAD を含む観点表を用いてピア・フィードバックを行った。その間、筆者は机間指導を行った。全メンバーの発表が終わったグループは、オンラインにて、本時の振り返り、指摘された内容と、活動を行った感想を書くことが求められた。感想には、グループメンバーの授業からの学びや、自身の授業に対する振り返り、もしくはその両方を書いたものが中心だった。以下は、感想の一部である（下線は筆者による）。

学生 A 「自身の活動案は、Teacher Talk やスキット形式にすることで、児童の興味・関心を惹くような活動案を考えることができた。また、本単元で重要となる表現を強調して発音することで、児童がポイントを絞って聞くことができるよう工夫した。」
 学生 B 「日本語でのコミュニケーションを背景知識として考えさせてから英語を導入していく、という流れはとても興味深かったです。」

それぞれの感想からは、授業を観察するとき、また振り返りの観点として、SAD が機能していることが観察される。

授業の最後に、筆者が指名した数名に全体の前で活動例を発表してもらい、筆者がそれぞれの活動についてフィードバックを行った。

2.2.2 第 12 回授業での利用—学習内容の整理と深化を目指して—

第 12 回は翌週からの模擬授業の準備に向けて、第 4 回から第 11 回授業に行った内容を振り返った。その後、学生は、4・5 人のグループ（全 11 グループ）に分かれ、以下の 2 つの活動を行った。

Step 1：エレメンタリーの「II 教授法」の内、割り当てられた SAD を読み、内容がわからないものがないか確認する。もし、あった場合は、グループ内の分かる人が説明するか、巻末の用語辞典を見て確認する。

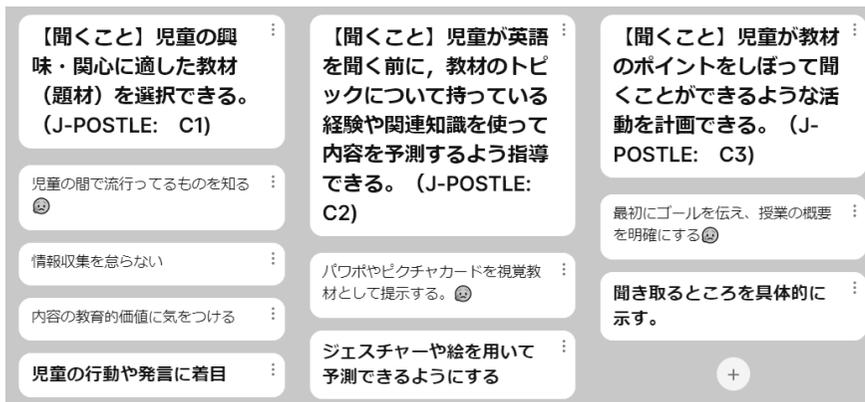
Step 2：これらの SAD の示す活動例や、SAD の内容を実践する際の留意点について、グループごとに話し合い、思いついたものは、パドレットに記す。

当初は、各技能について学習する週に、注目する技能の指導に関する SAD を取り上げ、上記の活動を行う計画を立てていた。しかし、予想外に、活動例の発表とフィードバックに時間がかかったため、まとめ回に移動し行った。そのため、時間的な制約から、取り上げる SAD の数は限定した。更に、グループごとに担当する技能を分けて行った（話す活動と聞く活動に関する SAD を 6 グループ、読む活動と書く活動に関する SAD を 5 グループが担当）。図 3 は、完成したパドレットの一部を抜粋したものである。受講生の書き込みを見ると、授業での学習内容や、取り上げられた活動例に対

する教師や学生によるフィードバックの内容と関連した記述が多かった。ここから、学生がSADを授業内容と関連して理解しようとする様子がうかがえた。

図 3

聞く活動のパドレット例



また、いくつかのSADにおいては、活動案につながるアイデアを考えたグループもあった。たとえば、D2（児童のニーズ、興味・関心、到達度に適した教材を選択できる。）では、漫画を活用したリーディング活動、B1（児童が文字、語句、表現を、書き写したり書いたりすることへの意欲を高めるような活動を設定できる。）では、児童にとって書く必然性のある活動（たとえば、いなくなった犬を探すポスター作り）などである。一人ではなかなか思いつくのが難しい活動案ではあるが、SADを共通の基盤としてグループで議論することで、様々なアイデアが挙げられた。授業のまとめには、パドレットへの書き込みを見ながら筆者が概要を紹介し、活動案やわかりづらい表現については、書き込みを行ったグループに補足説明をさせた。

3. まとめと今後の活用計画

本稿では、「自分自身について」を活用し、授業での目標設定を行った。また、「II 教授法」に含まれる32のSADを活用し、4技能の指導の内容理解の深化を目指した。

目標設定においては、「自分自身について」を活用し、各自が目指す教員像を意識しそこで求められる資質能力を考えた。その後、グループでの議論を通じ、パドレットにて図示することで、内容を整理・可視化した。

4技能の指導の理解においては、注目する32のSADの内容をよりよく理解するため、4技能の指導に関わる概念や用語等を講義にて導入したり、活動例のピア・フィ

ードバックの観点と使用したりした。学生による感想からは、SAD が振り返りの観点として機能している様子が観察された。また、まとめ回には、パドレットを用いて SAD を実践するときの留意点と、SAD を活用した活動案の提案を行った。パドレットに書きだすプロセスにおいて、学生は、SAD を読み、学習した内容を振り返り、グループ内で議論をする。完成したパドレットからは、受講生が、学習内容と SAD を関連付けしようとする姿勢が観察された。

今後の課題としては、SAD の理解を確認するタイミングの再考が指摘できる。授業計画時には、学習した内容に関わる SAD の理解を深めるため、各技能について学んだ直後に、パドレットを用いて、各 SAD の内容理解を深める活動を行うことを予定していた。しかし、時間の制約から行うことができず、まとめ回に4技能をまとめて扱った。そのため、学生は、限られた SAD についてしか考える機会を持てなかった。各技能について学習した直後に議論し、フィードバックを行うことで、全員が全ての技能について検討することができる。また、指導者は、学習内容の要点と関連付けて改めて解説を行うこともできる。そこで、次年度は、この観点から改めて授業計画を見直し、実践を行いたい。

参考文献

中央教育審議会（2012）．『教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について答申』

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325092.htm

文部科学省（2017）．『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語活動・外国語編』

https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387017_011.pdf

COVID-19 禍での教員養成科目への J-POSTL エレメンタリーの導入事例

竹田 里香 (立命館大学)

要旨

大阪にある私立大学の教員養成課程における「小学校英語」の授業内で、J-POSTL エレメンタリーを2か年に渡り導入した。コロナ禍で2年ともオンデマンド形式での授業であったため、対面で導入することに比べて十分な説明ができない等の困難なところがあった。対面よりは難しかったとは言え、J-POSTL エレメンタリーを導入する一つの目的である自己省察ができる学生を育てるという目的は、ある程度達成できたのではないかと考える。この導入事例報告では、2年間の導入方法(1年目と2年目では違った方法で導入)と学生のデータや振り返りから考察を加える。振り返りから、良かった点としては、学生がこれからの教員としての指針が分かった、まだまだ自分には足りないものがあるのが分かったという点、課題としては、教壇に立つという経験が少ない中で、記述文が想像できないといったものであった。

キーワード

J-POSTL エレメンタリー 自己省察 COVID-19 オンデマンド型授業 Zoom

1. 実践の背景と概要

1.1 実践の背景

本実践の大学は、児童保育学科と乳児保育学科の2学科を持つ大学で、児童保育学科では卒業時に保育士、幼稚園教諭、小学校教諭、特別支援学校教諭の4つの資格を取得できる。規模として、児童保育学科は毎年100名前後、乳児保育学科は毎年70名前後の入学生がある。児童保育学科の卒業生の約9割は保育士、幼稚園、小学校の3つの免許を取得して卒業する。よって、小学校外国語の内容論、指導法とも必須科目となっている。指導体制は2名の非常勤教師により内容論と指導法を別々に担当している。文部科学省(以下「文科省」)に提出のカリキュラムを基本としているが、教員によってアレンジができる状況にある。実践者は、「児童英語ワークショップ」という科目名で小学校英語を5年、教員養成課程で内容論2年、方法論1年の教歴を持つ。また、研究歴は約10年、小学校外国語が導入される前から小学校外国語支援員と

して現場で指導を続け、試行錯誤を繰り返し、小学校外国語に必要なものは何かを探ってきた。J-POSTL エレメンタリーに関しては、自己評価記述文特定諮問委員として関わり J-POSTL の重要性に感動し、教員養成に関わる学生には必ず伝えたいと考えた。

1.2 実践の概要

実践講座名は、2020 年度、2021 年度の 2 年間にわたり実践した「小学校英語（内容論）」の半期 15 回の授業である。ただし、2021 年度は学期中の授業ではなく、4 日間の集中講義での授業であった。使用テキストは『新編小学校英語教育法入門』（2017、樋口忠彦他、研究社）と『Let's try! 1,2』（文部科学省）、J-POSTL エレメンタリーの暫定版（2020 年度）と J-POSTL エレメンタリー完成版（2021 年度）である。履修人数、使用箇所、使用内容は表 1 を参照。

表 1

2020 年度、2021 年度の使用 J-POSTL、履修人数、使用箇所と使用内容

	使用 J-POSTL エレメンタリー	履修人数	使用箇所	使用内容
2020 年度	J-POSTL エレメンタリー（暫定版）	130 名	本書の使い方（p4～）、自分自身について（p7～）、自己評価記述文（p10～54）、オンデマンドのビデオ内にて説明	環境・授業計画・授業実践では、記述文の中から自分が大切にしたいものを 3 つ選んでその理由、教授法では、記述文を選んで具体的活動を考える、自立学習では、自立に向かわせるために何が必要かを考える、評価では、何を持って見とるかを考える。
2021 年度	J-POSTL エレメンタリー（完成版）	120 名	J-POSTL の紹介動画視聴、リフレクション（省察）の意義について（p. 9～）、自分自身について（p. 7～）、小学校英語指導者の資質・能力について（p. 8）、自己評価記述文の	Zoom を用いて、リフレクション（省察）の意義についてと、自分自身について、小学校英語指導者の資質・能力についてグループディスカッションの後、全体でシェアを行わせた。模擬授業の指導案作成から模擬授業時に授業法の中のどの記述文を意識して行ったか及び工夫をしたかを指導案に書く。

			IIの教授法 (pp. 16~26)	
--	--	--	--------------------	--

次に、J-POSTL エレメンタリーの使用目的について2点述べる。1点目は、自分のことを客観視できるようになるために、自己省察の意義を知り、省察の習慣をつける事、2点目は、小学校教員として小学校外国語教育を行う上でどんな視点をもっておくべきかを知る事である。

日本の教員養成システム自体にも関わってくるが、教育実習（小学校では1か月、中学校では3週間、高校では2週間）の期間が極端に短く、採用になった途端一人前の教員として授業を始める必要があるが、広い視点を知っているのと知らないのでは雲泥の差があると考え、J-POSTL エレメンタリーに教員養成課程で触れておくことに重要な意義があると考ええる。

2. 実践事例

実践事例の内容については、1.2の概要で述べたが、ここでは、詳細にシラバスと共にJ-POSTL エレメンタリーの使用部分と指示内容に関して述べ、学生からのデータや振り返りから、考察を加えていく。

2.1 2020年度の実践

表2

2020年度「小学校英語」のシラバスとJ-POSTL エレメンタリー使用箇所及び指示内容

小学校英語			
Week	Content (General)	J-POSTL-E の頁	J-POSTL 指示内容
Week 1	ガイダンス・小学校外国語活動の歴史・小学校外国語活動の目指すもの・外国語教育の意義	p. 7	「自分自身について」を読み、過去の英語学習体験を振り返ってみましょう。①良かったと思う授業内容やその方法と理由、②良くなかったと思う授業内容や方法とその理由について書きましょう。
Week 2	第2言語習得理論・発達心理学		

Week 3	教授法①	pp. 17-20	「教授法」の中の①話す活動（やり取り），②話す活動（発表），③書く活動，④聞く活動を見て，記述文を一つ選んで具体例を考えて書きましょう。
Week 4	教授法②	pp. 21-26	「教授法」の中の①読む活動，②文法，③語彙，④文化を見て，記述文を一つ選んで具体例を考えて書きましょう。
Week 5	Team Teaching・クラスルーム English	pp. 35-40	「授業実践」のセクションを見て，その中で自分が大切にしたいものを3つ選んでその理由を書きましょう。
Week 6	絵本	pp. 11-16	「教育環境」のセクションを見て，その中で自分が大切にしたいものを3つ選んでその理由を書きましょう。
Week 7	歌・チャンツ・ナーサリーライム・マザーグース		
Week 8	教材・教具		
Week 9	評価	pp. 48-54	「評価」のセクションを見て，その中で自分が大切にしたい記述文を選んで，どこで見とるかを考えて書きましょう。
Week 10	指導案作成・授業観 点の視点	pp. 30-34	「授業計画」のセクションを見て，その中で自分が大切にしたいものを3つ選んでその理由を書きましょう。
Week 11	異文化理解・CLIL	pp. 41-47	「自立学習」のセクションを見て，児童を自立に向かわせるに何が必要かを考えて書きましょう。
Week 12	模擬授業①		
Week 13	模擬授業②		
Week 14	模擬授業③		
Week 15	模擬授業④	p. 8	「自分自身について」の中の「小学校英語指導者の資質・能力について」をみて，今までの授業すべてを振り返り，項目を足してみよう。

2020 年度は，2020 年度は全面オンデマンドであったため，動画で毎回の講義を撮り，学生はその動画を視聴してレポートの課題を提出する形態で秋学期に行った。J-

POSTL エレメンタリーに関しても、その動画の中で一方的に教員から話し、その授業で扱った単位と同じ J-POSTL エレメンタリーの該当部分を読ませて選ばせるという課題を課した。指導上の工夫と留意点としては、全体を俯瞰して欲しいという意図で用語解説以降を除く全ページを網羅した。また、記述文をより自分の身近に感じてもらうために、セクションによって指示を変えた（表 2）。

学生の取り組みの一つとして、Week 3, 4 で扱った「授業法」の課題で学生が選んだものを表 3 で表す。

表 3

J-POSTL エレメンタリー「教授法」のセクションで学生が選んだ記述文の順位

順位	選んだ人数	記述文
A：話す活動—やり取り		
1	66	5 表情、ジェスチャー、あいづちなどの非言語コミュニケーションを効果的に使って、相手とやり取りができる力を育成するための活動を設定できる。
2	28	3 日常生活に関する身近で簡単な事柄について、自分の気持ちや意見を伝え合う力を育成するための活動を設定できる。
3	21	1 児童を話す活動に積極的に参加させるために、協同的な雰囲気を取り出し、具体的な言語使用場面を設定できる。
4	14	2 知り合いや初対面の人と挨拶を交わしたり、相手に指示・依頼などをして、それらに応じたり断ったりするために活動を設定できる。
5	13	4 自分に関する質問を考えたり、相手のことを尋ねたりする短いやり取りができる力を育成するための活動を設定できる。
6	6	6 相手の言った事にたいする確認や聞き返しができる力を育成するための活動を設定できる。
A：話す活動—発表		
1	39	1 自分の好き嫌い、趣味、得意なことなど、聞き手に伝えたい内容を整理してから、基本的な語句や表現を使って紹介することができる力をいくせいするための活動を設定できる。
2	24	5 少ない語彙や非言語コミュニケーションを用いて積極的に話す力を育成するための活動を設定できる。
3	21	2 身の回りの物事や日常生活について、基本的な語句や表現を使って話すことができる力を育成するための活動を設定できる。
4	15	4 強勢、リズム、イントネーションを用いて積極的に話す力を育成するための活動を設定できる。
5	12	6 発話を促すような視覚補助教材、印刷教材など、オーセンティックで多様な教材を選択できる。(N)
6	8	3 自分の居住地、学校生活、友人・知人にかんすることなどについて、基本的な語句や表現を使って自分の気持ちや考えを

		話すことができる力を育成するための活動を設定できる。
B：書く活動		
1	25	6 児童が慣れ親しんだ語彙や語順を活用して、自分のことや自分の身の回りメモや手紙などでやり取りを行う活動を支援できる。(A)
2	23	1 児童が文字、語句、表現を書き写したり書いたりすることへの意欲を高めるような活動が設定できる。
3	22	3 児童が慣れ親しんだ英語の語句や表現を、大文字、小文字の使い方、語と語の区切り、基本的な記号などを意識して書く活動を設定できる。
4	17	2 児童が慣れ親しんだ英語の語句や表現を、書き写したり書いたりすることができるようになるための様々な活動を設定できる。
5	16	5 児童が書く活動を行う事ができる様々な場面を設定できる。(N)
6	15	4 児童が持っている書く能力を伸ばすために、慣れ親しんだ表現を、語順を意識しながら書き写すことができるような活動を設定できる。
C：聞く活動		
1	67	1 児童の興味・関心に適した教材を選択できる。
2	21	2 児童が英語を聴く前に、教材のトピックについて持っている経験や関連知識を使って内容を予測するよう指導できる。
3	16	3 児童が教材のポイントをしぼって聞くことができるような活動を計画できる。
4	12	4 聞く活動において、発音された文字や、新出単語もしくは難語に児童が対処できるように支援できる。(N)

記述文の最後に (A), (N) という記号がついているが、J-POSTL エレメンタリーの能力スケールで、(A) は 5 年未満の育成教員用、(N) は初任教員用として位置づけられているものである。彼らが選択した上位に (A) が、下位に (N) がきていることを見ると、学生によって記述文に書かれていることを想像できるかについては個人差があるように推測される。学生の振り返りから、良かったコメントとして、「教師として配慮すべき点、考えなければならぬ点とは何かをかんがえさせられた。」「自分の中ではまだまだ出来ないと思うことがたくさんあった。」「自分に何が足りていないのかを理解し、今後に活かしたいとおもった。」などがあり、自己の客観視と省察ができるようになってきていること、逆に、マイナス点として、「実際にしてみないと分からないことが大半だった。」「予測しようにもできない項目ばかりだった。」と記述文がどういう意味なのか想像が難しかったと分かった。

2.2 2021 年度の実践

表 4

2021 年度シラバスと J-POSTL エレメンタリー使用箇所及び指示内容

小学校英語(夏期集中講義用)		
Day	Content (General)	課題
Day 1	<ul style="list-style-type: none"> ・Zoom ガイダンス (出席番号奇数者:10 時から, 出席番号偶数者:13 時から) ・J-POSTL のビデオ視聴, P9 のリフレクション(省察) の意義について ・小学校外国語活動の歴史 / 外国語教育の意義 (Video①) ・小学校外国語の目指すもの / 第 2 言語習得論 / 発達心理学 (Video②) ・教授法(1) (Video③) ・教授法(2) (Video④) 	<p>課題①: 小学校で外国語教育をする意義をビデオの講義を見てから自分の意見を書こう。</p> <p>課題②: 過去の英語の授業を振り返って, 教授法のビデオの中でどの教授法であったか, それを踏まえて自分が授業で使いたい授業法は何かを書こう。</p>
Day 2	<ul style="list-style-type: none"> ・Zoom ガイダンス (出席番号奇数者:10 時から, 出席番号偶数者:13 時から) ・J-POSTL の P7 「自分自身について」をみて振り返ってグループディスカッション後全体でシェア ・Team Teaching・クラスルーム English (Video⑤) ・絵本 (Video⑥) ・歌・チャンツ・ナーサリーライム・マザーグース (Video⑦) ・教材 / 教具 (Video⑧) 	<p>課題③: Team Teaching のビデオをみて, 理想とする小学校での指導者体系を自分の意見を書きましょう。</p> <p>課題④: 好きな英語の絵本を 1 冊+歌を組み合わせ小学校の授業で使う案を考えて書きましょう。対象学年(3~6 年の中から 1 学年), 選んだ本, 選んだ歌を明記してから書きましょう。</p>
Day 3	<ul style="list-style-type: none"> ・Zoom ガイダンス (出席番号奇数者:13 時から, 出席番号偶数者:10 時から) ・J-POSTL の P8 の小学校英語指導者の資質・能力についてグループディスカッション後全体でシェア ・評価 (Video⑨) ・指導案作成 / 授業観察の視点 (Video⑩) ・異文化 / CLIL (Video⑪) 	<p>課題⑤: 評価のビデオを見て, 評価基準の(1)知識・技能, (2)思考力・判断力・表現力, (3)主体的・学びに向かう力, それぞれをどこから見とると良いかの自分の意見を書きましょう。</p> <p>課題⑥: 小学校英語に異文化理解や CLIL を入れる意義を自分の意見を書きましょう。</p>

<p>Day 4</p>	<p>・Zoom ガイダンス (10 時からと 13 時からそれぞれ 30 分ほど Zoom を開けていますので、質問のある学生さんは Zoom に入ってきてください。)</p>	<p>課題⑦：この日中に、LINE のオープンチャットに動画をアップしましょう。 課題⑧：授業案 (模擬授業の) の写メもしくは Word/Excel を manaba のレポートから提出 【重要】指導案の中に J-POSTL エレメンタリーのⅡの教授法 p16-26 を見て、その中から自分たちの模擬授業で焦点を当てるものを選んで、どこにその工夫をしたかを指導案の中に入れなさい。 課題⑨：クラスメイトの発表を見て、コメントを書きましょう。(Google forms から提出)</p>
------------------	---	---

(グレーの網掛け部分は J-POSTL エレメンタリーに関する部分である。)

2021 年度は集中講義の形で「小学校英語」(内容論)を実施した。2020 年度との違いはオンデマンドであることに変わりはないが、3 回 (Day 1, 2, 3) Zoom を使用した。その Zoom 内で、J-POSTL エレメンタリーについて画面越しではあるが、直接学生に説明できたのは良かった。2021 年度は 2020 年度とは違い、使用する部分を限定した。Day 1 で、省察の意義について述べ、ビデオの視聴をタスクとした。Day 2 では、J-POSTL エレメンタリーの p. 7「自分自身について」をみて振り返ってグループディスカッション後全体で共有させた。Day 3 では、小学校英語指導者の資質・能力についてグループディスカッションの後、全体で共有させた。2021 年度は実際の記述文に関しては、「授業法」についてのセクションだけ使用することにした。最後に模擬授業をグループで行わせたが、授業案を作るときに、J-POSTL エレメンタリーの「Ⅱ. 教授法」の中の記述文から 1 つ選択して、その記述文を踏まえて工夫をし、その事を指導案に明記するように図 1 のようにサンプル指導案に加えた。

図 1

指導案に記載した J-POSTL エレメンタリーの記入例

☆☆☆J-POSTL☆☆☆

選んだ記述文：A 話す活動の A-1 の 1

その記述文を踏まえて工夫した点：積極的に話す活動に参加させるために、ほめ言葉をたくさん使って勇気づけた。

下記が、学生が記入してきた一部であるが、やはり一緒に記述文を読み解けていなかったことで、記述文一つ一つを想像しにくかったようである (表 5)。

表 5

学生が選んだ模擬授業に大切にしたい記述文と使用例

話す A-1-1	<ul style="list-style-type: none"> ・児童を話す活動に積極的に参加させるために、指導者と児童や、児童同士のやり方を多く取りいれられるよう工夫した。 ・グループ活動を導入するとともに、教師は英語を用いてヒントを出したり、誉めたりした。 ・友達へのインタビューと Bingo を組み合わせたゲームを取り入れる。 ・児童を話す活動に積極的に参加させるために、ゲームを通して興味をもって楽しく活動しながら既習の単語を反復練習し、言い慣れる機会を設け、自信をつけさせた。 ・自分に関する質問に答えたり、相手のことを尋ねたりする短いやり取りができる力を育成するために、みんなが楽しい雰囲気を取り組める授業をする
話す A-1の2	クラスの友達と挨拶を交わす活動を設定した。
話す A-1の3	積極的に自分の気持ちを伝えるために、クイズ活動をたくさん設けた。
話す A-1の4	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の書いた短い文を友達と伝え合う時間を長く作り、自信を持って話せるよう ・教育者が積極的に構文を使い、児童が楽しんでやり取りができる環境を整えた。 ・すきな曜日について質疑応答をするなかで、会話をする楽しさや進んで取り組めるような環境づくりを行う ・自分に関する質問や相手のことを尋ねたりする短いやり取りを授業に取り入れた。またその際に、使用する英単語やキーフレーズについて教えた。 ・自分の質問に答えたり、相手のことを尋ねたりすることができるようにペア活動を取り入れた。 ・英語を確認した後に、取り組めるようにした。 ・友達同士で尋ねたり答えたりできるように、そのような場面を設けた。 ・みんなが積極的に参加しやすいように楽しいゲームを考えた。
話す A-1-5	教育者が積極的にジェスチャーや表情を使い、児童が使いやすい環境を整えた。
話す A-2-1	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の好き嫌い、趣味、得意なことなど、聞き手に伝えたい内容を整理してから、基本的な語句や表現を使って紹介する力を育成するためワークシートを取り入れる。 ・ゲームなどを取り入れることで、子どもたちが楽しく英単語を覚えられるようにした。
聞く C-1	ただ教師の発言を聞いてリポートするだけではなく、興味をもてるよう聴きなれた音楽をしようした。
聞く C-4	新出単語に児童が対処できるように、繰り返し聞く機会を設けた。
書く活動	周りの意見を聞いてから書くのではなく、どんな意見も否定せず、肯定して、意見できる場を作った。
語彙 1	児童とのやり取りを多く設けることで、慣れ親しんだ語彙や楽しく学んだ語彙を使用できるように工夫した。
語彙 2	難しい単語などは前もって調べて正しいものが提示できるようにする。児童自身がその単語の意味をより理解できるよう、児童に予想を立てることを促してから意味伝えた。

3. まとめと今後の活用計画

過去 2 年の実践では、2020 年度は半期全面オンデマンド（一斉 Zoom なし）、2021 年度は集中講義で 15 回の授業を 4 日（1～3 日目は 90 分授業 4 コマ分、4 日目は 90 分授業 3 コマ分）で、録画をみて課題を提出するオンデマンド形式は変わらないが、Zoom を 1～3 日目の 40 分～1 時間ほど取り入れ、その中で J-POSTL エレメンタリーの内容を Zoom 越してはあるが、学生とインタラクションを行いながら取り組むことができた。2020 年度はオンデマンドのみという教員から一方通行の導入であったが、学生のコメントから、何人かは省察の意義を理解しているようであった。しかし、予測しようにも予測のしょうがない項目ばかりだったというコメントもあり、教壇に立ったことのない学生に記述文を 1 人で想像させることは難しかったと考える。来年度からは対面で 15 回の授業が行われるものと推察されるので、学生に直に話をし、グループディスカッションを行わせるなど工夫をして導入をしていきたい。自己評価もプレとポストで行わせてみて、その差もみたいと考える。教育実習に途中で行く学生もいるので、教育実習に行った学生に体験を話してもらう機会を設けたりしながら、J-POSTL エレメンタリーの有用性を訴えていきたい。

謝辞

本実践は、JSPS 科研費 19H01288 課題名「省察ツールとしてのポートフォリオの体系化と活用ガイドの開発」の助成を受けたものです。また、実践を行った大学及び学生に感謝をします。

参考文献

- 大学英語教育学会（JACET）教育問題研究会（2020）. 『小学校英語指導者のポートフォリオ（J-POSTL エレメンタリー）【暫定版】』大学英語教育研究会（JACET）教育問題研究会
- 大学英語教育学会（JACET）教育問題研究会（2021）. 『小学校英語指導者のポートフォリオ（J-POSTL エレメンタリー）』大学英語教育研究会（JACET）教育問題研究会

「外国語の指導法」「外国語」における J-POSTL エレメンタリー活用例 —保育士・幼稚園教諭養成を主とする学部での実践事例—

土屋 佳雅里（東京成徳大学）

要旨

本稿では、主に保育士・幼稚園教諭を養成する大学の学部において、小学校教職課程の外国語(英語)コアカリキュラムに沿った科目である「外国語の指導法」および「外国語」における J-POSTL エレメンタリー活用事例を紹介する。保育職を目指す履修生には、概して、英語に対する抵抗感を持つ傾向がある。そこで、履修生の英語への抵抗感を少なくし、小学校英語の授業のイメージを持たせたうえで、英語指導への理解を少しずつ深めながら、省察を促し、実践を進めていった。前期・後期の振り返りからは、履修生の英語授業に対する意識の変容がみられた。

キーワード

J-POSTL エレメンタリー 外国語の指導法・外国語 保育士・幼稚園教諭

1. 実践の背景と概要

本実践は、主に保育士・幼稚園教諭を養成する大学の学部において、小学校教員免許取得を希望する履修生のための、小学校教職課程の外国語(英語)コアカリキュラムに沿った科目における J-POSTL エレメンタリー活用の事例である。小学校教職免許取得に必修の外国語に関する科目である「外国語の指導法」は前期(2単位)、「外国語」は後期(2単位)と2期に分かれている。

保育職を目指す履修生には、概して、英語に対する抵抗感を持つ傾向がある(田中(2014);青嶋(2019))。そこで、履修生の英語への抵抗感を減らし、小学校における英語授業のイメージを持たせたうえで、英語の指導に対する自信を持たせることを当該科目における優先課題として J-POSTL エレメンタリーを活用する実践を行った。

1.1 実践の背景

本実践を行った大学(学部)教職課程の概要は次の通りである。

a. 大学(学部)の規模(2021年現在)

入学定員 140 名，男女比はおよそ 1：35。入学時には学生全員が保育士資格・幼稚園教諭・小学校教諭免許状のいずれか，あるいは 3 つすべての資格・免許を希望。

b. 取得可能な教員免許の種類：

保育士資格（国家資格），幼稚園教諭 1 種免許状（国家資格），小学校教諭 1 種免許状（国家資格）。

b. カリキュラム（外国語に関するもの）

「外国語」「外国語の指導法」

c. 履修学生（以降，履修生）数および履修生の特徴

2021 年度に小学校教職課程を履修した学生（3 年生）は，前期（33 名），後期（16 名）であった。前期から後期にかけて人数が半分以下に減った理由は，個人的に希望を取り下げたためのほか，学部で定める「教育実習Ⅲ（小学校）を行うにあたっては，教育実習Ⅲ（小学校）実施の前年度末（3 年次後期末）までに履修すべき教職課程科目についてすべて単位を取得していることが前提」という条件を満たすことができず履修を取り止めたためと思われる。殆どの履修生が保育士・幼稚園教諭資格取得を同時並行で目指しており，3 つの資格・免許を目指すために学修の負担が大きく，途中でリタイアする履修生は例年珍しくない。

d. 指導体制

実践者による単独の指導。

e. 実践者について

教職・小学校英語指導に関して，現場では，2003 年より小学校英語指導講師を務めており，民間・教育委員会・学校等での研修講師など小学校英語指導者養成に携わっている。大学教育では，複数の大学において児童英語指導法，小学校教職外国語科目を担当する。研究では，小学校外国語教育を専門とし，言語・文化への気づき，国語科のローマ字指導と外国語活動・外国語科の英文字指導，指導者問題，小学校外国語科の教科書分析（主に語彙・表現）などを行ってきた。J-POSTL エレメンタリー使用の動機としては，大学教育において，児童英語指導法（中高英語教員免許を希望する学生含む）や小学校教職課程を履修する履修生に，小学校外国語教育への理解および教師としての省察・自己成長の機会を促したいと考えたからである。

1.2 実践の概要

a. 講座名：2021 年度前期「外国語の指導法」および後期「外国語」

なお，詳細は次の通りである。

●前期「外国語の指導法」について

講座内容：外国語活動・外国語科の目標・内容・指導・評価の方法および情報機器や視聴覚教材の活用について理解するとともに，具体的な学習指導を構想・検討し，指導案を組み立てて模擬授業を行うことを通して，主体的・対話的で

深い学び（アクティブラーニング）を視点とした学習指導を行うための基礎的な知識と技能を身につける。

履修人数：33名

●後期「外国語」について

講座内容：外国語活動・外国語科の授業実践に必要な英語に関する背景的な地域と実践的な英語運用力を身につけるとともに、児童文学と異文化理解に関する理解を深める。

履修人数：16名

b. 扱ったエレメンタリーのセクション

「自分自身について」（p.7）「自己評価記述文」（pp.11-54）（講義テーマに沿った記述文，詳しくは資料Ⅰを参照）「用語集」（pp.55-63）「利用者のために」（pp.70-73）」を扱った。なお，「用語集」「利用者のために」は確認程度とした。

c. J-POSTL エレメンタリー使用の目的

学びを深める，省察の方法を学ぶ，成長の記録をつけることを目的とした。

d. J-POSTL エレメンタリーのカリキュラムやシラバスでの位置づけ

履修生の評価資料として（平常点として加味），模擬授業以外の講義における各回講義の内容理解の確認として，講義外課題としての位置づけであった。

2. 実践事例：

「外国語の指導法」「外国語」における J-POSTL エレメンタリーの活用

小学校教職を希望する履修生が，初めて履修する外国語に関する科目が年度の前期に設置されている科目「外国語の指導法」である。前述したように，保育職を目指す履修生には，概して，英語に対する抵抗感を持つ傾向がある。対象講座は毎回，課題として，授業内容に関するコメントを課しているが，前期第1回目，第2回目のコメントに，次のような不安の吐露があった。「中学生の頃から英語に苦手意識を持ってしまっており，基礎という基礎がまるまる空いてしまっています。そんな中授業についていけるでしょうか」「英語があまり得意でないため不安」「英語は苦手」。また，英語の授業のイメージが掴めないことに対する不安もみられた。小学校の英語の授業も自分自身が受けた記憶が少し残っている程度で，現場の授業は見たことがなく不安という履修生が多くみられた。このような実態から，J-POSTL エレメンタリー活用を実践するにあたり，「履修生の英語に対する抵抗感を減らすこと」，「小学校における英語の授業のイメージを持たせること」，その上で，「J-POSTL エレメンタリーへの理解を少しずつ促すこと」が当該科目における優先課題と思われた。

そこで，第1回目，第2回目得られた履修生の実態を踏まえ，J-POSTL エレメン

タリーの活用之际して、第3回目以降では、次の3点を計画し実行することとした。

1. 英語に対する抵抗感を減らすため、授業のウォーミングアップとして、洋楽や、履修生の専門にあたる保育で馴染みのある手遊び歌の英語版を導入する。
2. 小学校における英語授業のイメージを持たせるため、毎回の講義の冒頭において、講義テーマに関連する授業動画（文部科学省，2022）を観る時間を取り、授業のイメージを掴んだ上で講義内容を進めていく。
3. J-POSTL エレメンタリーへの理解を少しずつ促すため、講義テーマに沿った自己評価記述文を履修生が理解しやすい、また負担にならない程度に準備し（1回につき多くて3，4文程度）、チェック作業を講義の最後に時間を取り一斉に行う。

ここでは、J-POSTL エレメンタリー活用の実践例を、前期・後期において導入した順に紹介していく（表1）。

表1. 前期・後期を通した実践一覧

講義	回	時期	実践内容	所要時間
前期	1	4月	説明動画の利用	20分
	2,3	4月	「自分自身について」の活用	15分
	4～15	4月～7月	講義テーマに沿った「自己評価記述文」の活用	5分
	7	6月	J-POSTL エレメンタリー使用の振り返り（1）	—
後期	1～15	9月～1月	講義テーマに沿った「自己評価記述文」の活用	5分
	13	1月	J-POSTL エレメンタリー使用の振り返り（2）	—

2.1 説明動画の利用方法

●利用時期

前期，第1回講義

●指導方法

前期講義のオリエンテーションの一部として、J-POSTL エレメンタリーおよび省察について理解を促すために実施した。J-POSTL エレメンタリーの冊子を配布後、簡単に概要を説明し、説明動画を視聴した。動画は、補足が必要と思われる箇所静止して説明を加えながら、視聴を進めた。

●指導上の工夫や留意点

履修生は今後、小学校外国語教育について学び理解を深めていく状況のため、講義

初回は、まず講義内容と全15回の見通しを立てることが重要であった。その上で、J-POSTL エレメンタリーを活用すること、また活用の意義を解説することに留意した。動画は具体的で非常にわかりやすい内容であるが、3年生で教職について学び始めたばかりの段階であるため、中でも省察そのものや教師として成長することに対する理解には及ばない履修生が多いとみられる。そのため、要所で静止して補足説明を行い、質疑応答の時間を取るなど、履修生の理解の程度を確認しながら動画視聴を進めた。

次に、動画視聴に対する履修生のコメントを紹介する（一部抜粋）。

- ・ J-POSTL エレメンタリーの動画を見て、是非これから沢山活用していきたいと思いました。一つ一つ終わってから、落ち着き客観的に自分のことを評価することで、次に目指す理想の姿も明確に分かるようになり、大きな手助けになると感じました。
- ・ 過去の経験を思い出しながらそれを励みにできたり、今後に使えたりする点において良いものであると感じました。また、これを活用するために常に自分を客観視しなければならないということも常に自分の中で最高の授業をしたい（過去の授業よりもよくしたい）という思いが生まれるため良いと思いました。これを活用できるように、動画を見直したり、冊子の冒頭ページを見返したりしていきたいです。

2.2 「自分自身について」の活用

●利用時期

前期，第2回，第3回講義

●指導方法

説明動画を視聴後、まず、5分ほど時間を取り、個々で「自分自身について」のページを記入した。その後、5分程時間を取り、3、4名のグループに分かれ、グループ内で自分が書いた内容について互いに見せ合い、自由に感想や意見交換をした。グループワーク後、グループ毎に簡単にどのような感想や意見が出たかを報告してもらい、全体に対して実践者によるフィードバックを行った。

●指導上の工夫や留意点

設問の回答に記入する前に、履修生に次のように話をして実践を促した。「指導を考える時にまず思い浮かぶのは、自分自身が受けてきた指導の記憶でしょうか。自分が指導することについて考える前に、まずは過去に受けてきた指導を振り返ることから始めてみましょう」。なぜ経験を振り返る必要があるのかについて、より具体的に問いかけを行ってから回答を進めた。自分の経験について客観的に見つめやすくなるよう、グループワークを行い、自分の経験と他者の経験を照らし合わせる時間を作った。

2.3 講義テーマに沿った「自己評価記述文」の活用

●利用時期

前期，第4回講義～第15回講義。後期，第1回講義～第15回講義。

●指導方法

各回の講義テーマに沿った自己評価記述文を，講義1回につき多くて3，4文程度を準備した（資料1）。チェック作業は，講義の最後に時間を取り，一斉に行った。

●指導上の工夫や留意点

講義1回につき3，4文程度の分量に抑えたのは，履修生が理解しやすく，また負担にならないように配慮したためである。また，所要時間も，解説およびチェックする時間を合わせて5分程度とした。

講義では授業資料を毎回準備し，事前に読んでおくことを予習として課し，講義テーマに合わせた自己評価記述文も予め確認するように促した。よって，どのような自己評価記述文をチェックするかを予め念頭に置いてから授業に臨む姿勢を取った。

「自己評価記述文」の実践は，毎回の講義の最後のルーティーンワークとして定着させた。これは，回数を重ねていくうちに，授業前・授業の始まりから最後に実施する自己評価記述文のことを思い起こす効果を期待したからである。

2.4 J-POSTL エレメンタリー使用についての振り返り（感想，意見など）

●利用時期

前期，第7回講義。および後期，第13回講義。通年で計2回。

●指導方法

毎回の課題として，授業内容に関するコメントを提出させていた（Microsoft Formsを使用）。毎回の課題コメントに加え，J-POSTL エレメンタリーの使用の振り返りとして，前期では学期半ば，後期では学期後半において，通年で計2回のコメントを課した。2回とも，次回の講義の冒頭で実践者によるフィードバックを行った。

●指導上の工夫や留意点

履修生に対し J-POSTL エレメンタリーの理解を促すためにも，使用について振り返る機会は重要である。まず，前期半ばで実施したのは，ある程度使用になれてきた頃のタイミングと，もし理解が及ばない様子がみられた場合，軌道修正ができるからである。

次回（第8回，第14回）の冒頭で，全体に対してフィードバックを行った。個々の感想・意見を共有し，疑問などに実践者が答える形で，J-POSTL エレメンタリーへの理解を深め，活用意義を確認し，疑問や誤解を解消することに努めた。毎回の自己評価記述文のチェックは講義最後に一斉に行うことにしているが，時間的に余裕がなかったことや，授業形態が対面と遠隔とで交互に行われたことにより不安定な状況での作業であったので，個々の理解度を把握することが困難であった。そのため，J-POSTL

エレメンタリーの使用についてのコメントを通して、J-POSTL エレメンタリー本体には現れにくい個々の履修生の使用状況を確認することは重要であった。

次に、J-POSTL エレメンタリー使用への履修生のコメントを紹介する（一部抜粋）。

1 回目：前期，第7回講義（6月）

- ・まだ、自分には指導するための力や外国語の能力が足りていない・未熟だと感じています。はっきり言って今のまま、実習に行ったり、指導案を書いたりするのは難しいのではないかと考えています。しかし、自分には「やってみよう」という意欲があり、外国語が苦手な生徒の気持ちは分かるので、そこを生かしながら今後の授業に臨みたいのです。また、ポートフォリオを活用して、自分の出来ないことや達成出来たこと、成長できたことを書いてチェックすることを繰り返し、自信を持って実習などにいきたいと思っています。
- ・どのような授業を展開することで、子どもたちが学びたいと思えるのかななどを考えることができる点は、自分自身が受けてきた英語の授業を振り返ることができ、自分はどのように学ぶ意欲が出てこなかったのだろう、どうしてイヤだったのだろうということを考えることができ、子どもの視点に立ちながら考えることができました。そしてその振り返りから、では自分だったらどのような授業を展開していくかな、子どもたちはどのような授業だったら意欲的に取り組むことができるかななどを考えながら、授業を作っていくことができるのではないかと感じました。

2 回目：第13回講義（1月）

- ・前期の時は小学校での外国語活動の授業を考えて行うというイメージがつかなかったので評価が低かったのですが、後期では授業を通して実際の現場の様子や具体的な授業内容を知ることができたので評価が少しあがったと思います。
- ・3年の前期から自己評価を行なってきて、初めは全く出来ない・出来るわけがない。と思っていました。しかし、授業を重ねていくうちに「こういう授業もあるんだ」「こうやって展開すれば良いのか」などと自分の授業への関心や意識が深まっていることが実感できました。今までは子どもが「できない」と思っていたことでも後期になると「こうすれば良いかも」と考えられるようになりました。少しは成長できたのだと実感することもでき、自信につながりました。
- ・前期の後半から後期では、1度評価したことがあるページや項目に再度、評価する機会が増えていき、自己評価を改めてしてみると、評価が上がることはなく、むしろ前回の評価よりも下がってしまう項目が多いなという印象を持ちました。これは前期・後期の授業を通して、英語に関する授業の作り方や活動、授業の進め方などを学んでいく中で、学びが深まり英語の授業についてしっかりと考えるようになったからこそ、授業の作り方や授業の進め方の難しさを感じ、今の自分

にはこの項目はまだ評価をあげることができないなと感じ、評価が低くなってきているのではないかと感じました。

3. まとめと今後の活用計画

本稿では、保育士・幼稚園教諭養成を主とする大学学部における J-POSTL エレメンタリー活用の実践事例を紹介した。J-POSTL エレメンタリーを導入するにあたり、はじめに、英語への抵抗感や英語授業への不安を持つ履修生に対して英語指導に意欲的な姿勢を持ってもらうことが課題であった。そこで、「履修生の英語に対する抵抗感を減らすこと」、「小学校における英語の授業のイメージを持たせること」、その上で、「J-POSTL エレメンタリーへの理解を少しずつ促すこと」を考慮しながら実践を進めてきた。具体的には、毎回の授業のウォーミングアップとして洋楽や手遊び歌の英語版などを導入することで英語への抵抗感を減らし、冒頭で授業動画を見せて授業のイメージを持たせ、さらに自己評価記述文については、授業前に予習として確認しておき、授業では最後に一斉にチェック作業を行うなど地道な取り組みで理解を深める試みを行ってきた。

これらの取り組みの結果として、履修生の英語授業に対する意識の変容が J-POSTL エレメンタリー使用へのコメントに現れていた。後期の後半で行った 2 回目のコメントでは、前期から後期にかけて授業への理解が深まったことで自分自身の成長をみることができたというものもあれば、授業や評価を重ねていく度に学びが深まり、英語授業への理解が進んだからこそ授業作りの難しさを感じて評価が厳しくなったというものもあった。両者は評価のベクトルが逆に進んだものではあるが、省察ツールとしての J-POSTL エレメンタリーが履修生に効果的に機能した現れではないだろうか。

今後の活用計画としては、来年度も引き続き同科目を担当する予定のため、本実践の実践計画を基にしながら、来年度の履修生の実態に応じて実践を行っていきたい。また、授業形態について、感染症対策がどのように授業に影響するか不明ではあるが、履修生の成長の学びの機会を大切に保つことを念頭に、これまでの経験を踏まえて臨機応変に対処していきたいと考えている。

参考文献

- 青嶋由美子 (2019) . 「保育系学生のための英語」 . 『豊橋創造大学短期大学部研究紀要』 36, 19-32.
- 田中敬一 (2014) . 「早期英語教育に関する学生の意識調査 — 幼児保育学科学生に対

する質問紙調査結果より—」. 『八戸学院短期大学研究紀要』39, 25-34.
 文部科学省 (2022). 「外国語教育はこう変わる！」

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLGpGsGZ3lmbCsze5PvMhQITS-jXEZKA4f>

資料Ⅰ 講義テーマに沿って使用した自己評価記述文例(抜粋, 前期第4回～第12回)

	回	テーマ	分野, 領域	自己評価記述文
前期 外国語 の 指導 法	4	英語の文構造・文法	Ⅱ教授法 E. 文法 (Grammar) p. 23	1. 文法は, コミュニケーションを支えるものであるとの認識を持ち, 使用場面を提示して, 言語活動と関連づけて, 児童に気づかせる指導ができる。 2. 語順や語尾の変化など, 英語特有の言葉のきまりに気づかせるための様々な工夫ができる。
	5	コミュニケーションの目的や場面, 状況等を明確にした言語活動	Ⅱ教授法 E. 文法 (Grammar) p. 23	1. 文法は, コミュニケーションを支えるものであるとの認識を持ち, 使用場面を提示して, 言語活動と関連づけて, 児童に気づかせる指導ができる。
			Ⅱ教授法 F. 語彙 (Vocabulary) p. 24	1. 文脈の中で慣れ親しんだ語彙を使用できるような言語活動を設定できる。
			Ⅲ. 教授資料の入手先 (Resources) p. 27	3. 児童の英語力に適した表現や言語活動を教科書や教材から選択できる。
	6	音声から文字へ	Ⅱ教授法 C. 聞く活動 (Listening) p. 20	1. 児童の興味・関心に適した教材を選択できる。 2. 児童が英語を聞く前に, 教材のトピックについて持っている経験や関連知識を使って内容を予測するよう指導できる。 3. 児童の英語力に適した表現や言語活動を教科書や教材から選択できる。 4. 聞く活動において, 発音された文字や, 新出単語もしくは難語に児童が対処できるように支援できる。
	第7回は「2. 「主体的・対話的で深い学び」の実現にむけて (pp. 70-73)を確認したのみ。			

8	Classroom English, small talk, teacher talk,	V授業実践 E. 教室での言語 (Classroom Language) p.40	1. 英語の教科内容や学習の方法などを、視覚的ヒント、ジェスチャー、デモンストレーションなどを利用して英語で指導できる。 2. 英語を使って授業を展開するが、必要に応じて日本語を効果的に使用できる。 3. 児童が授業活動において英語を使いたくなるように設計し指導できる。
9	文字言語との出会わせ方, 読む活動から書く活動への導き方	II教授法 D. 読む活動 (Reading) p.21	1. 絵本などの読み聞かせ（音声を伴った、英語の絵本を使った活動）において、児童が内容や文字に関心を持つような活動を設定できる。 2. アルファベットを識別し、その読み方を適切に発音することができる力を育成するための活動を設定できる。 3. 児童のニーズ、興味・関心、到達度に適した教材を選択できる。
10	題材の選定と教材	IV授業計画 (Lesson Planning)	1. 児童のニーズ、興味・関心を考慮し、学習指導要領の内容に沿った学習目標を設定できる。 2. 年間の指導計画に即して、単元や授業ごとの学習目標を設定できる。 3. 児童の意欲を高める目標を設定できる。 4. 児童が自分の学習を振り返ることができるような目標を設定できる。
11	学習到達目標, 指導計画	A. 学習目標の設定 (Identification of Learning)	
12	学習指導案の作り方	p.31	

J-POSTL エレメンタリーと KPT 3 観点による省察

安達 理恵 (椋山女学園大学)

要旨

筆者の属する初等教育課程を持つ学部では、前期では、理論的な面を中心に「外国語（英語）」を、後期では、実践的な面を取り入れた「外国語（英語）の指導法」を、いずれも2年次開講の2単位の小学校教諭1種免許状取得のための必修科目として展開している。本稿では、初等教職課程の学生を対象にした「外国語の指導法」の授業で、J-POSTL エレメンタリー（小学校英語指導者のポートフォリオ）の教職課程試用版¹を使用し、また模擬授業実践後に Keep・Problem・Try の3観点で振り返りを書くことで省察を促した授業実践について報告する。具体的には、模擬授業指導案作成時に、履修生が自由に選んだ記述文について意識させ、また実践後の振り返りでは、上記の3観点でリフレクションを書くように指示することで、学生が省察できるよう支援した。

キーワード

小学校外国語教育 教職課程 リフレクション 指導者 J-POSTL エレメンタリー

1. 実践の背景と概要

1.1 実践の背景：対象の学生について

筆者の勤務する大学には全部で7つの学部があり、所属する教育学部には、保育・初等教育専修と初等中等教育専修の2つの専修がある。前者では主に保育士・幼稚園教諭を目指す学生が多く、選択コースで小学校教諭を目指すこともできる。後者では小学校教諭を目指すことが基本で、選択コースで音楽または数学の中学校・高等学校教諭などの資格も取得できる。一学年の定員は、前者は90名で後者は80名、合計170名である。筆者は2020年度に着任し、前期では、理論的な面を中心に「外国語（英語）」を、後期では、より実践的な指導知識・技術などを取り入れた「外国語（英語）の指導法」を開講している。いずれも、2年次開講の2単位の小学校教諭1種免許状取得のための必修科目で、2020年度は前者の専修からは約2/3の学生が履修し、後者は全員が履修していた。

筆者は前任校でも、中学校及び高等学校の英語科教諭免許取得を目指す教職履修の

学生を対象に、英語科教育法や英語科指導法のⅠ～Ⅲの授業を担当しており、使用テキストである『行動志向の英語科教育の基礎と実践』（三修社）の内容に合わせて J-POSTL（言語教師のポートフォリオ, JACET 教育問題研究会, 2014）を使用している。しかし、複数の教科の指導法を学ぶ必要のある初等教育課程の学生の場合、英語科に固有の指導知識は十分でない上、英語に苦手意識を持つ学生が6～7割ほどいるため、J-POSTL をベースに小学校の英語指導者向けに開発された J-POSTL エレメンタリーであっても、その記述文の理解には時間がかかると予測された。

したがって、本務校の初等教育課程の学生が、J-POSTL エレメンタリーを使って自身の外国語の指導力について考えるようになるには、英語にも自信がないこともあり、英語科教職課程の学生より多くの時間が必要と考えられた。加えて、前期の授業課題で指導者に関する意識を尋ねたところ、外国語は ALT（外国人指導助手）などの母語話者による指導が望ましいと考えている者も複数見られた。さらに小学校教諭1種免許状取得のための授業の他に、保育士・幼稚園教諭や中学校及び高等学校の教員など複数免許の取得を目指す学生の場合は、それだけ履修する科目や実習が多くなり、外国語の指導法の学びに費やす学習時間は限られる。筆者担当の2つの授業だけで外国語指導力を育成することは難しいと考えられた。以上をまとめたのが表1である。

表1

筆者担当のクラスの英語科教職課程と初等教職課程の学生の特徴

	英 語 科 教 職 課 程	初 等 教 職 課 程
使用ポートフォリオ	J-POSTL	J-POSTL エレメンタリー
背景知識	英語を中心とした外国語を専門的に学修	小学校教育全般について学修
外国語の指導法に関係する授業（2021年度の場合）	英語科教育法、英語科指導法Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ	外国語（英語）、外国語の指導法、子どもと英語コミュニケーション（母語英語話者講師による授業）
クラスサイズ	8-12人	40-50人
教職以外の授業や必要な教育実習の科目	欧米言語文化に関する授業が多い／実習は4年次に英語科目の実習	子どもの発達・教育関連の授業が多い／小学校での実習は英語に限らず、複数免許取得を目指す場合は幼稚園や保育園での実習が多い
英語力に対する自信	目指す教員（小・中・高）によりやや異なるが、大よそ高い	学生により大きく異なり、全くない学生から自信がある学生もいる
目指す教員の姿	自分自身の指導力向上	ALTを理想とする傾向一部に有り

1.2 実践の背景：J-POSTL エレメンタリーの記述文と省察の課題について

清田（2020）によると、「J-POSTL は、教師の自律的な成長を目指すポートフォリオ」であり、「成長を記録し振り返ることで、自己の長所や改善点に気づき、教職に対する気づきや学びが促されます」と述べている。また J-POSTL エレメンタリー（JACET 教育問題研究会，2021）ではリフレクションについて、以下のように述べている。

一人で振り返ることは、自立した思考力をつけるために必要ですが、視野を広げ多角的なものを見方や考える力を身につけるには仲間や指導者と話し合うことが大切です。このようなりフレクション（省察）を繰り返すことにより、教師として、また、人間として成長し、客観的な自己評価ができるようになります（p.9）

また清田（2020）は、ポートフォリオの優れた点として、生涯学習などの理念があることとし、「生涯学習を実現するためには、学習者自身が自分の学習の価値を理解し、そのための学び方を身につけることが必要」と述べている。したがって、学習者だけでなく、J-POSTL エレメンタリーを用いる教師自身も、より良い指導について自ら考え、指導方法や授業力の改善に向けて、仲間や指導者と話し合いながら、視野を広めつつ、自主的に指導力向上に取り組むことが期待されると考えられる。

J-POSTL エレメンタリー（JACET 教育問題研究会，2021）には 167 の自己評価記述文があるが、元になっている EPOSTL（ヨーロッパ言語教育履修生ポートフォリオ，Newby et al., 2007）にはさらに多い、195 の記述文がある。EPOSTL の使い方によく起こる課題として、Newby（2011）は、初めて EPOSTL を使用する学習者は、(a)記述文の多さにどう対処し、(b)どの程度扱えば良いのか、また(c)どこから始めるのか、の3つを挙げている。英語と同じ語族の言語を母語とすることが多いヨーロッパの言語教育履修生でも、記述文の多さに圧倒されるのであれば、日本人の履修生で、しかも外国語に苦手意識を持っている学生には、J-POSTL エレメンタリー（教職課程試用版）の記述文を、たとえ EPOSTL よりは数が少なくても、自分で全文を読み内容を理解できるようになるには準備期間が必要と考えられた。

その一方、2020 年度はコロナ禍によって遠隔で授業を行っていたこともあり、学生の様子がよくわからない授業の中で、記述文を解説するのも時間がかかる。山口・米田（2020）の結果が示したように、記述文を学生が理解し実践できるようになるまで短時間で指導力を向上するのはハードルが高く、学生にも負担が大きいと判断した。そこで後期の授業では、模擬授業の指導案作成時に J-POSTL エレメンタリー（教職課程試用版）の記述文の中から、学生に自分で複数の記述文を自由に選んでもらい、意識して書くように指示した。

記述文は、自己評価をすることでリフレクション（省察）につながり、リフレクションはポートフォリオの非常に重要な要素となっているが、教職履修生にとって自己

評価をすることに慣れておらず、難しい (Newby, 2011; 清田, 2020)。筆者の指導する英語科教職課程の学生も、自己評価をすることに経験がないため、授業内容に適合する記述文を選び、グループでの話し合いとグループ間の意見交換を経て、記述文の理解を協同的に深めながら実施している。また教職履修生の場合、教師としての経験も浅いか、ほとんど無い場合も多く、記述文の内容によっては具体的なイメージをつかみにくいものもある。また初等教育課程の場合は、自身の外国語力に対する自信の無さもあって、自己の欠点や実践課題には視線を向けがちである。実際、前期の模擬授業実践後の振り返りには感想的なものが多く、履修生に改善に向け考える余裕や具体的な視点はあまりなく、省察までを促すのは難しいと考えられた。

そこで後期の授業では、「Keep・Problem・Try」の3つのフレームワークからなる3観点のリフレクションの手法を取り入れることにした。これは、SELECK (2021)によると元になっているのは、Alistair Cockburn 氏の「Reflection Workshop」としてしている。省察を促すには、自己の実践を見つめ、他者と協働して視野を広げることで多角的なものを見方を得て、次の段階ではどうするか考えることまでが重要である。自己の模擬授業実践について、Keep (維持すること)、Problem (今回の課題)、Try (次に挑戦すること) の3点 (以下 KPT の3観点) に分けて考えれば、Keep では自己肯定感を育てつつ理解を深め、Problem では他者の実践について話し合うことで具体的な省察を促し、さらに Try では次回に向けた改善を考えやすい。KPT の3観点に分けることで、模擬授業実践後のリフレクションについて考えやすくなり、その結果、自律学習に向けた態度を育てやすいのではないかと期待した。加えてお互いの実践についてグループで共有し感想や疑問点も含め、意見交換する協同的な学びの場があれば、より客観的な視点から自己の実践を見ることもできるようになるだろう、と期待した。

1.3 J-POSTL エレメンタリーの使用概要

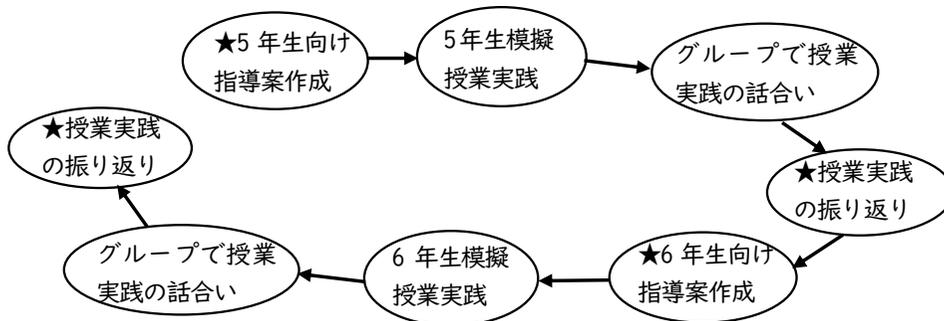
2020年度はコロナ禍により、前期はいずれの授業も遠隔で実施することになり、筆者はオンライン会議システム Zoom で授業をした。学生とは対面する機会がないため、J-POSTL エレメンタリー (教職課程試用版) を渡すことはできなかった。後期になるとようやく一部の少人数の実践型の授業では対面授業が始まったため、J-POSTL エレメンタリー (同上) を事務室において頂き、来校した際に持ち帰るように伝えて学生に配布した。今回報告する実践授業は2020年度後期の授業「外国語 (英語) の指導法」であり、3クラス計147名の学生が履修していた。

扱ったエレメンタリーのセクションは自己評価記述文である。後期の授業でも筆者の授業は Zoom で実施していたこともあり、全15回の後半で5年生と6年生向け指導案を各自が作成し、その指導案の内、自分で選んだ5分程度の実践を録画して、大学指定の学習管理システム Google Classroom にアップロードすることにした。この際、J-POSTL エレメンタリーは、①指導案を書く際にどのような点を意識するのか自分で

考えてもらい、②模擬授業実践後に意識した記述文についてのリフレクションを書いて省察を促すために使用することを目的とした。したがって、次の節で詳細を述べるが、2回の模擬授業実践で、いずれも指導案を書く際と模擬授業実践後に振り返る際に、J-POSTL エレメンタリーを使用するようにした（図1参照）。

図1

授業での J-POSTL エレメンタリー使用タイミング（★印）



2. 2020年度後期の模擬授業での指導例

2.1 授業概要

前期の授業ではテキストとして『小学校英語教育法入門』（研究社）と教室英語を学ぶために *Let's have fun - Teaching English*（南雲堂）を使用した。テキストに基づき、外国語の指導法に関して理論的な面を中心に講義を進めた後、授業の最後の部分（12-13回目）では、文字あるいは音の指導をテーマとした指導案の作成、5分間程度の模擬授業の動画の録画、そして実践後のリフレクションの Google Classroom への提出を指示していた。

後期の「外国語（英語）の指導法」では、2つのテキストを引き続き参考図書として、特に外国語の指導初期段階で、実践上配慮すべき事項や具体的な指導上の知識（文字、音韻、他教科連携の指導）について、解説する資料を作成し、説明後に Zoom のブレイクアウトルームを利用してグループで協同学習形式の話合いをし、その後、学び得たことをレポートで提出してもらった。また教材研究として、実践的な授業づくりのために教科書の特徴や使い方、指導に必要な知識などを、小学校5年生と6年生の英語科検定教科書（*Here we go!*, 光村図書）を用いて解説をした。

次に指導案作成時には、教科書の中の Unit の選択は自由としたが、5年生向け指導案は、各 Unit の「展開」部分に当たる Step2 について書くように指示した。各 Unit は導入—展開—まとめの単元構成となっており、展開に当たる Step2 は、活動や練習など単元を中心になっている。一方、6年生向け指導案は、Unit 最後の「まとめ」に

あたる Jump ついて 3-4 名のグループで協力して指導案を 1 つ書くように指示した。これは、Jump では比較的自由度の高い活動の設定が可能で、また学生間の協同性を高めつつ、コロナ禍で課題が増えがちな学期末に学生の負担を減らしたい、というねらいもあった。そして、5 分程度の模擬授業実践を録画し、実践後のリフレクションを Google Classroom に提出するよう指示した。以上の授業内容をまとめると表 2 のようになる。

表 2

2020 年度外国語（英語）の指導法の内容

	内容	実践方法
1	文字の指導	説明後、グループで内容確認、各リポーター役から質問や感想報告
2	音の指導・フォニックス指導	説明後、グループで内容確認、各リポーター役から質問や感想報告
3	他教科連携の指導	説明後、グループで内容確認、各リポーター役から質問や感想報告
4	教材研究 5年生	説明後、グループで内容確認、各リポーター役から質問や感想報告
5	教材研究 6年生／指導案作成の注意点	説明後、グループで内容確認、各リポーター役から質問や感想報告
6	5年生指導案の話し合い	グループでお互いの指導案共有、各リポーター役から質問など報告
7	5年生の模擬授業録画の話し合い×2	グループでお互いの録画を共有、各リポーター役から感想など報告
8	振り返り／6年生指導案の話し合い	グループでお互いの振り返りと指導案共有、各リポーター役から質問など報告
9	6年生の模擬授業録画の話し合い×2	グループでお互いの録画を共有、各リポーター役から感想など報告
10	振り返り・まとめ	グループでお互いの振り返りを共有、各リポーター役から感想など報告
11	外部講師による選択式WS×2	ジョリーフォニックス他全4講座から選択、受講後感想提出

2.2 J-POSTL エレメンタリーと KPT の 3 観点のリフレクションを使った指導手順

5 年生・6 年生用の指導案作成時には、いずれも J-POSTL エレメンタリー（教職課程試用版）の中から、自分で自由に選んだ複数の記述文を意識して書くように指示した。作成した指導案は、協同学習形式で、グループで共有・話し合い、その後修正したい場合は修正後の再提出も可能とした。

また模擬授業実践時は、5 年生は指導案のいずれかの部分で 5 分程度を録画してもらい、一方 6 年生はグループ内で small talk を中心とする導入部分、活動部分、振り返りのまとめ部分と担当を分けて録画し、提出するよう指示した。録画した実践は、授業で共有・話し合いの後、それぞれ実践のリフレクションを、KPT の 3 観点に分けて記述し、Google Classroom にアップロードするよう指示した。具体的には、指導案作成時に参考にした記述文について、どのように実践できたか（記述文の番号のみ記載）を含めて、①自分の実践でうまくできたことや、工夫できたこと(Keep)、②自分の課題（できなかったことや今後は気を付けること）(Problem)、③次から挑戦する

こと(Try), の3つに分けて各160字以上, 合計500字以上で書くよう指導した。よって5年生と6年生の各実践後, KPTの3観点のリフレクションを2回繰り返している。これら2つのリフレクションについては, 複数の記述文について書いているか, また①～③の内容が適切に書けているかに関してのルーブリック評価をした。

2.3 J-POSTL エレメンタリーの使用の効果

学生が提出した, KPTの3観点のリフレクションについて, (1)J-POSTL エレメンタリー(教職課程試用版)の記述文を意識することで履修生は模擬授業実践に対しどのような省察を行うか, (2)5年生と6年生向けの模擬授業の実践の省察に違いはあるか, について分析を行った。5年生用と6年生用のリフレクションのテキストファイルを作成し(各139名, 137名), それぞれKH Coder 3(樋口, 2021)でテキストマイニング分析をした。その際, 出現回数だけでなく共起ネットワーク図から省察に重要と考えられた語を中心に, その文脈を詳細に見る, KWIC(Key Word In Context)コンコーダンスによる分析と考察を行うことで, リフレクションの背景意識もできるだけ拾い上げることにした。

分析の結果², 5年生用模擬授業実践後のリフレクションについては, 特に抽出語彙リストのうち頻度が高い語彙で, かつ学生の学びで特徴的な「授業」を中心に考察を行った結果, 前期にも1回模擬授業実践をしているため少しは慣れてきた様子や, 授業以外の工夫についても考える様子も見られ, さらに他者の実践を見て, さらなる改善点に気づいた様子が伺えた。また, 6年生の模擬授業実践後のリフレクションでは, 合計で3回目の模擬授業実践になったこともあり, (1)実践+リフレクションの繰り返しによって成長がより明確になった。さらに, 実践に慣れてきたことで, 他者の模擬授業実践活動から学びを深め, (2)児童のことをより意識して考えた実践や指導をしようとする姿勢が見られた。また, 6年生用模擬授業の共起ネットワーク図では, 「授業」から直接「考える」や「実践」にも繋がっていたこと, さらにJ-POSTL エレメンタリーの記述文のうち, どの記述文がよく利用されたかを調査した頻度分析で, 児童との関係性を意識した記述文が多かったことも加味して考察すると, (3)J-POSTL エレメンタリーの利用によって児童とのコミュニケーションや関係性を重視する姿勢が培われたと推測された。そして, 5年生のリフレクションでもその傾向が見られたが, (4)KPTの3観点のリフレクションにより, 具体的に省察するポイントをより明確に把握ができるようになっていると考えられた。このように, KPTの3観点のリフレクションによって, 何を維持し, どのような点に改善が必要で, 今後どう改善できるか, を考えることで省察を促しやすいと考えられ, さらに記述文を意識することで, ALTに依存するのではなく, まず児童との関係性を重視するなどの望ましい指導の在り方について意識した様子が確認でき, 指導者としての成長が認められたと考えられた。

3. まとめと今後の活用計画

従来から指導していた英語教職課程の学生に比べ、初等教育課程の学生は、表1に示したように大きく異なるため、担当する2つの授業だけで履修学生の全員に外国語の指導者としての力を育てるのは、2020年度の当初は相当難しいと考えられ、またJ-POSTL エレメンタリーをどのように導入すれば良いかについても思案していた。しかしながら、J-POSTL エレメンタリーは、清田(2020)が述べたように「教師の自律的な成長を目指すポートフォリオ」である。つまり、授業のみで完璧な小学校外国語指導者を目指すのではなく、履修生に対し、指導力向上に向けて、自ら成長を続けようとする態度を育てることが重要、と考えるに至った。そのような態度があれば、授業終了時点では、たとえ「完璧な小学校外国語指導者」とはなっていないとしても、自ら教員になった以降も成長を続けることで、次第に近づくようになるだろう。そのためには、一人一人の学生が自分自身の目標を立て、実践し、振り返り、また調整するというサイクルを繰り返す必要がある。

ところで現在、2021年度の授業を実施中であるが、前期は対面で、後期の当初は遠隔で始まったが途中から対面で、実施している。このため前期の最初の授業で、J-POSTL エレメンタリー(2021)を配布し、「J-POSTL エレメンタリーとは」(p.1)の部分の学生に読んでもらい、大まかな内容と使用目的を解説した。そして、記述文については以下のように説明をした。

- ・初めて見た時は記述文の数を多く感じ、内容が理解できないものもある
- ・指導案作成時に参考にする予定であるため、できるだけ目を通して気になったものを心に留めておく
- ・記述文にあるものは、指導者として意識すべきものである
- ・逆にならないものは、指導者として現在意識する重要性が今は高くない
(例えば「ALTのような発音で指導できる」はない)
- ・グループなどでお互いに話し合うことが、気づきに繋がり大切である

その後「文字あるいは音の指導」をテーマとした模擬授業実践に向けた指導案の作成と、教室での5分程度の模擬授業実践後にグループ内ディスカッションを経てリフレクション記述を書いてもらう際に、J-POSTL エレメンタリーを使用した。

後期でも、対面で模擬授業実践を教室内で実施した以外は、2020年度同様に、小学校5年生と6年生の英語科検定教科書を使用して、それぞれ5年生向けと6年生向け模擬授業を図1のように実施し、J-POSTL エレメンタリーを使用している。したがって、2021年度は図1のサイクルを3回繰り返したことになる。

筆者は、ALTを理想の教師と考えがちな学生に対しては、自己肯定感を育てつつ、

英語力が高いだけで児童を顧みない指導者ではなく、むしろ児童に寄り添いながら一人でも多くの児童が外国語に対し前向きになるような授業展開ができる指導者を指すことの重要性を伝えてきた。筆者が大切にしている現在の授業の目的は、成長に向けてのサイクルを続けることの意義を学生が自ら理解することである。今後も、学生が自律的な成長を目指せるように、授業を考えていきたい。

注

1. J-POSTL エレメンタリーの試用版とは、開発過程の最初の 2019 年に教職課程の試用版として出されたもので、93 の記述文が記載されていた。本稿では試用版を使った実践について述べている。現在は、現職教員用の 74 の記述文を含む暫定版を経て、計 167 記述文を記載した J-POSTL エレメンタリー（JACET 教育問題研究会、2021）が最新版となっている。
2. なおこの調査の詳細な分析結果については、安達（2021）で述べている。

参考文献

- 安達理恵（2021）。「小学校外国語模擬授業の KPT 3 観点のリフレクションと JPOSTL エレメンタリーの導入による成長」全国英語教育学会第 46 回長野研究大会発表資料 8 月 7 日。
- 樋口耕一（2019）. KH Coder. <https://kxcoder.net/>
- JACET 教育問題研究会（2014）. 『言語教師のポートフォリオ（J-POSTL）』. JACET 教育問題研究会. <http://www.waseda.jp/assoc-jacetededu/JPOSTL.htm>
- JACET 教育問題研究会（2021）. 「J-POSTL エレメンタリー」. <http://www.waseda.jp/assoc-jacetededu/JPOSTLElementary.htm>
- 清田洋一（2020）. 「教職課程における J-POSTL の基本的な活用方法と課題」 清田洋一・浅岡千利世・高木亜希子編『教職課程における活用方法』 教育問題研究会.
- 山口高領・米田佐紀子（2020）. 「学生調査から見えた小学校英語教職課程履修生に求められる資質・能力」『Language Teacher Education 言語教師教育』7(1), 31-50. JACET 教育問題研究会.
- Newby, D., Rebecca A., Anne-Brit F., Barry J., Hanna K., & Kristine S. (2007). *European Portfolio for Student Teachers of Languages (EPOSTL)*. ECML/Council of Europe. <https://www.polzleitner.com/epep/Uni/EPOSTL/EPOSTL.pdf>

Newby, D. (2011). Issues in using the EPOSTL. In Newby et al. *Using the European Portfolio for Student Teachers of Languages. European Centre for Modern Language.* /Council of Europe.

https://www.ecml.at/Portals/1/documents/ECML-resources/2011_11_26_EPOSTL_newby_web.pdf?ver=2018-03-21-092741-507

SELECK (2021). 「徹底解説正しい「KPT」が仕事の成果を生み出す！進め方のコツ、現場の事例を紹介」. <https://seleck.cc/kpt>

模擬授業における J-POSTL エレメンタリーを用いた自己省察力の涵養

永倉 由里 (常葉大学)

要旨

本稿は、教育学部初等教育課程の必修科目「英語科教育法」を履修する3年生、120名が取り組んだ模擬授業についての実践研究である。ここでは、①指導案の検討や模擬授業（リハーサルと本番）等の友好的・協働的グループ活動、②教師としての成長を促す意図で作られた「小学校英語指導者のポートフォリオ（J-POSTL エレメンタリー）」の使用、③模擬授業実践への具体的な落とし込みの参考にと筆者が提案した「マイクロ・ティーチング・ストラテジー 20」の活用に重点が置かれた。一連の活動概要と上記②③の活用状況について述べ、学生の振り返り（自由記述）等から成長する教師に欠かせない自己省察力の意義を認識することにつながったことを報告する。

キーワード

小学校英語指導者養成 授業分析 学習者理解 省察方略

1. 実践の背景と概要

1.1 実践の背景

1.1.1 「英語科教育法」に求められるものと学生の実態

小学校英語教育についても学習指導要領に謳われた「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間力等」を養うことが求められているが、早期化・教科化に加え、デジタル教科書を活用した授業が一般的になり、履修生が10年前に総合的学習の一環として高学年で経験したものと大きく様変わりしている。いち早くコア・カリキュラムが示された初等課程の「英語科教育法」においては、学習指導要領で示された概念をもれなく扱った模擬授業を行うこととなっている。しかし、これらの抽象的な概念を模擬授業の指導案や授業実践の中に具体的に落とし込むのは容易なことではない。児童[役]の興味・関心、主体性、共同的な学習態度などに配慮しながら模擬授業を展開させるのはきわめて難しい。

1.1.2 J-POSTL エレメンタリー（自己評価記述文）の活用にあたって

J-POSTL エレメンタリーは 小学校英語教育について自らの専門性を高め成長するために活用するリフレクション・ツールである。そこには、小学校英語教育に必要な指導法の知識や技能が CAN-DO 形式の記述文で明示されており、その記述文をもとに、自身の教師としての資質・能力や授業力を振り返り、授業改善や教職課程での学修に役立てることができる。さらに、自らの成長を確認しながら授業実践や研修・学修を記録することもできる(神保他, 2021)。総じて、その有効性は高いが、使用場面や対象者等に応じて、その活用の仕方には議論の余地がある。

自己評価記述文は、あらゆる角度からの省察を促し詳細に述べられており、その分量の多さに圧倒される。すべてが「概念」を表しており、学生たちにとっては記述文で示された「～できる」力をどのように高めていくかをイメージしにくい。現場経験のない学生にとって「できるか」という問いに答えるのは荷が重いようにも感じる。

柳瀬(2014)は、デューイの省察論から J-POSTL を検討している。すなわち「振り返り」と「省察」とは異なり、「省察」とは経験についての思考であるが、過去について反省するだけにとどまり行動が伴わないものは除かれ、今後の行動について仮説を立てた上で行動し、それを検証するところまでを含んでいる。不完全な状態に甘んじている自己を認識するだけでなく、未来に対する責任の自覚だとも論じている。

また、柳瀬(2014)は、ユングのタイプ論から、「省察」を行う個々人(ここでは教師志望の学生)は、構え(外向性・内向性)も機能(思考・感情・直観・感覚)もそれぞれ異なる存在であることに着目している。さらに、人は自覚している意識だけではなく、無意識のうちに自分を高めよう、社会のためになりたいなどという働きを有しており、そうした無意識の魂のようなものが自覚のある意識のゆがみを正そうとしていることを踏まえるべきだとしている。

この無意識の感情は、安心・安全でオープンなやり取りができる関係性のもとで、選択の余地を与えられるなどして自律性が認められ、興味関心を刺激され驚きや感動を味わえるといった、多くの条件が満たされた状況において生じるとされている。そして、驚くことにこの無意識の感情には、言語使用を活性化させ、思考を高め、ひいては主体的な行動を促す働きがある(Damasio, 2000)ことに注目したい。

従って、教師は学習者の無意識の感情が抑制されることなく、楽しく友好的に学び、各自の思考が学習行動に反映しやすいよう授業づくりに努めなければならない。

1.2 実践の概要

1.2.1 対象学生

対象学生は、2021 年度後期の必修科目「英語科教育法」を受講した教育学部初等教育課程の3年生 120 名である。本学の初等教育課程に英語専攻は設置されておらず、小学校英語に関連する必修科目は、「英語 I」(2 年前期)と「英語科教育法」(3 年後期)の 2 科目である。

2年次の「英語 I」では小学校中学年の外国語活動における聞くこと・話すことに慣れ親しむ活動や見方・考え方を働かせながら行う「言語活動」の特徴を学び、短時間の模擬授業（マイクロ・ティーチング）を行っている。

1.2.2 J-POSTL エレメンタリーの活用場面と活用の意図

模擬授業に取り組む過程で J-POSTL エレメンタリーを使用した。前セッションでも触れた通り、量的にも質的にも充実しているからこそ、その活用には注意を要した。

- ・授業中に時間を取って J-POSTL エレメンタリー開発の目的と構成を解説した。
- ・教職課程履修生用の自己評価記述文 70 を熟読してもらい不明瞭な点は補足した。
- ・模擬授業の指導案作成と並行して自己評価記述文を選択するよう指示した。
- ・自己評価記述文の内容を模擬授業実践に落とし込む方策として「マイクロ・ティーチング・ストラテジー 20」を提示し意識したい方略を選択するよう指示した。
- ・J-POSTL エレメンタリー等を用いた模擬授業の取り組み全体を通して、教師としての省察や自律性の向上の意義を認識してほしいという願いを伝えた。
- ・学生が選択した自己評価記述文、「マイクロ・ティーチング・ストラテジー」および振り返りの自由記述等をデータとして活用した。

詳細については、次のセッションで述べる。

2. 模擬授業での活用例

模擬授業は 2 回行ったが、ここでは *NEW HORIZON orizon Elementary 6*（東京書籍，2020）の Unit 8 を扱った 2 回目の概要を述べる。原則として英語で授業を展開させること、各自が担当する部分と前後の活動とのつながりを意識することを求めた。

2.1 自己評価記述文の熟読・選択と模擬授業指導案の作成

『J-POSTL エレメンタリー』を配布し、その言語学習観、教育観ならびに『ヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR)』（欧州評議会，2001）、「小学校学習指導要領外国語活動・外国語科」（文部科学省，2017）との関連等について解説し、課題として教職課程履修生用の自己評価記述文 70 を熟読してもらった。

数人のグループで、単元計画における模擬授業場面（導入、練習、発表等）の狙いと特徴を確認し合い、話し合いにより担当する箇所が決められた。教師役は指導案の作成と並行して、意識したい自己評価記述文とマイクロ・ティーチング・ストラテジーを選択した。なお、デジタル教科書はキャンパス内で視聴できるようになっている。

2.2 模擬授業リハーサルを通じたグループ活動

リハーサルは、教師役が指導案の内容と活動の狙いを説明し、選択した自己評価記述文とマイクロ・ティーチング・ストラテジー（表1参照）を伝えた上で行われた。リハーサル後の意見交換を受け、加筆・修正された指導案はクラウド上で共有された。

表1

「マイクロ・ティーチング・ストラテジー 20」

- | |
|--|
| <p>①指導案（[言語]活動の特徴と目的，英語表現，語彙）の検討</p> <ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/> 1. 図書館やネット上にある「指導案例」を参考にする <input type="checkbox"/> 2. ネット上にある「指導例の動画」を参考にする <p>②社交・情緒ストラテジー</p> <ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/> 3. リラックスして，児童役と英語活動を楽しむ <p>③良きモデルとしての正確さのためのストラテジー</p> <ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/> 4. 発音，イントネーションを確認する <input type="checkbox"/> 5. 文法や語順を確認する <p>④英語での意思疎通のためのストラテジー</p> <ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/> 6. 大きな声ではっきり話す <input type="checkbox"/> 7. 発音，イントネーションやリズムに気をつけて話す <input type="checkbox"/> 8. 簡潔で平易な英語表現を用いる <input type="checkbox"/> 9. ゆっくり言う（間の取り方を調整する） <input type="checkbox"/> 10. 繰り返して言う <input type="checkbox"/> 11. 例をあげる <input type="checkbox"/> 12. 合いの手，ほめ言葉，疑問文等を用い，やり取りをつなげる <p>⑥非言語ストラテジー</p> <ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/> 13. 笑顔を保ち，アイコンタクトを行う <input type="checkbox"/> 14. ジェスチャーや表情をつける <p>⑦教材・教具の活用</p> <ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/> 15. 画像・映像・ポスター・実物などを用い，視覚に訴える <input type="checkbox"/> 16. 音声教材を用い，聴覚に訴える <input type="checkbox"/> 17. 教具・カード等を用い，手作業を取り入れ，思考を促す <p>⑧本番までの自己調整ストラテジー</p> <ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/> 18. 指導案・教具作成・リハーサルなどの時間を確保する <input type="checkbox"/> 19. リハーサルを自撮りして，修正を図る <input type="checkbox"/> 20. 友達・教員等に相談する，話し合う |
|--|

模擬授業当日には、各々が教師役，児童役，動画撮影係を務めるとともに、ループリックによる自己評価ならびに相互評価が行われた。また、一連の模擬授業への取り

組みについて 80 字以内で振り返るよう求めた。振り返りの自由記述や各グループの有志により 8 分程度に編集された模擬授業の動画は学生の許可を得て共有された。

2.3 学生が選択した自己評価記述文とマイクロ・ティーチング・ストラテジー

167 の自己評価記述文は教職経験を積むごとに向上していくことを前提に、能力スケール（教職課程履修生用，初任教員用，育成教員用 [5 年程度]，中堅教員用 [～15 年程度]，熟練教員用）に分類されている。学生は，担当する模擬授業のねらいや内容に応じて，教職課程履修生の自己評価記述文 70 の中から 1～3 文を選択した。

さらに，それぞれの自己評価記述文を具現化するために使用するマイクロ・ティーチング・ストラテジーを選んだ。領域ごとに記述文を選択した学生の延べ人数とマイクロ・ティーチング・ストラテジーの選択状況を表 2 に示す。

表 2

選択した自己評価記述文とマイクロ・ティーチング・ストラテジー

分野	領域 (教職課程履修生 用の記述文数)	記述文を選択した延べ人数	指導案例を参照	指導例動画を参照	リラクセスする	発音・抑揚の確認	文法・語順を確認	大きな声	発音・抑揚に気をつける	簡潔で平易な英語表現	ゆっくり話す	繰り返して言う	例をあげる	ほめ言葉・合いの手	笑顔・アイコンタクト	表情・ジェスチャー	画像・実物等	音声教材の使用	カード等の手作業を入れる	時間の確保・調整	自撮りリハーサル	友達や教員に相談する	
																							3
I 教育環境	A. 教育課程(1)	3	0	0	1	2	1	2	2	2	0	3	1	0	1	1	3	3	1	2	0	0	
	B. 目標とニーズ(5)	28	4	4	15	8	5	11	6	7	6	2	9	8	6	5	5	4	4	4	1	1	
	C. 語学教師の役割(6)	12	2	1	6	2	1	4	1	4	3	2	1	1	1	4	4	3	1	1	1	2	
	D. 組織の設備制約(1)	3	1	0	0	1	0	1	1	0	1	0	0	2	1	0	1	1	0	0	0	0	
II 教授法	A1. 話す/やり取り(6)	67	8	4	21	13	11	20	9	21	18	14	26	18	22	22	11	8	10	5	4	9	
	A2. 話す/発表(5)	31	5	3	14	6	7	8	8	16	12	10	12	7	6	8	9	5	7	4	0	6	
	B. 書く活動(2)	17	2	1	5	2	1	4	5	8	7	5	12	3	4	3	5	1	3	3	1	0	
	C. 聞く活動(2)	10	2	2	5	0	1	2	1	3	2	1	3	2	1	2	6	5	6	1	1	1	
	D. 読む活動(3)	15	0	2	3	10	1	8	8	5	4	4	0	0	2	0	7	2	4	1	0	2	
	E. 文法(1)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	F. 語彙(2)	13	2	0	5	4	5	4	4	5	4	6	4	2	1	1	7	1	2	2	0	1	
	G. 文化(2)	5	1	1	3	0	1	4	2	3	2	1	2	1	2	2	2	0	0	1	1	0	
III 教授資料の入手先(5)	14	2	2	3	4	3	4	5	3	4	3	4	4	4	2	1	6	3	4	0	0	3	
IV 授業	A. 学習目標設定(4)	2	1	2	1	1	0	1	1	1	1	0	0	1	1	1	0	0	1	1	0	0	
	B. 授業内容(3)	28	0	1	14	5	4	10	6	10	5	4	12	10	8	10	14	5	10	3	0	7	
	C. 授業展開(4)	21	6	1	9	1	5	4	4	4	4	3	3	8	3	3	3	1	1	4	1	5	

V 授業実践	A. 授業案の使用(5)	5	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	1	2	0	1	3	2	1	1	0	0
	B. 内容(1)	1	0	1	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	
	C. 児童との交流(2)	13	1	1	7	0	1	3	2	7	5	3	3	8	5	3	3	2	3	2	2	2	
	D. 授業運営(3)	13	1	0	4	1	1	4	2	4	1	1	5	3	3	3	8	2	2	1	0	2	
	E. 教室での言語(3)	22	0	1	5	0	1	8	1	1	1	6	6	0	6	6	4	2	2	2	0	1	
VI自立学習(1)	2	0	0	1	0	0	1	0	1	0	1	1	2	1	1	0	0	1	0	0	1		
VII 評価	A. 測定法の考案(0)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	B. 評価(0)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	C. 自己相互評価(0)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	D. 言語運用(0)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	E. 国際理解(2)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	F. 誤答分析(1)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	計 (70)	325	38	27	123	61	114	105	68	115	90	69	105	82	76	77	101	51	63	38	13	43	

学生が選択した自己評価記述文は表2および図2の通りである。紙幅の関係で一文ずつについてのデータは割愛し分野・領域ごとにまとめた。学生の多くが選択したのは、話す活動の場面設定、教師の英語使用、授業内容（興味関心の喚起）であった。

・ II教授法 A-1 話す活動(やり取り)-1

児童を話す活動に積極的に参加させるために、協働的な雰囲気を作り出し、具体的な言語使用場面を設定できる。(18人)

・ II教授法 A-1 話す活動(やり取り)-4

自分に関する質問に答えたり相手のことをたずねたりする短いやり取りができる力を育成するための活動を設定できる。(15人)

・ II教授法 A-1 話す活動(やり取り)-5

表情、ジェスチャーあいづちなどの非言語コミュニケーションを効果的に使って、相手とやり取りができる力を育成するための活動を設定できる。(15人)

・ II教授法 A-2 話す活動(発表)-1

自分の好き嫌い、趣味、得意なことなど、聞き手に伝えたい内容を整理してから、基本的な語句や表現を使って紹介することなどができる力を育成するための活動を設定できる。(15人)

・ V授業実践 E 教室での言語-2

英語で授業を展開するが、必要に応じて日本語を効果的に使用できる。(17人)

・ VI授業計画 B 授業内容-1

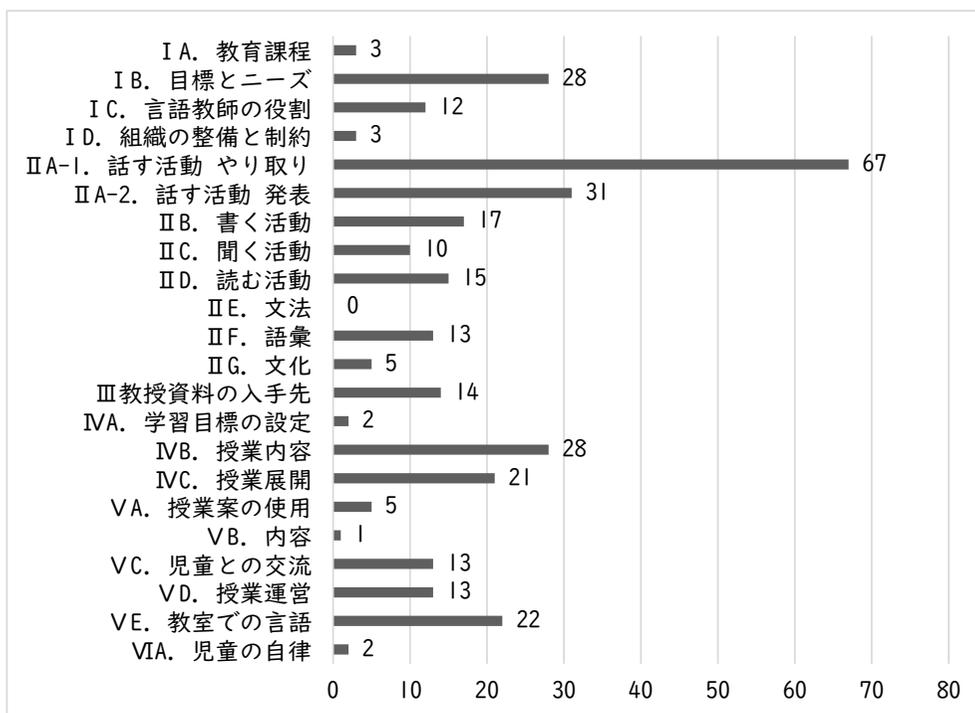
児童のやる気や興味・関心を引き出すような活動を設定できる(13人)

グループ活動の様子からも、児童[役]が自分のこと・本当のことについて伝え合う場面の設定について意見を交わす姿が見られた。発声やパターンの練習と言語活動との違いを理解しており、やる気や興味・関心を引き出せるような活動を設定し、児童

間の交流を支援しようとしていた。

図 2

学生 120 人が選択した J-POSTL エレメンタリーの自己評価記述文の延べ数



マイクロ・ティーチング・ストラテジーについては、リラックスするなど態度に関するもの、平易で伝わりやすい英語使用、文法・語順の確認、視覚資料の活用などが多く選択されている。模擬授業の様子からもなるべく英語を使いながら楽しくスムーズに授業を進めようとしていることが見て取れた。一方、時間調整やリハーサルなど準備段階での授業外の自律的な取り組みへの意識は薄かった（図 3 参照）。

一連の模擬授業への取り組み後の調査からは、自己評価記述文とマイクロ・ティーチング・ストラテジーを選択し模擬授業に臨んだことで、ある程度は「模擬授業について意識すべきことがわかった」「適切な自己評価記述文を選択できた」「ストラテジーを模擬授業に反映させることができた」と回答するにとどまった。[模擬]授業の出来栄として実感するには長い時間を要するため当然のことと言えよう。注目したいのは「学びの過程を意識しこれまでより自律的に取り組めた」と自己評価している点である（図 4 参照）。参考までに選択した記述文についての事前・事後の 5 段階評価を見ると、2 ポイント向上（述べ 23 人）、1 ポイント向上（述べ 140 人）、変化

なし (述べ 97 人), 1 ポイント下降 (述べ 56 人), 2 ポイント下降 (述べ 6 人) であ
 った。各記述文の難易度にはかなり幅があるため、ポイントの変化よりもむしろ自由
 記述を質的に分析することで学生理解につなげたい。

図 3

学生 120 人が選択した マイクロ・ティーチング・ストラテジーの延べ数

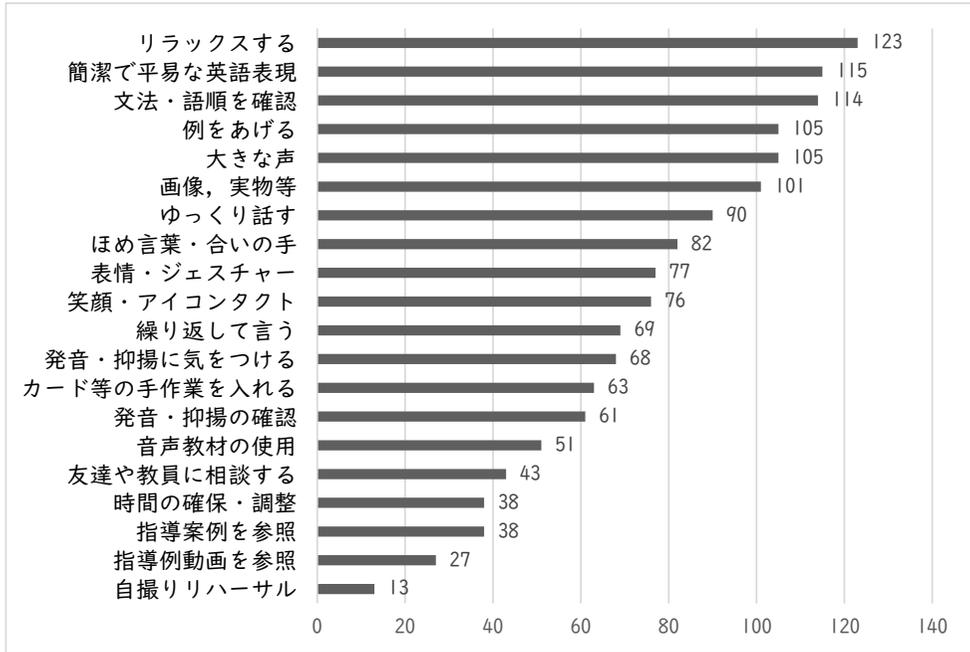
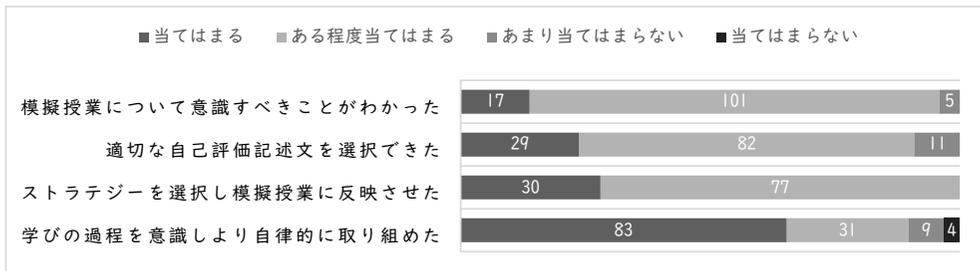


図 4

自己評価記述文とマイクロ・ティーチング・ストラテジーを用いた模擬授業について



自由記述には, 学習指導要領が求める「学びに向かう力」, 変化すべき授業観・指
 導観, 個別最適な学びへの配慮, 協働性・ICT 活用への意欲などが述べられ, 教育改
 革のポイントとして挙げられている事柄への気づきを読み取れる (表 3 参照)。

表 3

主な感想等の自由記述の概要（コード化、カッコ内は記述した述べ人数）

コード名	概要例
PDCA を回し成長する (34)	PDCA サイクルを意識し質の高い授業を求める (31)
	自分に何ができるかを考え続けることが大切 (2)
	失敗を恐れず PDCA サイクルを回し続けたい (1)
授業で大切なこと (21)	興味・関心を喚起する (5)
	授業づくりが何より大切 (3)
	ICT の活用 (3)
	準備・リハーサルが大切 (3)
	明確な授業のゴールを設定する (3)
教師の役割 (20)	評価基準を児童に示す (1)
	教師が身を持って学びの楽しさを示す (8)
	学びたいと思わせることが大切 (5)
	知識を教えるのではなく道筋を示して促す (3)
	児童に気づかせ考えさせる (2)
児童の主体的な学び (16)	教師は裏方, Teaching より Coaching (2)
	主体的に学べるように工夫・支援する (12)
	児童の発言を授業展開に反映させる (2)
	児童に合わせた活動の設定で主体性を促す (1)
	ICT を活用して主体性を促す (1)
学び続ける姿勢 (13)	学び続ける姿勢を持ち続けること (8)
	時代に合わせた教育方法を学び続けること (3)
楽しい授業 (11)	教師も児童も楽しみながら学べる授業 (7)
	楽しいから主体的になれる授業 (4)
児童理解 (8)	児童の実態把握・見取る力が必要 (8)
教師同士の協働 (8)	他の教員に助言を求め学び続ける (3)
	互いの授業を見学・評価し合う (3)
	他者の教育観・指導観に触れる (1)
知識・実践への不安 (8)	やるべきことが多く難しいと感じる (5)
	英語力への不安 (1)
学びに向かう力の育成 (7)	児童に PDCA を意識させること (2)
	的確な振り返りの仕方を育てる (3)
	授業を改善するための意見を求める (1)
	相互評価を行う (1)

児童とともに学ぶ (7)	教師も児童に教えることを通して成長する (2)
	児童とともに学び続ける (4)
	教師が成長すれば児童も成長する (1)
雰囲気・環境づくり (4)	誰一人取り残されない環境づくり (1)
	楽しく好意的なクラスづくり (1)
	信頼し合える関係性づくり (1)
寄り添い支援する (4)	一人ひとりに寄り添う支援・補助 (3)
	教師のこぼれ掛け (1)

3. まとめと今後の活用計画

児童の学びに向かう力を育成しうる教員の養成は、決して容易なことではないが、J-POSTL を用いることで学生たちが自律性の大切さとその変容の可能性を認識してくれたことを嬉しく思う。次年度は①選択した自己評価記述文を模擬授業に反映させる段階での検討と共有をさらに充実させること、②昨今強調されている「ICT 活用」「個別最適な学び」に焦点を当てた「学びに向かう力」の涵養についての議論を深めることに重点を置き実践研究を継続する予定である。

参考文献

- 神保尚武, 久村研他 (2021). 『小学校英語指導者のポートフォリオ』
JACET 教育問題研究会
<http://www.waseda.jp/assoc-jacetenedu/CompleteJPOSTLElementary.pdf>
- 文部科学省 (2017). 『小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 外国語活動・外国語編』
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/fieldfile/2019/03/18/1387017_011.pdf
- 欧州評議会 (2001). 『ヨーロッパ言語共通参照枠』 <https://rm.coe.int/1680459f97>
- 柳瀬陽介 (2014). 「J-POSTL は省察ツールとして 英語教師の自己実現を促進できるのか—デュイとユングの視点からの検討—」 「言語教育エキスポ 2014」 発表資料 <https://yanaseyosuke.blogspot.com/2014/03/j-postl-2014.html>
- Damasio, A. (2000). *The feeling of what happens*. New York: Mariner Books.

Integrating the JPOSTL elementary into English-focused classes for pre-service teachers: Challenges and Benefits

Gaby Benthien (Shumei University)

Abstract

All elementary schools across Japan had to add a foreign language as an assessed subject to the Year 5 and Year 6 curriculum, and foreign language activities to the Year 3 and Year 4 curriculum from 2020 after a two-year transition period. As a consequence, university students taking elementary school license credits also now have to take two additional courses: Elementary Education English Content (EEEC) and Elementary Education English Methodology (EEEM). The two courses are designed as a set to foster practical second (foreign) language (L2) skills, provide an introduction to L2 methodology, and instill self-awareness, self-confidence, self-sufficiency and a positive mindset in pre-service teachers to enable them to flourish, rather than flounder if they find themselves expected to take an active part in L2 classes. The Japanese portfolio for student teachers of languages elementary J-POSTL (E) was introduced in these courses as a reflection tool. Comments from the students using the portfolio reveal that in addition to reflection, the J-POSTL (E) also functions as a checklist and roadmap, as well as a goal setting resource. Given that the J-POSTL (E) was used in online, hybrid and face-to-face classroom contexts, more research is required to explore its long-term effect once students graduate and are working in real-life L2 teaching contexts. Lastly, the report offers some ideas for possible future uses and further adaptations of the portfolio.

Keywords:

J-POSTL (E); Elementary Teacher Development; L2 education; Reflection & Practice

1 Introduction and Background

Second (foreign) language (L2) education has been gradually introduced into the Japanese elementary school curriculum (Year 1 to Year 6) from the late 1980s, with L2 classes being made compulsory in 2020. The introduction of these compulsory foreign language (Year 5 and Year 6) and foreign language activity classes (Year 3 and Year 4) represent the culmination of 35 years of L2 implementation strategies for elementary L2 education in Japan. Needless to say, pre-service teacher education also had to adjust to

these changes accordingly.

Back in 1985, Kitao commented that “most elementary schools, which are municipally controlled, do not provide foreign language instruction, but some elementary school students learn English through private schools as early preparation for academic competition (Kitao, 1985, p.1). In the 1990s, experimental English activities commenced at pilot schools. This was followed by the introduction of Integrated Studies [総合的な学習] in 1998, used for international understanding, language, IT, environmental studies and social welfare/health based classes. By 2006, 97% of elementary schools had implemented English activities in some way. However, concerns persisted over whether teaching English concurrently with Japanese in elementary schools would impair L1 development. As a consequence, plans for introducing English as a full curriculum subject in Japan's 24,000 elementary schools were held back (Aoki, 2016). In 2011, foreign language activities were implemented at elementary schools (35 lessons per year). To fit in with the start of these classes, MEXT began to develop teaching resources starting with English Note [英語ノート 1 & 2] (2009) and Hi Friends 1 & 2 (2012) + 30 online worksheets added for writing practice. These resources were also used at universities for elective L2 teacher preparation courses.

In 2013, the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT) revealed a reform plan *グローバル化に対応した英語教育改革実施計画* or *The English Education Reform Plan corresponding to Globalization* in English which included compulsory foreign language activities for Year 3 and Year 4 and foreign language classes for Year 5 and Year 6 (MEXT, 2013a; MEXT, 2013b). Frameworks outlined in the plan included the following:

- ◇ Empower teachers in elementary school.
- ◇ Create measures for the additional posting and training of English education promotion leaders in elementary school.
- ◇ Improve teaching skills of specialized English course teachers.
- ◇ Improve English teaching skills of elementary school class teachers.
- ◇ Develop and provide audio teaching materials for training.
- ◇ Improve teacher training program and teacher employment.

(MEXT, 2013b)

The reform plan was fully implemented across all elementary schools in 2020. In order to prepare students and teachers for this change, Let's Try 1 & 2 and We Can 1 &

2 resources were developed by the MEXT to be used during the transition period between 2018 and 2020, and in the case of Let's Try, beyond the transition period. During the same time, a number of textbooks for pre-service teachers also appeared on the market.

In general, Japan has often looked to Europe for L2 teaching and learning development ideas, and has adapted a number of European frameworks and guides to the Japanese L2 context including the Common European Framework of Reference for Languages (CEFR), which became CEFR-J, and the European Portfolio for Student Teachers of Languages Elementary (E-POSTL), which became the Japanese Portfolio for Student Teachers of Languages (J-POSTL). This portfolio was developed by the JACET SIG on English Language Education in 2014 and later on formed the base of the elementary education version of the portfolio. The project to develop the Japanese Portfolio for Student Teachers of Languages Elementary (J-POSTL (E)) commenced in 2016, and the hard copy became available in 2021. Please refer to JACET (2014) and JACET (2021) for a digital version of these two portfolios.

This report investigates the adaptation of the J-POSTL (E) in pre-service teacher education classes at a university in the Kanto area. For details about the development of the J-POSTL (E), see Yamaguchi, Osada, Hisamura, and Benthien (2019).

1.1 Context

The private university at which this research took place is located in the Kanto area of Japan. It comprises five faculties, and has a student population of just over 2000. The research focuses on students in the Teacher Education (TED) faculty wishing to obtain an elementary education teaching license. As all students entering the TED faculty must first choose a main subject specialization (Japanese, math, science, English, PE or social science), this means they obtain a subject specific secondary education license with the elementary license as an added option. All students live on-campus.

All students registered in the elementary teaching license program have to take a content/practice course and a methodology/theory/application course of 15 weeks each for all subjects taught at elementary schools. As a foreign language became a subject in 2020, TED students thus take Elementary Education English Content (EEEC) and Elementary Education English Methodology (EEEM). These courses were first introduced as elective classes in 2018, and were made compulsory from 2020. The EEEEC course must be taken before the EEEM course. While the classes are usually taken by 3rd year students, 1st and 2nd year students can also enroll. In 2020, there were six sets of classes while in 2021 the number rose to nine. The number of students in

EEEC and EEEM classes usually ranges between 20 and 50. As a set, these courses aim to give pre-service teachers the know-how and confidence to take an active role in (co) teaching foreign language activities classes (Year 3 and Year 4) and foreign language classes (Year 5 and Year 6).

All TED students, regardless of specialization must also complete a study abroad program. English specialization students take part in a 5-month program while other majors participate in 4-week program. Both programs feature intensive English classes, a homestay and school visits. The programs have been temporarily suspended since April 2020 due to the pandemic, and thus only the current 3rd year students or above have completed a program. Despite these programs, the students' English skills do vary, as do their feelings and experiences concerning English or teaching English.

The majority of students in the TED faculty want to become teachers, consequently they are very motivated to teach, and by 3rd year, have spent time in the classroom as volunteers, and completed a number of demonstrations classes in various courses. However, while all students are taking these courses to obtain the elementary education license, not all students are actually intending on working in elementary schools. Thus EEEC and EEEM classes comprise students of different specializations and varying English levels who may or may not become elementary school teachers upon graduation.

This report discusses classroom observations and comments made by students in classes taught by the author in regard to J-POSTL (E) usage. I have a background in both elementary and secondary education in Australia and Japan, and have been involved with teaching classes in the TED faculty relating to elementary school English since 2011, when foreign language activities classes were introduced in elementary schools. As I am German by birth, I completed Year 1 through to part of Year 6 in Germany, before immigrating to Australia at the age of 12. Education frameworks originating in Europe have always been of interest to me since I became a language educator in 1991. My research interests include L2 motivation and teacher development, thus any tools that support motivation and teacher development are of interest to me. When given the opportunity to join the JPOSTL research group, I was keen to accept as I could envisage the benefits the J-POSTL (E) may bring to pre-service (and in-service) elementary school teachers.

The J-POSTL was initially handed out to English specialization majors at the university while aspects of the J-POSTL (E) were introduced into EEEC and EEEM classes from 2020. Both EEEC and EEEM are comparatively practical classes, and the dossier section and self-assessment descriptors (SADs) section in the J-POSTL (E) were

anticipated to act as an aid to reflect upon and discuss the skills deemed important for language teachers.

1.2 Overview of Implementation

This report focuses on the introduction and use of the J-POSTL(E) in a 2020 EEEM course ($n=39$), a 2021 EEEEC course ($n=31$), and a 2021 EEEM course ($n=21$). The difference in the 2021 course numbers was due to some of the 3rd year students having decided to concentrate on secondary schooling. In fact, at the end of the 2021 EEEEC in first semester, 7 students were interested in becoming elementary school teachers, 8 were not and 18 were undecided. By the end of the EEEM course in Semester 2, only 3 of the 21 students wanted to become elementary school teachers.

While aspects of the dossier and SADs were discussed in class, the J-POSTL (E) itself was not included in class evaluation. All classes during this period were affected by the COVID-19 pandemic. In 2020, classes were held fully online or in a hybrid style. Semester 1, 2021 classes were also held in a hybrid style, while Semester 2, 2021 began in a hybrid style in the first two weeks, changed to face-to-face from Week 3, and returned to a hybrid style in the last 2 weeks of the semester. Comments from the students were collected via Google Classroom.

The EEEEC course focuses mainly on enhancing general English proficiency and confidence, reviewing English language content taught in elementary school, and the acquisition of classroom English skills. The class commences with a review of the students own language experiences and a discussion about what skills are required by homeroom teachers to teach L2 classes on their own or in a team teaching context. The J-POSTL (E) dossier section (pp.7-8) was used during this time as a supplementary resource to encourage reflection. The remainder of the class focuses on actively using classroom language using *Let's have fun teaching English* by Obara, Toyoda, Takahashi & Rogers (2021), and introducing different units from *New Horizon 5 and New Horizon 6* by Allen-Tamai, Ano, and Hamanaka (2020) in 2021. Students were also encouraged to read through the J-POSTL (E) SADs, and to do an initial self-evaluation by the beginning of Semester 2.

The EEEM course focuses on second language acquisition (SLA), L2 teaching skills and methods, techniques, resources, lesson planning, and evaluation. The 1st and subsequently 2nd edition of the textbook *小学校英語始める教科書 Total Guide for Elementary English Education* by Ogawa, Higashi, and Yoshida (2021) is used throughout the semester. The J-POSTL (E) SADs are matched with lesson content, and are mainly taken from the methodology section, pp.16-26.

Thus, the in-class practical experiences provided by the EEEEC and EEEM courses provide opportunities for the pre-service teachers to physically and mentally embrace and get used to and maybe even enjoy the role of L2 teacher while supported by their peers. As not all students will have an opportunity to actually teach English as volunteers or during teaching rounds, these two courses represent the only preparation given to pre-service teachers before they stand in front of a real class. For this reason, it is essential to instill a positive mindset, which includes building up their confidence, enjoyment, enthusiasm, interest, and engagement as well as fostering a growth mindset.

2 Actual Utilization of the J-POSTL (E) in Class

The EEEEC and EEEM courses are already very dense in content, as they are the only two courses focusing on English teaching in the elementary education curriculum. As a result, the J-POSTL (E) was used in conjunction with the existing class content.

In 2020, extracts J-POSTL (E) SADs focusing on methodology were given to students in the EEEM class via Google classroom as relevant sections came up in the 15-week course (pp.16-26). The 2021 cohort were given a hard copy of the J-POSTL (E) at the beginning of the EEEEC class in Semester 1.

2.1 The 2020 EEEM Class

I asked students this class ($n=39$) whether the J-POSTL (E) SADs were useful at the end of the semester using a Yes/No/So-so option and an open-ended question on Google Classroom. The response to the J-POSTL (E) was positive, with 38 affirmative responses and one so-so response. The following themes emerged from the open-ended question and are presented in Table 1. Comments from the students were translated by the author and included in Table 1 to explain each theme in more detail, and to give the students a voice.

Table 1

Themes and Comments after J-POSTL (E) Usage in EEEM Course in February 2020

Theme	Supporting comments
A road map	“I think it was very good. Until now, I didn’t know how much I was able to do or what skills I needed, so I think I’m very lucky to do my evaluation and observe myself from various perspectives.”
Goal setting	“It was very helpful because it gave me a goal and an index to identify and acquire the abilities I lack in teaching English.”

Self-evaluation	“When I did the SADs for the second time, it became clear where I needed to improve.”
A diary for reflection, visualization, and recording improvement	<p>“I thought that I could acquire knowledge by reflecting on what I actually did – like a diary. I was able to visually understand what kinds of skills are required for activities.”</p> <p>“When I reflected on my skills (for the 2nd time), I was happy that I was able to do more things. I thought that I could use it even if I became a teacher because I could grasp my current ability.”</p>

The chosen J-POSTL (E) SADs appeared to act as a roadmap, a set of goals, a visualization aid as well as a tool for reflection in combination with the practical content of the course. “Knowing where to go” seems to give pre-service teachers confidence. SADs were also seen as useful for finding and subsequently evaluating strengths and weaknesses. The students could reflect on the SADs before and during the course or before and after an activity related to a particular set of SADs. In this way, the SADs could scaffold the students’ vision or image of what knowledge and skills an L2 teacher should possess while seeing tangible improvement in the SADs led to positive feelings.

2.2 The 2021 EEEEC and EEEM course

The 2021 cohort received a hard copy of the J-POSTL (E) at the start of Semester 1. However, half the group was online (despite actually being on campus), and some students did not pick up the J-POSTL (E) from the English office until the 2nd or 3rd week of the semester.

2.2.1 Using the dossier section in EEEEC

This course was taught in a hybrid style, which means that some students were online whereas others were in the classroom. Online students were asked to pick up the J-POSTL (E) from the English Office. The students were encouraged to complete the *dossier* section (pp.7-8) at home, and we also spent some time discussing their past L2 experiences in the first two weeks of the course. However, these first two weeks were in fact rather hectic, and there was not a lot of time to spend on a detailed explanation of the J-POSTL (E) itself or the *dossier* section. The student comments made at the end of the course do reflect that they didn’t quite know what to do with the J-POSTL (E) at this early stage. In other words, time needs to be set aside for this explanation, but as the course is already dense in content, it is difficult to take this time out of class. Thus,

some students did not complete this section or were unsure of what to do. Nevertheless, many students were curious about the SADs and started reading this section. The comments in Table 2 exemplify the situation.

Table 2

Comments after J-POSTL (E) Usage in EEEEC Course in August 2021

Usage	Supporting comments
Dossier section completed	<p>“It was useful. It helped me to reflect on myself.”</p> <p>“It helped me look back on my learning.”</p> <p>“I was able to objectively see my past learning of English and my current English ability.”</p>
Limited usage and possibilities	<p>“I couldn’t make much use of it, so I would like to read it carefully and make use of it.”</p> <p>“I was able see what kind of lessons/content I should teach in terms of reading, listening, and writing activities, and review/evaluate my teaching skills. I think it gave me the opportunity to re-examine myself.”</p> <p>“As we didn’t use the J-POSTL (E) much in class, I didn’t quite understand its usage. However, I think I could get to know myself a little by writing about myself.”</p> <p>“I was able see what kind of lessons/content I should teach in terms of reading, listening, and writing activities, and review/evaluate my teaching skills. I think it gave me the opportunity to re-examine myself.”</p>

2.2.2 Using the SADs

The students in this group were asked to complete their first SADs check during the summer vacation. Once the Semester 2 EEEM class commenced face-to-face, students were encouraged to read out and discuss the SADs during a series of mini demonstration sessions spread out over eight weeks, during which the students had to come up with activities fostering the acquisition of reading, writing, listening and speaking skills, and then share these ideas in small groups. This was followed by the planning and subsequent teaching of a 12-minute demonstration class featuring a lesson introduction or ending and an activity in front of the whole class. The *methodology* section and *resources* section (pp.16-29), and the *lesson planning* section and the *conducting a lesson* section (pp. 30-40) of the J-POSTL (E) SADs were mainly used.

Similar themes to the 2020 class emerged regarding the use of the SADs as viewed by the students.

Table 3

Themes and Comments for J-POSTL (E) Usage in EEEM Course in January 2021

Theme	Supporting comments
Reflection and Growth	“Helpful. I was able to reflect on my existing skills and experience the process of growth.”
Perspectives and guide for demonstration lessons	“After giving a mini demonstration lesson, I learned what kind of perspectives I should reflect on.” “It was a reference for thinking about how children can learn independently, interactively, and deeply when thinking about mini demonstration lessons and demonstration lessons. Also, I was able to reflect on the demonstration lesson after teaching it, which was useful for finding future improvements.”
Checklist	“I was able to understand which points I should pay attention to when thinking about a demonstration lesson plan.”
Roadmap for teaching (and evaluation)	“It was useful. This is because it became clear what to focus on when evaluating children and where to focus on when teaching.” “It helped me in self-assessment and thinking about what to improve.” “I learned the viewpoint of self-evaluation as to what kind of viewpoint should be tackled in learning.”
Aid to experiencing improvement	“In particular, I was able to objectively see what kind of power I had acquired from the time I started taking this course to the present, which helped me improve my class skills.”

The comments in Table 3 seem to support the fact that the J-POSTL (E) and SADs are most effective if tied to actual course content. Furthermore, the students were able to see the direct link between the J-POSTL (E) and demonstration lessons, and other practical activities. In addition, it helped the students visualize what kind of persona, skills and knowledge are required to be an L2 teacher.

3 Summary and Future Use

Elementary school teachers are expected to teach all subjects. However, only two undergraduate courses of 15-weeks each are set aside for each subject in the elementary education license course. The content could easily be spread over four courses (rather

than just two). As the J-POSTL (E) is designed for pre-service and in-service teachers, some of the SADs are not applicable to pre-service teachers. Even though these SADs are marked *apprentice*, *practitioner* and *expert*, the students in fact still read through all SADs, and even discussing and explaining every applicable SAD is challenging due to time restraints.

The comments made by the students also underline that reflection is best approached in combination with practice. While I would still consider distributing a hard copy or digital copy of the J-POSTL (E) to all students in the future, I am likely to use a selection of SADs that is manageable and applicable/complementary to course content.

There are a number of SADs that relate to general teaching skills and knowledge and are not exclusive to L2 education. For example, in *Lesson Planning* subsection *Identification of Learning Objectives* (p.31), five of the six SADs are in fact applicable to all subjects taught at elementary school. This has both positive and negative ramifications. On a positive note, these cross-curricular SADs are excellent as they pertain to all subjects, and students can see their value beyond the L2 context. On the other hand, we must then question why such a portfolio is only developed in the L2 context when in fact it is equally useful for other specializations as well. My suggestion would be to produce a portfolio for pre-and in-service elementary school teachers comprising general SADs (applicable to elementary education as a whole) and subject specific SADs.

Lastly, foreign language and foreign language activity classes in Japan are not exclusively taught by Japanese teachers of English and homeroom teachers. A majority of classes at the elementary level are in fact prepared and taught by assistant language teachers or non-Japanese language instructors or teachers. Often, these teachers involved in elementary L2 education are not aware of each other's' experiences, perspectives and professional development. Thus, all groups of teachers should be able to have access to English versions of the portfolio in order to build a common "well" of knowledge and establish common ground to aid the creation of a community of practice (Wenger-Trayner, & Wenger-Trayner, 2015), and best practice in elementary school L2 education. After all, education is not only about teachers; we must always ascertain that our efforts in (L2) education and training are in the best interest of the learners.

References

Allen-Tamai, M., Ano, K., & Hamanaka, N. (2020). *NEW HORIZON Elementary*

English course 5 and 6. Tokyo Shoseki.

Aoki, M. (2016, September 5). Japan Times online. *English heads for elementary school in 2020 but hurdles abound*.

<https://www.japantimes.co.jp/news/2016/09/05/reference/english-heads-elementary-school-2020-hurdles-abound/#.XGUJuz7RPY>

JACET 教育問題研究会 [JACET SIG on English Language Education]. (2021). 小学校英語指導者のポートフォリオ [J-POSTL for elementary school teacher education].

<http://www.waseda.jp/assoc-jacetedu/CompleteJPOSTLElementary.pdf>

JACET 教育問題研究会 [JACET SIG on English Language Education] (2014). 言語教師のポートフォリオ [Japanese Portfolio for Student Teachers of Languages].

https://www.ecml.at/Portals/1/documents/ECML-resources/EPOSTL_Japanese_PreServiceVersionJPOSTL_2014-small.pdf?ver=2018-11-12-120533-947

Kitao, K. (Ed.) (1985). *TEFL in Japan: JALT 10th anniversary collected papers*, p.127-137. <https://files.eric.ed.gov/fulltext/ED265741.pdf>

Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT), (2013a). グローバル化に対応した英語教育改革実施計画 [English education reform plan corresponding to globalization]

https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afieldfile/2014/01/31/1343704_01.pdf

Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT) (2013b).

English education reform plan corresponding to globalization.

http://www.mext.go.jp/en/news/topics/detail/_icsFiles/afieldfile/2014/01/23/1343591_1.pdf

Obara, Y., Toyoda, N., Takahashi, M., & Rogers, S. (2021). *Let's have fun teaching English: From theory to practice* (3rd ed.). Nan'Un-do.

Ogawa, T., Higashi, H., & Yoshida, K. (2021). *小学校英語始める教科書 Total guide for elementary English education*. MPI

Wenger-Trayner, E., & Wenger-Trayner, B. 2015. *Introduction to communities of practice* [online].

<http://wenger-trayner.com/introduction-to-communities-of-practice>

Yamaguchi, T., Osada, E. Hisamura, K., & Benthien, G. (2019). Japanese portfolio for elementary English educators: Specifying self-assessment descriptors for student teachers. *Language Teacher Education 言語教師教育. JACETSIG-ELE Journal JACET 教育問題研究会 会誌* 6 (2), pp.37-61.

<http://www.waseda.jp/assoc-jacetedu/VOL6NO2.pdf>

講義と外国語支援活動での『J-POSTL エレメンタリー』の使用法

山口 高領（秀明大学）

要旨

本稿は、『J-POSTL エレメンタリー』を教員志望の3年次学生にどのように使わせたかを報告する。使った場面は、1年間の授業期間中に使った場面と、授業ではない外国語支援活動中に使った場面があった。前者では、教員志望であるが必ずしも小学校教員を目指していない学生も参加した。後者では小学校教師希望であるが必ずしも中等教育での英語科指導法を学んでいない学生も参加した。このような学生に対して、指導者がどのように『J-POSTL エレメンタリー』を使わせることができそうか、特に自己評価記述文の理解を促す課題について述べる。

キーワード

講義 外国語支援活動 自己評価記述文 自己評価のための支援 用語集

1. 実践の背景と概要

1.1 実践の背景

1.1.1 筆者の所属する大学や学部

筆者の所属大学は秀明大学であり、学校教師学部・看護学部・総合経営学部・英語情報学部・観光ビジネス学部から成る。学校教師学部の学生は1学年200名程度である。

筆者は学校教師学部にも所属しており、中等教育教員養成課程を有している。その内訳は、専修とコースに分かれ、国語専修・社会専修・数学専修・理科専修・保健体育専修・英語専修・初等教育コースである。これらの専修かコースのいずれかで学生は学び、所属する専修か希望する教科の中学校教諭1種免許状や高等学校教諭1種免許状を取得する。初等教育コースでは入学時から小学校教諭1種免許状を取得するよう単位を履修して初等と中等教育での免許の両方を取得していくが、各専修でも小学校教諭1種免許状を取得することが可能であり、専修に所属する学生が小学校教諭免許状を取得することは少なくない。

また、学校教師学部のアドミッション・ポリシーに含まれる教師像として、教職に対する強い情熱と意欲を持つ人、教育の専門家を目指して実践的指導力を身につける努力をする人、志望する専修・コースの基礎学力（知識・技能）を備えている人、多

様な価値観を受容し、他者と協働して物事に取り組むことのできる人、自ら志向・判断し、表現・行動しようと努力できる人、豊かな人間性、社会人としての常識と教養、礼儀などを大切にする人、以上6点を求めている。このように、本学部では、入学時から「教職に対する強い情熱と意欲を持つ」ことを求めている。

入学時から卒業時まで全寮制を原則としている点も、教職課程を有する他の大学や学部と異なる特徴である。寮はキャンパス内と近隣にある。また、1・2年次の大学で授業がある期間には、大学近隣の小・中・高校にて、授業の見学や学習指導の補助を週に1回行っている。さらに、1年次に全員が英国留学に参加している。その期間は、中高の英語免許資格の取得を希望する学生は5ヶ月、それ以外の科目の免許取得希望者は4週間である。教育実習は4年次に行っている。2021年3月に卒業した学校教師学部の学部生の教員正規採用率が61.6%であり、教員就職率が86.7%である。

1.1.2 筆者の教育歴・研究歴や『J-POSTL』などへの関わり

筆者は、大学での教育歴は約20年あるが、教職課程での授業の担当は3年目である。初等免許の外国語指導法科目と中等免許の外国語指導法科目を担当している。『J-POSTL エレメンタリー』の使用は3年目であり、『J-POSTL』の使用は2年目である。『J-POSTL』や『エレメンタリー』の開発や調査には2013年から関わっている。

1.1.3 J-POSTL エレメンタリー使用の動機

外国語（英語）コアカリキュラムは、教職課程履修生の学習形態に対して、教員の講義にとどまることなく、授業観察・授業体験・模擬授業の形態を必ず盛り込むよう求めている（文科省、2019）。こうした形態を盛り込む意図は、講義を聴くだけに留まらない体験化を達成することと考える。では、どのような指導をしたら体験したことになるか。筆者は『J-POSTL エレメンタリー』の編集方針の1つである「資質・能力と授業実践に対する自己評価力の向上」であると考えており、そのためには具体的にどのように指導を行えばよいのかを、以下に報告する実践を通して述べる。

1.2 実践の概要

1.2.1 実践1：1年間の講義での実践

秀明大学では90分15回の講義が開設されている。筆者が実践した講座名は、前期では「英語」、後期では「初等英語科教育法」であり、外国語（英語）コアカリキュラムでは、各々が「外国語に関する専門的事項」と「外国語の指導法」に相当する。前期でも後期でも、筆者は3クラスを担当した。同様にGaby Benthien氏ともう1名が3クラスずつ担当した。なお、Gaby Benthien氏の実践は本書に掲載されている。

使用教科書は、前期では南雲堂が発行の*Let's have fun teaching English*であり、後期ではmpi 松香フォニックスが発行の『小学校英語 はじめる教科書 外国語科・

外国語活動指導者養成のために』である。年間を通じて必要に応じて使用した小学校の教材は、東京書籍発行の高学年用教科書 2 冊と *Picture Dictionary* である。

1 つのクラス (クラス 1) には保健体育専修・英語専修の 3 年生が各々 18 名と 15 名が参加した。英語専修の学生は、2 年次で筆者の担当する「英語科教育法」を受講し、『J-POSTL』の自己評価記述文を使った自己評価を経験している。残りの 2 つのクラス (クラス 2・クラス 3) には初等教育コースの学生が参加した (それぞれ 30 名と 28 名)。

クラス 1 には英語専修では中高での英語教師を志望している学生が、保健体育専修では中高校での保健体育の教師を志している学生がいた。クラス 2 と 3 では、中学や高校での何らかの教科の免許を取得予定であるが、全員が小学校教師の免許を希望していた。クラス 3 では 9 名が 2 年次で『J-POSTL』の記述文を使った自己評価を経験している。

1.2.2 実践 2：外国語支援活動での実践

外国語支援活動は、教員免許取得に必要なではない企画であり、秀明大学が独自に設定しているものである。近隣の小学校にて外国語や外国語活動の授業見学や学習支援補助の他に低学年を対象に授業を実践することもある。無料のボランティア活動であり、週に 1 回程度、大学の授業の入っていない時間帯に参加している。

2021 年度には 11 名が参加し、全員が小学校教員になることを希望していた。11 名の内訳は、クラス 1 に参加の英語専修学生が 1 名、クラス 2 に参加の小学校教員志望であるが中等の「英語科教育法」を学んでいない学生が 3 名、クラス 3 に参加の小学校教員志望であり、中等の英語教育法を学んできた学生が 7 名である。

2. 実践事例 1：1 年間の講義での実践

2.1 前期：外国語に関する専門的事項に対応する講義

説明動画は初回授業までに見ておくよう指示のみを出したが、この際に「ポートフォリオの使用目的を述べよ」等の課題を出しておくより効果的だったかもしれない。

筆者は、セクション『自分自身について』について使わなかった。外国語を教える教員を志望していない学生がいたためである。このセクションを使う場合には、講義開始時点では他の受講生と意見交換をするなどの活動を、講義終了時には自己の記述と比べて考えの深まりを確認させることが必要であると考えている。

後期も含めてほぼ毎回の授業の後には、授業を通して学んだことを Google Classroom 経由で提出することを求めた。提出後速やかに筆者は提出内容について誤りがあれば指摘し、提出内容に共感するコメントを付けた。そして学生の記載内容やコメントを全員が閲覧できるようにした。このような提出を求めた理由として、学びを言葉にすることの練習になり、15 回目期を通して学んだことなどの提出求める際

に参考にしてほしいと考えたからである。平常点にすることを伝えたためか、ほぼすべての履修生が提出できていた。コメントの際には、権威的な態度を慎み、傾聴すること（玉井，2019，p.81）を心がけた。

第9回の講義では、講義などから学んだことがある程度増えてきたと考え、次のような課題を出した。自己評価記述文（SAD）は分野「II教授法」に限定した。その意図は、前期の授業の目標が「英語を教えるための英語力養成」を考慮したためである。また、自己評価までは求めず、SADの理解を促すことに力点を置いた課題とした。

課題：ポートフォリオの自己評価記述文（p.16からp.26）の中から1つ選んで、記述文の内容を「具体的に」述べてください。これまでの授業からでもよいですし、小学校に行って観察・体験したことでも構いません。
例：J-POSTL エレメンタリー（ポートフォリオ）のp.21の記述文3「児童の意欲を高める目標を設定できる」について、ZZZZZのようにすれば、児童の意欲を高めることができそうだと学んだ。

この課題の提出物の一例を以下に示す。この提出物についても筆者はすべてにコメントを付け、提出後に他の履修生の提出物とコメントが参照できる状態にした。

J-POSTL エレメンタリー（ポートフォリオ）のPI7の記述文5「表情、ジェスチャー、あいづちなどの非言語コミュニケーションを効果的に使って、相手とやり取りができる力を育成するための活動を設定できる。」について、初めて学ぶ英単語を動きとともに学ぶ（天気に関する英語を学ぶときに雨が降っている様子を手で表現するなど）ようにすれば、楽しみながら、学ぶことができると考えた。

この課題がうまくできなかった履修生を支援するために、第10回の講義でも、同様の課題を出した。ただし前回自分が選んだものとは違うSADにするよう求めた。その際に他の履修生の提出物を見ることを推奨した。さらに、第11回の講義では、これら2回の課題を通じて学んだことは何かを提出させた。この提出の一例を次に示す。

第9回と第10回の課題を通して、自分が得意としていることはSpeakingの活動であることが分かりました。これからも、話す活動を児童が積極的に参加できるように工夫していきたいと思います。今後は、WritingやReadingの活動が設定できるように力をつけていきたいと思います。

第 15 回の最終課題として、前期の授業で学んだことと課題の 2 つを提出することを求めた。学校教師学部では「教職履修カルテ」を実施しており、そこには学生が履修した授業についてこれらの 2 点を述べるのが求められていることも学生に確認した。

2.2 後期：外国語の指導法に対応する講義

後期に参加した学生は全員が前期で講義に参加した学生であった。また、後期でも前期と同様に、各回の講義後に学んだことを提出することを求めた。

SAD を使った課題は以下のように、自己評価を行うために SAD の理解を示す課題として、第 12 回に行った。SAD にはヒントを出して理解の支援を図ったものもある。

授業の教科書や、ポートフォリオなど（学習支援・CTA（外国語支援活動）などの体験やこれまでの他の大学での授業の内容すべて）を参照しながら、各記述文がどのような資質・能力を述べているか入力してください。具体的かつわかりやすく述べていると、この「初等英語科教育法」の成績評価が上がります。また、根拠を述べながら自己評価（高くなくても構いません）する課題が次回以降に出される予定です。

自己評価をする際に経験したことがないものは、想像することで判断してください。

I 教育環境 (Context) A. 教育課程 (Curriculum)

1. 学習指導要領に記述された内容を理解できる。

1-1. どういうことか（ヒント：「学習指導要領に記述された内容」とはどのような内容か）

1-2. 自己評価（省察） 時期：202X 年 XX 月 YY 日

（5 段階自己評価の例）「4:まあまあできる」と自己評価

（自己評価の根拠の例）上記のとおり、両者それぞれの構成と要点は理解できたが、少し時間が経過すると忘れそうなので。

この要領で、次のページの表 1 で示す 18 の SAD について理解を示す課題を提出させた。18 の SAD は「教職課程履修生用」の SAD がほとんどであるが、各分野を知ってもらうために、分野「VI 自立学習」と「VII 評価」については「初任教員用」の SAD を入れた。

第 13 回では、前回の課題提出の中から優れたものを筆者が紹介した。SAD への理解が不十分であることや、人により多様な記述があることを知り、学修が深まったと多くの学生が述べていた。優れた点として紹介したものは、本課題は自分の成長のために使うため自分にとって色を付けるのはむしろ奨励されること、各分野の序文を読む

だ上で SAD を検討すると理解が深まること、SAD に述べられている「活動」は小学校の教科書を見るだけでもヒントが得られること、などであった。その後、各学生に修正の機会を与えて自己評価までを行うよう課題を出させた。ある程度の理解を踏まえた上での自己評価の分析については、今後に述べてみたい。

表 1

課題として考えさせた 18 の SAD

- I-B-1. 児童が英語を学習する動機を考慮できる。
 - I-C-3. 同僚や授業見学者からのフィードバックを受け入れ、自分の授業に反映できる。
 - I-C-5. 同僚の授業を観察し、改善のポイントを建設的にフィードバックできる。
 - II-A-1-3. 日常生活に関する身近で簡単な事柄について、自分の気持ちや意見を伝え合う力を育成するための活動を設定できる。
 - II-A-1-4. 自分に関する質問に答えたり、相手のことを尋ねたりする短いやり取りができる力を育成するための活動を設定できる。
 - II-A-2-1. 自分の好き嫌い、趣味、得意なことなど、聞き手に伝えたい内容を整理してから、基本的な語句や表現を使って紹介することができる力を育成するための活動を設定できる。
 - II-A-2-4. 強勢、リズム、イントネーションなどの違いに気づかせるような様々な活動を設定できる。
 - II-C-1. 児童の興味・関心に適した教材を選択できる。
 - II-G-1. 英語学習をとおして、自分たちの文化と異文化に関する興味・関心を呼び起こすような活動を設定できる。
 - III-3. 児童の英語力に適した表現や言語活動を教科書や教材から選択できる。
 - IV-B-2. 児童がこれまでに学習した知識を活用した活動を設定できる。
 - V-A-1. 児童の興味・関心を引きつける方法で授業を開始できる。
 - V-A-2. 個人活動、ペア活動、グループ活動、クラス全体など、状況に応じて学習の形態を柔軟に調整できる。
 - V-C-1. 児童中心の活動や児童間の交流を支援できる。
 - V-D-2. フラッシュカード、図表、絵などの準備や視聴覚教材を活用できる。
 - V-D-3. ICT などの教育機器を効果的に活用できる。
 - VI-A-2. 児童が自分の学習過程や学習成果を振り返ることができるように支援できる。
 - VII-A-1. 授業の目的に応じて、多様な評価方法（例：ポートフォリオ、自己評価、相互評価など）を選択できる。
-

第 15 回の最終課題として、後期あるいは 1 年間の外国語指導法の授業で学んだことと課題を提出することを求めた。「教職履修カルテ」との関連も学生に確認した。また、用語集掲載の用語の理解を深めるための選択式課題を出した（補遺）。

3. 実践事例 2：外国語支援活動での実践

前期の参加者 11 名は全員が 2021 年度に筆者の担当する小学校用の外国語指導法の受講者であったが、外国語支援活動用に Google Classroom 上で「教室」を作成し、週 1 回の活動後に報告を求めた。すべての参加者と筆者の書き込みが見ることのできる状態にした。毎回の報告時に少なくとも 1 つ SAD に言及しながら学んだことを述べるよう求めた。前期における参加学生の言及したすべての SAD ($n=93$) について分析した結果は山口 (in press) に詳しいが、参加者が支援活動の際に注目しやすい SAD は、分野「教授法」の「聞く」「話す」の SAD や、児童の「興味・関心」を述べている SAD であった。報告内容は、どれも支援活動に参加した体験と結びつけようという真剣さを筆者は感じ取った。前期の終わりに学んだことと課題を指摘させ、学校現場で教えることの楽しさや難しさ、発音などの英語力向上が必要だというコメントが多かった。

後期では、web 上に共有ドキュメントを用意したが、支援参加者との話し合いの上で報告しやすいものを探している最中である。鍵となるのは報告し忘れが起きないようにアラートを設定することかと筆者は考えている。また、小学校教師志望者の全員が SAD を使った報告ができるかが心配であったが杞憂で終わった。英語を専攻していない参加者は専攻している参加者と協力して支援活動に取り組んでいたようであった。

後期の報告で特に成長を感じさせる報告は、次のような臨機応変な対応への報告である。以下に引用する。自己評価は求めていなかったが、この参加者は行っていた。

J-POSTL エレメンタリー（ポートフォリオ）の p.36 の記述文 3「授業案に基づいて柔軟に授業を行い、授業の進行とともに児童の興味関心に対応できる」に関しては、できると考える。その理由として毎回授業を考えて行くのだが、その都度児童が理解していないのではないかと感じる部分が出てくる。それを感じたまま授業を行うのではなく、例えばフラッシュカードをもっとやるべきならそれを増やしたり、楽しそうに歌ったり、アンコールが出たりした時には児童の興味関心を優先して授業を行っているからである。このように何度も授業をこなすことで実態に合わせて対応ができるようになってきたと感じる。

4. まとめと今後の活用計画

筆者は、『J-POSTL エレメンタリー』を活用することで、資質・能力と授業実践に対する履修生の自己評価力の向上を試みている。自己評価力の向上のためには、自己評価記述文(SAD)の理解が欠かせない。この理解に必要なのは、教職課程の指導者がSADの解説を一つ一つに対して行うことではない(清田, 2020)。解説をして理解させるという行為は多くの講義で既に行われており、それは教職課程における学びの基礎である。この基礎をさらに発展させるためにSADの理解が求められており、その理解に必要なのは、学生の参加する講義・小学生向けの授業動画の視聴・模擬授業・外国語学習支援活動といった体験を通して、SADの表す具体的内容を述べるよう支援することである。この支援のためには以下の工夫が必要と考えている。

- (1) 教職課程指導者が履修生に特定のSADを事前に提示した上で、履修生に対し、講義や模擬授業などの体験を通して学んだことを、そのSADに関連付けて述べさせる
- (2) 教職課程指導者が特定のSADを提示せず、履修生に対して、講義や模擬授業などの体験を通して学んだことを、一定の範囲内のSADに関連付けて述べさせる
- (3) 上記いずれの場合にも、指導者が何らかのコメントを付けてフィードバックするか、履修生同士で情報共有するよう支援する
- (4) 自発的でない学生や着眼点がよく理解できていない履修生のために、履修生が関連付けて述べた文章を、指導者が特によい点に力点を置きつつ解説する

(1)は、SADが履修生に与えられているため、(2)よりも容易な活動であるが、まずはSADの内容を正確に読む力が養成できる。(2)はさまざまなSADを比較するため、分野や領域内外でのSADの関係性に対する理解が深まる。(3)は課題提出のためだけの作業にならぬよう自己の成長のためにSADを理解することが期待される。(4)は、一定数いる「自己肯定感の低い」学生を鼓舞することと、学生のよい点を指摘することにより学生間の良き学びの環境整備を期待している。

上記の4点を言い換えれば、履修生がSADと取り組む様子を指導者は見守るだけでなく、何らかのフィードバックを伴う教育的介入を行うことで、他者と意見を共有し、自分ならどう考えるのかといった姿勢が確立するよう支援し、そのためにもポートフォリオを単なる講義上の「課題」として捉えるのではなく、コース終了後にも時折参照するようなツールとして使い始める、ということである。

また、筆者は、履修生の自己評価力向上への試みを次年度の講義や外国語支援活動指導の向上に役立てている。支援活動参加者に対して、関連するSADに言及しながら学んだことを報告させるという今回の試みは、前年度において「初等英語科教育法」の受講生がある程度の深さを伴った理解をしているのだろうかという問いが出发点と

なっている。

2022 年度以降に試みたい使い方としては、氏名は付した上で今年度の受講生のポートフォリオを使った学びの例を示すことなどを予定している。事前に各学生に下級生へ提出内容を共有することへの可否を尋ねておくことが必要であるが、その手間をかけるだけで学年を超えた学びも実現するかもしれない。特に、学校教師学部は全寮制や夜間での学修を採用しており、寮内で異学年間の交流も行われている他に、夜間学修時に、教員採用試験を終えた 4 年生が自発的に 3 年生の模擬授業を見学し、コメントのやりとりを行っている。このようなやりとりの際にも、『J-POSTL エレメンタリー』が活用され、小学校外国語教育に求められる資質・能力を向上させるための共通言語が使われることを筆者は期待している。

謝辞

本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (B) 「省察ツールとしてのポートフォリオの体系化と活用ガイドの開発」(課題番号: 19H01288, 研究代表者: 神保尚武) の助成による研究成果の一部である。

参考文献

- 清田洋一 (2020) . 「教職課程における J-POSTL の基本的な活用方法と課題」 『言語教師のポートフォリオ(J-POSTL) : 教職課程における活用方法』 JACET 教育問題研究会.
- 玉井健 (2019) . 「3. 面談で行うリフレクション」 玉井健・渡辺敦子・浅岡千利世 『リフレクティブ・プラクティス入門』 (pp. 78-85) . ひつじ書房.
- 文部科学省 (2019) . 「外国語 (英語) コアカリキュラムについて」
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afiledfile/2019/04/04/1415122_3.pdf
- 山口高領 (in press) . 「外国語支援活動を通して教職課程履修生は何を学ぶか : 報告時に言及された自己評価記述文の分析」 『言語教師教育』 9(1)

補遺 用語集掲載用語の理解を深めるための用語と定義

- ・イントネーション：ことばを話すときに声の高さを上げたり下げたりする抑揚のことで、話し手の意図や感情を表します。
- ・強勢：単語、語句、文、談話の各レベルで強く発音される部分のことです。
- ・学習スタイル：個々の子どもが得意としたり、好んで用いたりする学習の方法のことです。
- ・学習ストラテジー（学習方略）：学習をより早く、より効果的にするために子どもが意図的に行う心的操作や具体的な行動のことです。
- ・形成的評価：指導過程の途中で、教師の指導法と子どもの学習活動を調整するために行う評価で、成績評定には使いません。
- ・発信語彙：伝えたい意味を適切な発音や綴りで表現できる語彙のことです。
- ・受容語彙：語形を認識し、意味が理解できるが話したり書いたりするレベルに達していない語彙のことです。
- ・スキミング：文章の大意や概略を把握するために、素早く全体に目を通す読み方です。
- ・スキヤニング：自分にとって必要のない情報は読み飛ばし、必要な情報を求めて素早く読む方法です。
- ・ステレオタイプ：特定の集団に対して、多くの人が共有している先入観や思い込みなどの固定観念のことです。
- ・プロジェクト学習：課題に対する解決や答えを求めて、一定の期間にわたり、子どもが主体的かつ創造的に取り組む学習法です。
- ・ポートフォリオ学習：学習過程で生成された多様な形態の提出物や成果物を通して、学習のプロセスや子どもが本来持っている能力を総合的に引き出そうとするものです。

注. 上記は、『J-POSTL エレメンタリー』の用語集から似たような単語に絞り、用語解説の中から例などを取り除き、作成したものである。

教育実習における J-POSTL エレメンタリーの活用事例：

J-POSTL エレメンタリーを長期使用した学生の例

米田 佐紀子（玉川大学）

要旨

本稿では、中高（英語）の一種免許課程で小二免許を取得しようとする学生を対象とした、小学校教育実習における J-POSTL エレメンタリーの活用事例について述べる。協力者は 3 名の 4 年生で、J-POSTL エレメンタリーを 3 年次後期のゼミにおいて使用し始め、4 年次後期の実習の事後の省察まで使用した。協力者は 4 年次後期に 2 週間教育実習を行った。実習先小学校での担当学年は 2, 3 年生であった。英語指導の位置づけは、モジュール、特別活動、学級活動であった。指導する言語材料・題材・教材はすべて学生に任された。事後レポートからは、J-POSTL エレメンタリーの自己評価記述文によって明確な意識をもって臨むことができたというものがあつた。一方、意識づけは一定程度できた半面、今回は、教材も題材も提示されず、教材の選択や活動の設定等授業デザインに課題があることが示された。また、小学校教育実習では英語教育専攻の学生でも英語指導の機会が与えられるとは限らない中で、実践力・実践を通して養う省察力の養成が課題として浮かび上がった。

キーワード

小学校教育実習 外国語活動 省察 実践 学びの内在化

1. 実践の背景と概要

1.1 実践の背景

本実践を行った大学は 8 学部 17 学科から成り、筆者が所属する文学部は国語教育学科と英語教育学科の 2 学科構成となっている。英語教育学科は定員 80 名であり、英語教員養成コースと ELF コミュニケーションコースの二つがある。2 年次後期から 3 年次前期までの約 9 か月間の海外留学が卒業要件に含まれており、実践的に語学力と異文化コミュニケーション力を養うカリキュラムになっている。

英語教員養成コースでは中学校教諭一種免許状(英語)および高等学校教諭一種免許状(英語) (以下、「中高免」) の取得に加え、小学校教諭二種免許状 (以下、「小二免」) を取得することができる。「小二免」希望者は春休みや夏休みの長期休暇中

に実施される集中講義を受け、小二免の課程を修めると、卒業時に3つの免許状が取得できる。小中高の3つの免許の取得により、長期的視野、英語力（CEFR B1～B2程度）と指導力を持つ教員の育成ができると考えられる。一方で、在学している4年の間、長期休暇はほぼすべて集中講義に参加しなければならず、別途費用もかかることから、卒業時に小二免の取得する者は例年定員80名中15名程度になっている。

協力者の所属学年は新型コロナの感染拡大により、2019年8・9月から海外留学していたが、2020年の3月に急遽帰国したため、通常より3か月程度短い期間の留学になった。また、通常であれば、3年次後期から学習支援を行うが、新型コロナの感染拡大により、以前のように頻繁に現場に出ることができなかった。現場や児童の実態を知る機会が得られなかった影響は大きいと考える。

筆者は1993年から「児童英語教育」を担当し、それ以来、幼稚園や小学校での指導もしつつ、大学での小学校英語指導者の養成に携わってきた。その中で中高免許課程用の「言語教師のポートフォリオ【英語教職課程編】」（大学英語教育学会 JACET 教育問題研究会、2014）を知り、小学校にも応用できると考え、実践研究を開始した（米田、2015）。その後、『小学校英語指導者のポートフォリオ（J-POSTL エレメンタリー）』（大学英語教育学会 JACET 教育問題研究会、2021a）の開発にも携わり、現在では J-POSTL エレメンタリーの活用について実践的に研究している（米田、2016；米田、2021、他）。

1.2 実践の概要

1.2.1 教育実習指導体制：正式科目名は「教育実習（副・小学校）（文英語教育）」（以下、「教育実習」）である。「主免」に加えて取る「副免」の位置づけが表記されている。筆者の所属する大学では、教師教育リサーチセンターの教員と学生が所属するゼミ教員が教育実習生を分担し、教育実習の事前・事後の指導にあたる。2021年度は小学校教育実習を18名が履修した。教育実習期間は2021年9月～11月であった。

1.2.2 協力者の背景：教育実習に出た18名のうち、筆者のゼミに所属する4年生3名である。3名中2名は教育実習で筆者が担当し、事前・事後指導を行った。うち1名は実習校での研究授業と反省会にも参加した。残り1名とは、ゼミおよび Teaching English at Elementary Schools（教職課程外の選択科目ではあるが、コア・カリキュラムに沿った教科書『コア・カリキュラム準拠 小学校英語教育の基礎知識』（村野井、2018）を使用）の授業担当者として関わった。

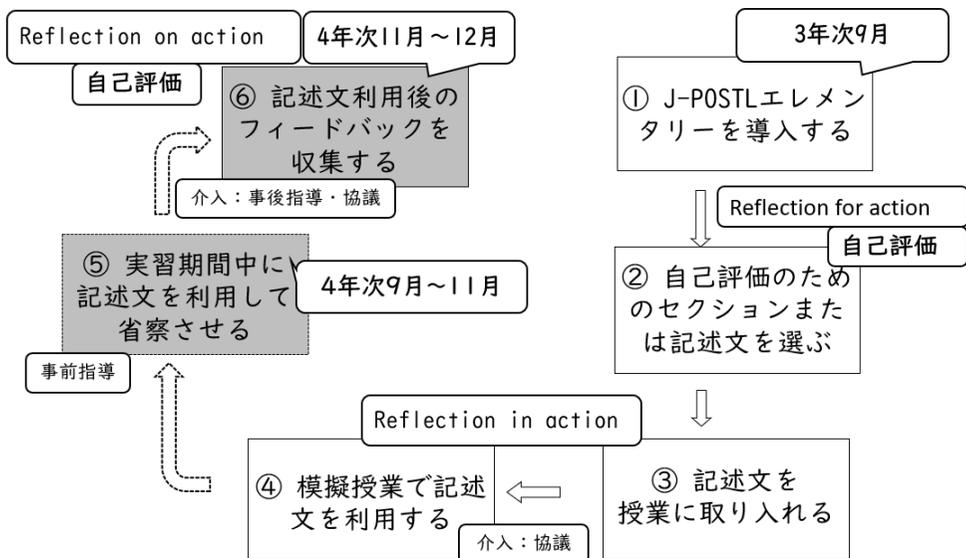
1.2.3 J-POSTL エレメンタリーの位置づけと活用モデル：教育実習における J-POSTL エレメンタリーの位置づけはなかったが、筆者のゼミは小学校英語をテーマに扱っており、3年次の後期から、4年次前期、4年次後期と毎学期のシラバスにも位置づけ、

ゼミでの実践の際などに省察を行い、期末レポートでは当該学期を振り返る一つ材料として指定している。

J-POSTL エレメンタリーを活用するにあたり、土台としたモデルは『小学校英語指導者のポートフォリオ』(J-POSTL エレメンタリー)紹介動画(大学英語教育学会 JACET 教育問題研究会, 2021b)である。図1に示したように3年次9月に導入し、ゼミ内で扱った。教育実習にかかわるJ-POSTL エレメンタリーの使用期間は4年次後期の9月～12月である。これまでは教育実習の内容にまで関わることができなかったため、今回の教育実習での実践はこの枠組みの中で初めて取り組む実践になる。

図1

J-POSTL エレメンタリー活用モデルに基づいた実践のイメージ図



(大学英語教育学会 JACET 教育問題研究会, (2021b) を改編)

1.2.4 教育実習におけるJ-POSTL エレメンタリーの使用方法：実習前に話し合いの時間を対面またはライン(テキスト・電話)で行った。実習先、実践する対象学年や位置づけ、教材に応じて、学生が注意したい自己評価記述文(以下「記述文」)を選ばせた。必要に応じて実習中にも助言を行ったが、J-POSTL エレメンタリー自体への言及はしなかった。実習後には省察させ、筆者との話し合いを持った。それらを含め、最終的にJ-POSTL エレメンタリーによる省察後、事後レポートを提出させた。なお、3名の学生からは匿名で掲載する旨、同意を得ている。

2. 実践事例

本章では、教育実習での実践は受け入れ校により異なるため、3名それぞれの実践と学びについて述べる。

2.1 小学校3年生：外国語活動におけるモジュールでの実践

2.1.1 位置づけと事前指導：学生が配属された3年生は「外国語活動」が正規の教育課程に入っているため、学生が英語指導をさせていただきたいと実習先に希望を伝えたと、融通性のあるモジュールでの実践になった。日ごろの学習内容をモジュールと関連づける必要はなく、すべて学生に一任された。文型や語彙・テーマなどの枠組みが無く、ゼロからモジュールを作り上げるのは、学生には難しかった。そこで、筆者は、児童の既習事項を確認させ、そこから材料を集めて検討し、指導案を考えるよう指導・助言した。

2.1.2 モジュールの概要：昼食後に1回15分間設定されており、3年1組から3組まで、合計3回実施した。専科教員の助言を踏まえ、「外国語活動の授業で学習した教科名の単語が理解でき、簡単なやりとりの中で用いることができる」という目標を設定し、フルーツバスケットを改編した「教科バスケット」を考え、実施した。

2.1.3 学生が選択した記述文：

- IV-B-2 児童がこれまでに学習した知識を活用した活動を設定できる。
- IV-C-4 英語を使う場面、方法、タイミングを考慮して、授業を設計できる。
- V-D-2 フラッシュカード、図表、絵などの準備や視聴覚教材を活用できる。
- V-E-2 英語を使って授業を展開するが、必要に応じて日本語を効果的に使用できる。

2.1.4 実践後の振り返り：実習中は一度出来上がった指導案を送信してきたが、実習先からの指導・助言があったため、筆者は簡単な確認だけに抑え、内容や記述文などへの言及はしなかった。実習後は教育実習担当の筆者と面談し、実習先の実践や学び、事後指導の面談を踏まえてレポートを作成し提出させた。

学生はモジュールを3回実施できたことで、回を重ねるごとに指導を改善していき、良さを感じると同時に、想定外の事態に遭遇したことから、事前には挙げていなかった(V-A-6)の「予期できない状況が生じたとき、授業案を調整して対処できる」をやりに遂げる難しさを実感したと述べている。J-POSTL エレメンタリーについては、「SAD(記述文)の視点に沿って授業を行うことでより教師側のポイント(明確な意図を持

った支援など)を意識して進めることができた」(「記述文」は筆者による)と記している。事後レポートの最後は、「実際の45分の授業ではさらに多くの事に気を付けながらJ-POSTL エレメンタリーを意識して授業を組み立て、指導力に繋げていきたい」(引用ママ)と締めくくっており、1年以上かけて何度も記述文に触れてきたからこそ、当初とは異なる記述文を思い浮かべることができ、今後への目標が持てたと筆者は考える。

2.2 小学校2年生：特別活動としての教科横断的な実践

2.2.1 位置づけと事前指導：本実践は、学生自身が専攻している小学校英語教育に関連して授業を行いたいと強く希望し、指導教員の協力があって実現したものである。しかし、英語指導ができる可能性がつかめたのは実習直前であった。2年生の教育課程に外国語活動が位置付けられていないため、調整に時間がかかったとのことであった。

筆者からは位置づけが無い中で、1時間扱いでできる英語活動を想定し、絵本の読み聞かせとそれを発展させた活動を提案した。話し合いの結果、学生は *A Beautiful Butterfly* (中本, 2011) を選択し、大型絵本を入手し準備を開始した。

2.2.2 特別活動内での指導概要：小学校における教育課程上の問題から英語指導をすることができず、特別活動の授業に組み込んだ形での実践になった。「より良い自分になるために」というねらい(題材)に合わせ、*A Beautiful Butterfly* を使用し、「蝶の色が変化していく絵本を読んで、内容や芋虫の心情を理解し、自分なりの蝶を作成するという活動を行う」という設定になった。2時間中の第1時(45分間)である。絵本の内容理解を促すためにフラッシュカードや絵を用いて、色を表す表現を確認した。その後、読み聞かせを行い、自分ならではの色に白紙の蝶々に色を塗っていくという授業の流れであった。

2.2.3 学生が選択した記述文：

II-C-2 児童が英語を聞く前に、教材のトピックについて持っている経験や関連知識を使って内容を予測するよう指導できる。

2.2.4 実践後の振り返り：研究授業として実践することになったので、教育実習担当である筆者も授業参観と授業後の反省会に出席した。授業後の反省会では、小学校教員から教科横断的な視点があったこと、担任教師が流暢な英語で指導している点が高い評価を受けた一方で、活動が蝶の色を塗ることがメインになってしまい、児童が自分の成長という視点を持てなかったのではないかという意見があった。実習中に筆者が授業を参観し、反省会でコメントできたのはこの研究会後の反省会のみであった。

学生は、実習後に事後指導の面談を筆者と行い、実習後のレポートを提出した。本レポートには、「使用したいと考えていた絵本と特別活動をうまく関連付けることができたと感じている。その結果、教科横断的な授業づくりを行うことができ、今後教壇に立つ中でも参考にすることができると思う。絵本の内容理解を促すためにフラッシュカードや絵を用いて、色を表す表現を確認したのはとても良かったと感じる。」

(引用ママ)と述べているとおり、事前に設定した記述文を意識した実践ができていた。その一方で、本実践は記述文 IV-B-8「教科横断的な内容、あるいは様々な教科の内容を学ぶことができるような指導の手立てを考案できる」が当てはまるが、記述文の記載はなかった。必要な資質・能力として、J-POSTL エレメンタリーの本文記述文を学生に内在化させることができなかつたのかもしれない。

2.3 小学校2年生：学級活動の時間を使った英語指導の実践

2.3.1 位置づけと事前指導：2.2で取り上げた学生同様、2年生の教育課程には外国語活動が位置付けられておらず、英語教育を専門とする学生にとって、当初は専門の学びを生かす機会はなかった。しかし、実習先の配慮で、学級活動の時間を使って英語指導が行えることになった。授業としての枠組みがないため、言語材料をはじめ、題材も学生に任された。本学生からの相談を受け、対象が2年生であることから、絵本の読み聞かせから活動へと発展させることを提案した。児童が数字などは知っているという情報に基づき、筆者が以前幼児・児童に使用し、人気があった *What's the time, Mr. Wolf?* (Hawkins, 1986) を提案した。後日談であるが、米田の提案した本が入手できなかったため、同じタイトルではあるが別の著者の本を入手して使用したとのことだった (*What's the time, Mr. Wolf?* (Kubler, 2004))。大型本がないため小型本だったが、児童数が15名だったことと、見えない際には見るところまで移動させることで対応したという。

2.3.2 学級活動での指導概要：授業の最初に絵本の読み聞かせを行った後、語彙（数字1～12と基本表現）を復習した。「おおかみさん、今何時」（「だるまさんが転んだ」に似たルール）を取り入れ、ALTとのデモンストレーションで理解させた後、運動場でゲームを行った。

2.3.3 学生が選択した記述文：

- Ⅲ-2 児童の年齢、興味・関心、英語力に適した教材を選択できる。
- V-E-2 英語を使って授業を展開するが、必要に応じて日本語を効果的に使用できる。

2.3.4 実践後の振り返り：当該学生は筆者の担当ではなかったため公式な面談の機会はなかったが、ゼミや教職実践演習等で話題として取り上げたり、個人的に話をした

りした。本学生は詳細に指導教諭から受けた助言や児童の反応を書き留め、事後レポートに記した。どのような指導を指導者から受け、児童はどのような反応をしたのかをつかむことができるため、以下に引用する（原文の項目ごとに「・」や読点を筆者が追加した。それ以外は原文のままである）。

指導教諭からの助言

- ・日本語での説明はなくてもいい。
- ・子供たちは絵本に興味をもっていたため、「はらぺこあおむしだったらどうなるかな」などと呼び掛けて他の英語の絵本に触れるきっかけを作ってあげられるとよかった。
- ・数字はイラストやフラッシュカード等用いてみながら練習できると良かった。
- ・英語を練習する際には、4ビートのリズムを流しながら練習するといい。
- ・校庭に出てアクティビティーを行ったのはいいが、オオカミが立つ場所に線を引いたり、「歩数を間違えたらペナルティーとして2歩進む」といったルールを決めたりできると良かった。

実際の子供たちの反応

- ・英語への印象については、英語の本を見つけると「こんなの読めるわけない。〇〇先生（ALT）しか読めないよこんなの」というように話しているのを聞いたことがあった。
- ・授業では、読み聞かせの際絵本に夢中で絵を指さして「〇〇だ！」と元気に反応していた。時間を表す表現については、2,3回程度絵を見ながら〇 o'clock という表現を聞くと「〇時か！」と理解していた。
- ・絵本はやや長かったが、何の絵が見えるか、この後どうなるのかなど一緒に考えながら読み進めていったところ、最後までよく聞いてくれていた。「ええー、もうこれで終わりなの？」という声もあった。
- ・読み聞かせ後数字、時間の言い方、時間の聞き方を練習する際、数字の英語は知っている児童が多かった。放課後に学校で（週1程度）行われている外国語教室に通っている影響だそうである。
- ・7と9、12と20を混同してしまう児童がいた。11も難しいようだった。練習は私が言ったことを何度かリピートさせていたのだが、“It’s 〇 o’clock.”の“It’s 〇 o’clock.”を/klák/ではなく/klás/と誤って発音する児童がいた。その児童には明示的に指摘はせず、その児童の方を見て/k/を強調して発音するようにした。その後何度かその児童は正しい発音で言っていた。
- ・校庭で遊ぶ前にルール説明をしたが、説明すると「あ！知ってる！『オオカミさん今何時？』だー！」とみんな知っているようだった。

・校庭に出て遊ぶ際、私が最初にオオカミ役をやると「次俺/私やりたい」とオオカミ役をやりたがる児童が多く出てきた。やらせようとするとな人でやはり難しいようだったため、私はオオカミ役の児童の横について一緒にやることにした。「先生と一緒にやってくれるなら」とオオカミをやりたがる児童もいた。歩数を間違える児童も多かったが、児童みんな楽しんで参加していた。

記述文と照合せながら省察を促したところ、J-POSTL エレメンタリーの教師の資質・能力に言及し、「絵本の読み聞かせには、『児童の学習意欲への配慮ができる』『英語の基礎的な知識を教えることができる』ことが求められる」と思うと述べている。さらに続けて以下のように述べている（引用ママ）。

読書が好きな児童が多い学級ではもちろん絵本の読み聞かせは有効であり、またそうでない学級でも興味のある内容についての絵本であれば学習意欲を掻き立てることができると考えます。また、読み聞かせを聞いて「楽しかった!」で終わることなく次にどう学習へつなげられるかが重要になると思います。

SAD については、Ⅲ-2「児童の年齢、興味・関心、英語力に適した教材を選択できる」、Ⅲ-4「教科書以外の素材から、児童のニーズに応じた教材を選択できる」の項目が特に重要になると考えます。ここを上手くできれば、児童の英語への関心を高めることも可能だと思います。

以上の記載から、この学生も実習後には当初想定していた記述文だけでなく、他の記述文も重要であることに気づいたことが示された。

2.4 教育実習における指導から

本稿で扱っている3名に共通するのは、中高とは異なり、小学校教育実習では英語教育を専門に学ぶ学生であっても、外国語・外国語活動を含め、英語指導ができるとは限らないことである。協力者3名のうち2名は自分から外国語・外国語活動を担当したいと伝え、許可されたケースであった。また、筆者が4年次秋学期に担当した「教職実践演習」で小学校の教育実習で外国語・外国語活動を担当した学生を確認したところ、英語指導を担当したのは、全18名のうち、上記3名以外に、3名が授業を担当、1名が補助でALTの通訳をしたとのことだった。それ以外の学生は参観のみか参観すらなかったという回答であった。今回のケースは英語指導に理解ある実習校に恵まれ、実践の機会を得、指導助言を受けたことは、幸いであったと言える。

記述文について見てみると3名が挙げた分野はⅡ（教授法）、Ⅲ（教授資料の入手先）、Ⅳ（授業計画）、Ⅴ（授業実践）であった。2名はⅤ-E-2「英語を使って授業を展開するが、必要に応じて日本語を効果的に使用できる。」を事前に選択した。ここから実践に直接結びつく記述文を選択したことが分かった。同時に、教育実習では、

英語を使って授業し、日本語は適宜効果的に使用する意気込みであったが、実際には理解しないのではないかという不安から、あるいは生活指導上の理由から日本語が中心になったことが示された。

3名の実践と省察は、指導者としての筆者の指導力について振り返る機会にもなった。学生はいずれも教科書を用いない形での実践の場を与えられたが、経験もなく、一人で授業を構築することが難しかった。J-POSTL エレメンタリーの記述文への理解を深めさせるだけでなく、自分で教材選びから活動まで発展させていく経験をさせる工夫の必要性が浮かび上がった。

コロナ感染拡大以前には当たり前だった、小学校現場での授業参観や学習支援、大学祭での絵本の読み聞かせ等、多くの体験を積ませる機会が奪われたことも背景にあるのかもしれない。いずれにしても、授業デザイン力を身に付けさせることが指導者側の今後の課題として浮き彫りになった。

3. まとめと今後の活用計画

本稿では小学校での教育実習における J-POSTL エレメンタリーの活用実践について述べてきた。小学校教育実習においては 10 教科のうちの一つであり、たとえ学生の専門分野であっても外国語・外国語活動をはじめとする英語指導の機会が与えられるとは限らないことを確認した。その中で実践の機会を得るためには学生の明確な希望と熱意を伝えることが必要なことも確認した。また、中高とは異なり言語材料が決まっているとは限らない小学校英語の中で、教材選択から活動へと発展させていく授業デザイン力を身に付けさせる工夫が課題であることが浮き彫りになった。

J-POSTL エレメンタリーを用いた省察の観点からすると、小学校教育実習では英語教育専攻の学生でも英語指導の機会が与えられるとは限らない中で、実践力・実践を通して養う省察力の養成が課題として浮かび上がったと考える。

今後の活用計画であるが、旧カリキュラムの 4 年次後期の Teaching English at Elementary Schools が、2022 年度よりカリキュラムが新しくなり、Teaching English to Children となって 4 年次前期に開講される。重要なのは、教職課程に位置づけられていなかった小学校英語に関する科目が明確な位置づけを持つことである。本授業で、授業デザイン力をつけるとともに、教育実習前の学びを内在化させるべく J-POSTL エレメンタリーと実践を連動させた活用をし、学生が教育実習での学びを深化・統合できるような工夫をしていきたいと考えている。

謝辞

学生3名の理解・協力を感謝する。

参考文献

- 大学英語教育学会 JACET 教育問題研究会(2014). 「言語教師のポートフォリオ【英語教職課程編】」 (2022年1月29日参照)
<http://www.waseda.jp/assoc-jacetedu/PreServiceVersionJPOSTL.pdf>
- 大学英語教育学会 JACET 教育問題研究会 (2021a). 『小学校英語指導者のポートフォリオ』 (J-POSTL エレメンタリー)
<http://www.waseda.jp/assoc-jacetedu/CompleteJPOSTLElementary.pdf> (2022年1月29日参照)
- 大学英語教育学会 JACET 教育問題研究会 (2021b). 『小学校英語指導者のポートフォリオ』 (J-POSTL エレメンタリー) 紹介動画
http://www.waseda.jp/assoc-jacetedu/JPOSTL_Elementary_Video.mp4 (2022年1月29日参照)
- 中本幹子 (2011). *A Beautiful Butterfly*. アプリコット
- 村野井仁 (2018). 『コア・カリキュラム準拠 小学校英語教育の基礎知識』 大修館
- 米田佐紀子 (2015). 「小学校教師志望学生にもたらす小学校英語教育実習の効果に関する調査研究—「言語教師のポートフォリオ」使用の試みから—」 『言語教師教育 2015』 Vol.2, No.1, 78-92.
- 米田佐紀子 (2016). 「『言語教師のポートフォリオ』を用いた小学校英語教員養成に関する実践的研究」 『言語教師教育 2016』 3(1), 79-93.
- 米田佐紀子 (2021). 「J-POSTL エレメンタリーの経年使用から見た小学校英語教員養成における学生の成長と学び」 『言語教師教育 2021』 8(1), 71-85.
- Hawkins, C. (1986). *What's the Time, Mr. Wolf?*, Picture Lions.
- Kubler, A. (2004). *What's the Time, Mr. Wolf?*, Child's Play.

教育実習前後における活用例：ゼミ生を対象とした実践

榎本 洋子（四天王寺大学）

要旨

本稿は、筆者が担当するゼミ生（大学教職課程履修生3, 4年生）に対し、教育実習前後において『小学校英語指導者のポートフォリオ』（略称：J-POSTL エレメンタリー）』（JACET 教育問題研究会, 2021）を活用した事例について報告する。J-POSTL エレメンタリーでは、教職課程履修生に対して70項目の自己評価記述文(SAD)が設定されている。しかし、本実践では教職課程履修生に70項目すべてについて活用することは難しいと判断し、履修生の意見を考慮した上で、筆者が全7分野のうちI～Vから30項目を抽出して活用した。しかし実習後に履修生自身が「教職課程で学んでおきたい、学ぶべきこと」としてあげた分野は7分野すべてにわたっており、実習までの教職課程においてしっかりと指導した上で全70項目を活用していくことが望ましいことがわかった。

キーワード

教職課程 教育実習 ポートフォリオ 自己評価記述文

1. 実践の背景と概要

1.1 実践の背景

1.1.1 勤務校・履修生について

本学は、人文社会学部・教育学部・経済学部・看護学部からなる学生数3800名程度（令和3年5月現在）の中規模私立大学である。建学の精神（「和の精神」）を持ち、実社会で活躍できる人間形成を目指し、

- ・自己分析・自己研鑽の力
- ・豊かな人間性～慈愛の心・利他の精神
- ・社会（組織）で活躍できる力～専門性を基礎として

の3点をディプロマ・ポリシーとして掲げている。

教育学部教育学科では、建学の精神に基づいて、豊かな人間性と教育に関する専門的知識および実践力、指導力を持ち、「いい先生」とは何かを問い、生涯にわたり学び続け、社会や学校・保育施設等で活躍できる優れた教員・保育者になることを目的として、

小学校教育コース・英語教育・小学校（中高英語教育）コース・幼児教育コース・保健教育コースの4コースを有する。筆者が所属する英語教育・小学校（中高英語教育）コースでは、中高英語教諭1種免許状および小学校教諭1種免許状を取得することが可能となっている。また小学校コースは小学校教員免許に加え、2年次から数学プログラム・理科プログラム・英語プログラムを選択し、各科の中学校教員免許を取得できる。幼児教育コースでは、幼稚園教諭・保育士免許の取得、保健教育コースでは、特別支援学校教諭免許の取得が可能となっている。

1.1.2 実践者について

実践者（著者）は、自宅児童英語教室を25年以上に渡って主宰する傍ら、小学校外国語活動に外部支援者として関わってきた。またNPO法人小学校英語指導者認定協議会（通称：J-SHINE）育成トレーナー資格を取得し、近隣の教育委員会の依頼を受けて、教員研修講師を務めたり、『英語ノート』試用期間には市内公立小学校で1年間の支援・指導を行ったりした。その後、O教育大学附属小学校において、3年間ALTとして外国語活動の指導に携わった。こうした経験を活かし、2015年度からはO教育大学の小学校教員養成課程で、主に文部科学省のコア・カリキュラムに則った「初等英語科教育法」および「小学校専門英語」を担当した後、2020年度からは現在の勤務校に着任し、小学校および中学校教員養成課程の英語教育関連科目を主に担当している。専門は、小学校英語教育また小学校でのCLIL実践、読み書き指導である。

今後児童・生徒に求められる「21世紀スキル」の獲得の土台となる力を育成するためには、初等教育において、文部科学省が掲げる「三つの柱」すなわち知識・技能、児童の思考力・判断力・表現力の育成、さらに人間性等の涵養を実現することが大切であり、小学校が「全人教育」の場であることを常に意識し、教師自身が最高の教育環境であり、教師が常に成長をしていくことを自らの信条としている。そのために教員は生涯にわたり継続的に「省察」をしていくことが重要であると強く感じている。J-POSTL エレメンタリーは、多くの現場の教員の知見と経験から作成されており、小学校教員を目指す教職課程履修生にとって有効であり、活用すべきと考えている。

1.2 実践の概要

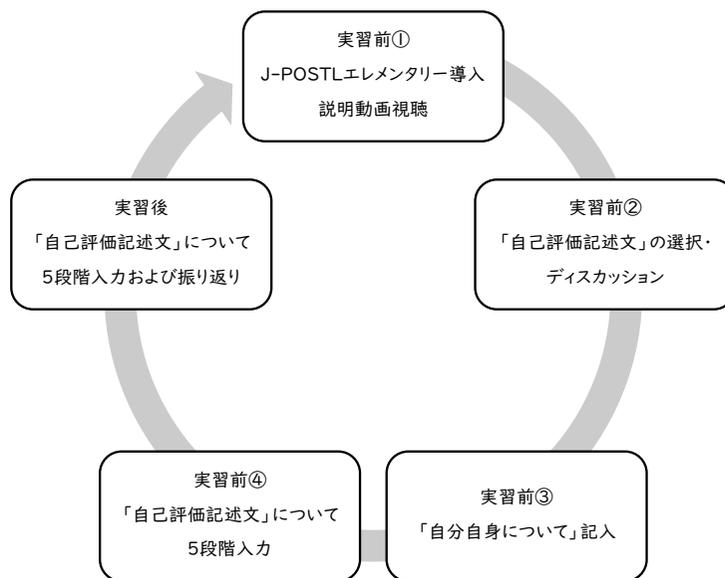
本稿は、『言語教師のポートフォリオ（J-POSTL）教職課程における活用方法』（清田他編、2020）を参考にして、主に2021年度に筆者が担当する教育専門演習（ゼミナール）履修生（20名：4年生12名、3年生8名）を対象に、教育実習の前後においてJ-POSTL エレメンタリーを活用した実践について報告する。

2020年度以前から、筆者が担当する「中等英語科教育法」や「初等英語科教育法」の履修生に対し、試用版や暫定版を活用していたが、教育実習前の学生にとっては、自己評価文（SAD）は概念的には理解できるものの、実感が持てない様子が見られていた。

また「教育法」の授業は、半期単位の授業設定であることが多く、継続して筆者が担当しておらず、履修生の長期的な変容を見ることが難しいと感じていた。そこで、本稿では 2021 年度に筆者が担当した「教育専門演習Ⅰ・Ⅱ」（3 年生ゼミナール）、「教育専門研究Ⅰ・Ⅱ」（4 年生ゼミナール）履修生に対し、教育実習の事前・事後にわたる変容を調査することとした。実践の概要を図 1 に示す。

図 1

教育実習事前事後における J-POSTL エレメンタリーの活用サイクル
(2021 年 4 月～12 月)



「英語教育・小学校（中高英語教育）コース」の学生は、基本的に中学校英語科免許を取得すると同時に、小学校免許の取得を目指すものも多い。特に筆者のゼミには小学校教員を志望する者が多く所属している。学生は、通常は 3 年次の前期に中学校の英語科での教育実習を行った上、後期に小学校での教育実習に参加するが、2020 年・2021 年度については新型コロナウイルス（COVID-19）の蔓延により、変則的な実習期間となった。

2021 年度は、4 年生 12 名中 7 名が小学校の実習に参加（うち 3 名は一般企業へ進路変更し、2 名は中学校免許のみの取得のため、小学校での実習には参加していない）し、3 年生 8 名中 7 名が小学校・中学校両方の実習を終えた（1 名は小学校のみ修了）。

本実践では、まず教育実習前に J-POSTL/J-POSTL エレメンタリーに記入することで「実習で身に付けたい資質・能力」について学生が各自の具体的な目標を定め、実習後

に再度同じ項目について記入し、自分自身の教師としての資質・能力の伸長を知り、今後の改善に役立てることを目的として、ゼミ生全員に対し、2021年度の実習期間の前後（4月末と12月末）にJ-POSTL エレメンタリーの自己評価記述文（SAD）履修生用（70項目から30項目を抽出）を活用した省察を行った。対面でJ-POSTL についての紹介・指導を行ったあと、COVID-19により授業形態がオンラインでの実施となったため、実際には履修生はウェブ上のPDFファイルを参照し、Google Forms を使用して記入、対面授業が可能となってから、紙冊子を配布して転記してもらう形で実施した。

2. 2021年度教育実習前後におけるJ-POSTL エレメンタリーの活用例

2.1 教育実習前（2021年4月）

3年生は2021年度に小学校と中学校の実習に参加する予定であった。一方4年生の一部は2020年度にCOVID-19の影響で実施できなかった分の小/中学校の実習に参加することになっていた。そこでまず、前期の第1回目のゼミにおいて、J-POSTL エレメンタリー紹介（説明）動画を視聴し、省察の意義・重要性を確認した。第3回目には、全員に「自分自身について」の記入を提出課題とした。さらに授業内でJ-POSTL エレメンタリーの履修生用SADの70項目について目を通した。その後3年生には「これからの実習で特に取り組みたい項目」、実習が残っている4年生には「実習で取り組みたい項目」を、実習を終了した4年生には「卒業までに強化したい項目」をそれぞれ5つピックアップしてもらい、グループディスカッションを行った。これにより、履修生は「求められる小学校英語指導者の資質・能力」について、より具体的に理解し、自分自身が大切にしたいこと、またクラスメイトが大切だと考えていることを明らかにすることができたと考える。（4年生は、実習前の3年次に試用版の「自分自身について」「小学校英語指導者の資質・能力について」記入経験あり。）

この時履修生がピックアップした項目の中から多いものを参考にして、筆者が教育実習で特に身に付けてもらいたいと考える資質・能力を考慮して、自己評価記述文（SAD）履修生用70項目について、I～Vの分野から30項目を抽出し、実際に活用することとした。具体的には、分野I（教育環境）からは、学習指導要領の理解に関する項目や実習に際し指導教諭や他の実習生・児童からのフィードバックを真摯に受け止め授業改善に活かすことを促す項目を、分野II（教授法）からは、音声を中心に、児童の興味・関心に応じた内容の設定に関する項目を、分野III（教授資料の入手先）では、幅広い教材・教具の選定についての項目、さらに分野IV（授業計画）・分野V（授業実践）では、4技能のバランスや授業形態の工夫、英語の使用や支援を要する児童への配慮等についての項目を中心に抽出した（補遺1）。

2.2 教育実習後（2021年12月）

前述したように、2021年度の教育実習はCOVID-19の感染拡大状況により、2度3度と実施時期が変更された。そのため全員の实習終了時期は、当初の予定から1か月遅れの11月下旬まで延長となった。そのため自己評価記述文の事後の記入は、実習後全員が出席した後期第11回目のゼミ内で、事前と同じ項目についてGoogle Formsを活用して入力を行った。ただしこの時には、「これまでの経験を通して、自分が「教職課程で学んでおきたい・学ぶべき」と考えることにチェックを入れてください。」という設問を新たに作成・追加し、J-POSTL エレメンタリーの自己評価文の7つの分野（Ⅰ.教育環境について Ⅱ.教授法について Ⅲ.教授資料の入手先 Ⅳ.授業計画について Ⅴ.授業実践について Ⅵ.自立学習について Ⅶ.評価について）、さらに「その他」を加えた8つからチェック（複数回答可）と、選択した理由について自由に記述してもらった。実習の前後においてJ-POSTL エレメンタリーを活用して省察することについて、「J-POSTL を通じて自分自身を振り返ることができました。」と自発的にコメントしている履修生もあり、確実に省察の重要性を実感していることが分かった。

しかし今回の実践では、教育実習中のJ-POSTL エレメンタリーを活用できていなかった。実習先の指導教諭と、実習中に「重点的に取り組む授業力」について共通理解を図ることができれば、さらに実りの多い実習とできるのではないかと考える。

3.まとめと今後の活用計画

事前事後の自己評価記述文への入力結果を見ると、各項目における数値に事前には“1”と記されていた項目が、事後にはすべて“2以上”になっていた。しかし個人別に見てみる（表1）と、多くの履修生の平均値は上がっていたものの、20名中5名は下がっていた。

表1

記述文30項目に対する学生の自己評価（平均値）の変化

学生	第1回	第2回	学生	第1回	第2回
A	2.3	3.9	K	2.6	3.8
B	4.2	<u>3.3</u>	L	3.5	3.5
C	4.4	<u>4.2</u>	M	3.1	3.7
D	3.2	3.9	N	3.9	3.9
E	4.3	<u>3.6</u>	O	3.7	4.0
F	2.4	3.3	P	3.3	4.8

G	3.6	<u>3.1</u>	Q	3.5	3.8
H	4.0	4.4	R	3.6	3.9
I	2.1	3.5	S	3.9	<u>3.7</u>
J	4.1	4.6	T	3.7	3.8

これは、履修生が実習を経ることで、より自己評価記述文の内容を理解し、自己分析をより厳格に行うことができるようになった証左といえると考ええる。

また事後の記入の際に追加した設問：「教職課程で学んでおきたい・学ぶべき」と考えることの結果は図2の通りである。

図2

「教職課程で学んでおきたい・学ぶべき」と考えること

これまでの経験を通して、ご自分が「教職課程で学んでおきたい・学ぶべき」と考えることにチェックを入れてください。（複数回答可）

20件の回答

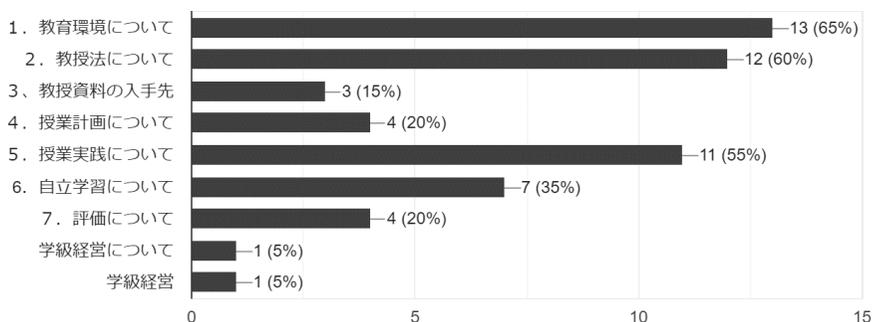


図2を見ると、I. 教育環境、II. 教授法、IV. 授業実践の各分野については、高い数値を示していた。これは筆者の予想通りであったが、一方、筆者が教職課程履修生には難しいのではないかと考え、30項目から省いた2分野（VI. 自立学習、VII. 評価）についても、履修生は「学んでおきたい・学ぶべき」と考えていることが分かった。従って、今後J-POSTL エレメンタリーを活用する際には、「項目が多すぎる」あるいは「難しいだろう」と勝手に判断して省いたりせず、70項目すべてについて活用すべきであり、そのために「教育法」や「実践演習」等の授業でもそうした内容について十分に扱う必要があると考える。

さらに、J-POSTL エレメンタリーの分野にはない「学級経営」について、履修生が「学んでおきたい・学ぶべき」とあげていることは、特筆に値するのではないだろうか。「学級経営」をあげた履修生は、「より良い先生になるために自分たちには何が必要か授業

中、子ども主体の授業にするためにはどんな授業が実践できるのか学びたい。また、学級経営をうまくするために教師がどのような問いかけや接し方をするのか学級内のルールなど学びたい。」「授業をするにあたることと、生徒たちとかかわる中で学級経営では何を大事にすれば子どもたちがついてくるのか。というところを子どもの心理などを基に大切なポイントとするべきかを学びたいから。」(原文まま)と、その理由をあげている。

小学校の外国語活動においては、今後も担任が主導で指導していくことが多い状況がしばらく続くと考えられる。よって、これまで「英語科教育法」ではあまり詳しく扱っていない内容であるかもしれないが、今後は例えば学習者の認知特性や英語教育における特別支援に関する配慮等についても、「初等英語科教育法」や「実践演習」の授業の中にさらに取り入れていくべきと考える。

また、「自然な英会話を学びたい。オールイングリッシュが求められているので、実用的な英語を学びたい。」や、「子どもたちが理解できるような言葉で伝える力、たくさんの語彙力。コミュニケーションを取る中で、相手は大人ではなく子どもでいかにわかりやすい言葉で伝えるかが日々重要になってくると思うから。」といった「英語力」に関する記述や、「学校現場では、タブレット端末を使った授業や家庭学習が増えていくと考えられるので、ロイロノートなどを使った授業方法を大学では身につけたい」という ICT 活用技術に関する記述も見られた。

本学では、教職課程履修生は2年次から「スクールサポーター」や「インターンシップ」という名目で、実習校への配属実習（主に観察実習や学習支援）が課されている。そのためか、「教員にとって重要なことは時間や子どもの状態、教室の環境に合わせて臨機応変に授業の構成を変えたり、用意していたものを無視してでも違うことをする力だと思ったから」「臨機応変な対応力を付けたい」と、現職教員向けに設定されるような、より高い授業力を志向する記述もあった。

COVID-19 の影響により、実習終了が遅れ（卒業研究の完成や海外オンライン交流プログラムの実施などのため）、今年度は実習後にディスカッションの時間を十分に持てなかったことが残念であった。また COVID-19 により、大きく教育現場が変化し、教員に求められる力も変容しつつある。今後は実践計画を見直し、J-POSTL エレメンタリーを継続的に活用するとともに、より多くディスカッションの機会を持ち、履修生の省察を深めるとともに、教職課程の授業内容の見直し・改善に資するよう努めたい。

悩みながら、試行錯誤しながらの活用実践ではあったが、実際に使用してみることで、多くの気づきと学びを得ることができた。活用を迷っておられる先生方にも是非 J-POSTL エレメンタリーの活用・実践をお勧めしたい。

参考文献

- 清田洋一, 浅岡千利世, 高木亜希子 編 (2020). 『言語教師のポートフォリオ(J-POSTL) 教職課程における活用方法』 JACET 教育問題研究会
http://www.waseda.jp/assoc-jacetedu/J-POSTL_KyoshokuKatsuyo.pdf
- 文部科学省 (2017). 『小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 外国語活動・外国語編』
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/fieldfile/2019/03/18/1387017_011.pdf

補遺

補遺Ⅰ：抽出した自己評価記述文 (SAD) 30 項目

分野	記述文番号	自己評価記述文
I. 教育環境	A-1	学習指導要領に記述された内容を理解できる。
	B-1	英語を学習することの意義を理解できる。
	B-2	学習指導要領と児童のニーズに基づいて到達目標を考慮できる。
	B-5	児童の達成感を考慮できる。
	C-1	計画・実行・反省の手順で, 児童や授業に関する課題を認識できる。
	C-2	児童からのフィードバックや学習の成果に基づいて, 自分の授業を批判的に評価し, 状況に合わせて変えることができる。
	C-3	同僚や授業見学者からのフィードバックを受け入れ, 自分の授業に反映できる。
	C-4	授業や学習に関連した情報を収集できる。
	C-5	同僚 ^注 の授業を観察し, 改善のポイントを建設的にフィードバックできる。
II. 教授法	A-1-3	日常生活に関する身近で簡単な事柄について, 自分の気もちや意見を伝え合う力を育成するための活動を設定できる。
	A-1-4	自分に関する質問に答えたり, 相手のことを尋ねたりする短いやり取りができる力を育成するための活動を設定できる。
	A-2-4	強勢, リズム, イントネーションなどの違いに気付かせるような様々な活動を設定できる。
	A-2-5	少ない語彙や非言語コミュニケーションを用いて積極的に話す力を育成するための活動を設定できる。

	B-2	児童が持っている書く能力を伸ばすために、慣れ親しんだ表現を、語順を意識しながら書き写すことができるような活動を設定できる。
	C-1	児童の興味・関心に適した教材を選択できる。
	C-2	児童が教材のポイントをしぼって聞くことができるような活動を計画できる。
	D-3	児童のニーズ、興味・関心、到達度に適した教材を選択できる。
	E-1	文法は、コミュニケーションを支えるものであるとの認識を持ち、使用場면을提示して、言語活動と関連づけて、児童に気付かせる指導ができる。
	F-1	文脈の中で慣れ親しんだ語彙を使用できるような言語活動を設定できる。
	G-1	英語学習をとおして、自分たちの文化と異文化に関する興味・関心を呼び起こすような活動を設定できる。
Ⅲ. 教授資料の入手先	1	教科書付属の教師用指導者や補助教材にあるアイディア、授業案、教材を利用できる。
	2	児童の年齢、興味・関心、英語力に適した教材を選択できる。
Ⅳ. 授業計画	A-1	児童のニーズ、興味・関心、を考慮し、学習指導要領の内容に沿った学習目標を設定できる。
	A-3	児童の意欲を高める目標を設定できる。
	B-5	「聞くこと」「話すこと（やり取り）」「話すこと（発表）」「よむこと」「書くこと」の5つの領域が総合的に取り込まれた指導計画を立案できる。
	C-1	学習目標に沿った授業形式（一斉、個別、ペア、グループなど）を選び、授業を設計できる。
Ⅴ. 授業実践	C-3	授業中、児童の注意をそらすことなく授業に集中させることができる。
	D-1	個人学習、ペア活動、グループ活動、クラス全体などの活動形態を工夫できる。
	E-2	英語を使って授業を展開するが、必要に応じて日本語を効果的に使用できる。
	E-4	教室で使用されている英語の理解が困難な児童に対して適切な方法で支援できる。

*注：Google Forms では、「同僚」は「同僚（指導教員）」として示した。

J-POSTL エレメンタリーを用いたリフレクションと自己調整力の育成

加藤 拓由（岐阜聖徳学園大学）

要旨

教員養成課程の英語専修ゼミの学生が、J-POSTL エレメンタリーを使用しながら学ぶことで、言語教師としての成長をどの程度メタ認知することができるのだろうか。本実践は、2年間にわたり J-POSTL エレメンタリーを使って、自らの学びをリフレクションする学生たちの様子を観察した。J-POSTL エレメンタリーによって、学生が省察能力を向上させることの可能性と、自己調整しながら言語教師としての belief を形成していく経過を報告する。

キーワード

ゼミ学生 belief リフレクション 経年比較 自己調整力

1. 実践の背景と概要

2020 年、日本の英語教育改革の転換点とも言える、小学校外国語の教科化が開始された。折しも、世界的な感染症拡大の影響で、小学校の休校措置の実施や、マスクを付けソーシャル・ディスタンスを取って会話を行わなければならないという、外国語教育にとっては逆風のスタートとなった。しかし、現場教師の学びを止めない努力や、GIGA スクール構想の前倒しによる、一人一台タブレット端末の積極的な導入により、小学校外国語の実践は途切れることなく続けられた。

一方、肝心の教員養成に関しては、小学校外国語の指導者養成コア・カリキュラムに基づき、全国の教員養成系課程で学生の指導が進められている。しかし、澁井(2019)によれば、小学校教員養成課程の学生を対象にしたコア・カリキュラムに基づいた授業内容だけでは、外国語の指導法などを十分に指導することが難しいため、指導内容の精査が必要であると分析されている。

そこで、本実践では、J-POSTL エレメンタリーを効果的に活用することで、学生が自らの学びを振り返り、言語教師として必要な資質・能力を向上させていく様子を、長期的な視野で捉えることを目的に実践を行った。

1.1 実践の背景

岐阜聖徳学園大学は、教育学部・外国語学部・経済情報学部・看護学部と、短期大学部・大学院を有している。その中でも教育学部には10の専修があり1,472名(2021年度)の学生が在籍している。

教育学部では、主に小中学校教員の免許を取得するものが多いが、他にも、高等学校の教員や幼稚園教諭免許、特別支援学校教諭免許、保育士証、学校図書館司書、学芸員などの免許や資格を取得することができる。

学部では、教師に求められる資質・能力を早期から磨くことを重視し、1年生から各専修の教科にかかる専門科目を開講している。また、1年生の「学校ふれあい体験」、2年生の「教育実践観察」、3年生の小中双方での「教育実習」、3・4年生の「学校インターンシップ」など、学校現場に出て学ぶことが重視され、即戦力として活躍できる教員の育成を目指している。

小学校外国語科関連のカリキュラムとしては「小学校教員研修 外国語(英語) コア・カリキュラム」に基づき、1年生で初等英語(外国語に関する専門事項)が「選択必修」科目、また、2年生では初等科教育法(外国語の指導法)が「必修」科目となっており、小学校免許の取得を希望するすべての学生が、外国語科・外国語活動の指導の基礎を学べるようになっている。

本事例実践者は、31年間、公立の小中学校で教員として勤務した。研究の中心は「小学校の学級担任による外国語科の指導法」である。長年の小中学校教員としての経験から、小学校外国語科では英語スキルの習得のみに偏るのではなく、児童の全人的な発達を目指し、小学校教育全体を豊かにする外国語の指導を考えるべきであると考えている。大学の教員として学生指導をするのは、3年目である。

J-POSTL エレメンタリーの実践には、試用版の検討段階から参加しており、本年度で3年目となる。毎年、小学校英語のゼミに参加する受講者を対象に、J-POSTL エレメンタリーを使用し継続的な実践を行っており、受講者の経年的な学びの成長や、言語教師としての belief の変化を把握したり、指導者側の指導改善に活用したりできるのではないかと考えている。

1.2 実践の概要

以下は、本実践を行った授業の実施状況や、J-POSTL エレメンタリーを活用する上での基本的な枠組みについて概説する。

本実践に参加したのは、2021年度に小学校外国語研究のゼミ生として学んでいる、3年生7名、4年生8名の合計15名の受講者である。これらの学生は、全員、英語教育専修の学生であり、小学校外国語の研究に意欲的に取り組んでいる。そして、卒業後は外国語だけでなく他教科も指導できる、小学校の学級担任として勤務することを希望している。

学生の英語力に関しては、簡単な Classroom English や Small Talk などを行う程

度の Speaking 力はあるが、ALT との打ち合わせなど少し込み入った内容になると、英語を話すことに不安を持っている受講者が多い。

J-POSTL エレメンタリーの活用方法について概説する。まず、4月の初回の授業で冊子を配布して、本実践の目的や方法について概説を行う。J-POSTL エレメンタリーの内容解説に関しては、JACET 教育問題研究会が作成したビデオを視聴し、使用目的や記録の方法など、概要を共通理解させた。

次に「自分自身について」(pp. 7-8)を記入し、過去の英語学習経験や、小学校英語指導者としての不安や抱負を、受講者同士で交流させた。仲間と記述内容を共有することで、英語指導者としての belief について受講者自身が気づいたり、教育実習に向かう前の指導不安を軽減したりできる効果がある。

「自己評価記述文」に関しては、初回の授業でオリエンテーションを受けた後、各家庭で第1回目のチェックを実施させた。記述文には、経験値による目安のスケール（教職課程履修生用、初任教員用、育成教員用、中堅教員用、熟練教員用）が付けられているが、初回は、J-POSTL エレメンタリーの全体像を把握し、学生自身に、その地点でどんなことができるのかを把握させるため、すべての項目にチェックをつけさせた。

後述するが、3年生は10月と11月、4年生は10月と12月の各2回、自己評価記述文に即してリフレクションを行った。なお、この実践に参加した4年生は、3年生の時にJ-POSTL エレメンタリーの「教職課程試用版」を活用し、今回と同様の時期に実践と振り返りを行っている。

「用語解説」(pp. 55-63)に関しては、授業内では扱わず、受講者は各自、学習を進める上で、わからない用語に出会ったときに reference として自由に活用させた。また「英語学習・授業実践・研修などの記録 (pp. 64-68)」についても、模擬授業や自主研修会への参加、外部検定の受検履歴などを、随時、記入するようにした。

受講者は小学校外国語研究に関心を持っており、小学校教員になるために、仲間と協力し教員採用試験対策に取り組んだり、地元の小学校などで学習ボランティアなどに積極的に参加したりするなど、教職への憧れは強い。

本実践では、これらの受講者が、教員養成課程の学習や、現場での教育実習、自主研修会への参加を通して、小学校外国語研究に対するモチベーションや、言語教師としての資質・能力をどのように成長させているのかを、長期間にわたり実践観察することを目的としている。

また、受講者自身も、一年間の節目節目で言語教師としての成長を振り返り、仲間のリフレクションから教員に必要な資質・能力について学び合うことで、教員としての力量向上につながるものと考えている。

今年度は、シラバス上でJ-POSTL エレメンタリーの具体的な位置づけはされていないが、来年度からシラバスの中にJ-POSTL エレメンタリーを用いた振り返りの時間を

設定し、カリキュラムに使用場면을明記していく予定である。

授業内の使用場面は第2章の実践事例で述べるが、受講者にはJ-POSTL エレメンタリーを常時、持たせてあるので、学会や研修の受講記録や検定試験の結果なども随時記入するようにさせている。また、年度末には再度、全記述文のチェックを行わせ、そこで得られた結果を参考に、次年度の指導改善や学習支援に生かして行く。

2. 実践事例

2.1 オリエンテーションでの使用例

【利用時期】

3年・4年生ともに、4月最初の授業オリエンテーションで、受講者一人一人にJ-POSTL エレメンタリーを配布し、それまでに大学の授業で学んだことや、実習先、塾や学習ボランティアなどでの指導経験をもとに、4月当初での学生の言語教師としての思いや考え(belief)を確認させている。

【指導事例】

まず、J-POSTL エレメンタリーの説明動画を全員で視聴し、その開発の背景と理念や、構成と使い方について受講者と共通理解を深める。説明動画は15分という短時間だが、非常にわかりやすく編集されているため、J-POSTL エレメンタリーの全体像を把握するのに役立つと、受講者にも好評である。

次に7ページからの「自分自身について」を記入させる。過去の英語学習経験や、小学校英語指導者としての不安や抱負について、できるだけ正直に、思った通りに記述するように伝える。以下、表1は、「小学校英語指導者としての不安や抱負」の記述について、3年生の学生と、4年生の受講者の記述を比較したものである。学年により不安に思う内容や抱負の具体性に差が見られる。

表1

小学校英語指導者としての不安△や抱負○

学年	「小学校英語指導者としての不安△や抱負○」
3年生	△ユーモアのない、パツとしない授業にならないか本当に心配。 △子どもがどこまでの範囲のことを知っているかわからないこと。 △(教師が)言いたいことが英語でうまく表現できない。 △いつもワンパターンのつまらない授業にならないか。 △子どもたちと授業でどう関わっていくか。(クラスマネジメント) △楽しいを重視しすぎて、教えるべきことができなくなる。

	<ul style="list-style-type: none"> ○クラス全員が前のめりに興味を持てるような授業をしたい。 ○英語が苦手な子どもでも、楽しいと思ってもらえるような授業をしたい。 ○もっと勉強をして、知識を付ける。
4年生	<ul style="list-style-type: none"> △児童の純粋な疑問に答えられるかどうか。 △英語に対する抵抗から、学習意欲の低下を招くこと。 △多忙な生活の中で、授業準備や教材作りができるのか。 △自分自身の英語力が不安。 △ALTとの連携がうまくできるのか。 △英語を習っている子と、習っていない子の差に、どう対応するか。 ○誰にでも分かる授業を楽しく行う。 ○毎回、ワクワクするような教材を取り入れる。 ○英会話に行ったり、日常的に英語を話したりする機会を増やす。 ○ALTの存在(意義)をきちんと知る。 ○熟練の先生方の授業を見せてもらう。 ○子どもの課題から、学習を発展させること。

オリエンテーションでは、この後、上記の記述内容を紹介し合い、8ページの小学校外国語指導者としての資質・能力の重要度をチェックし、その他の項目も追記した。10ページ以降の自己評価記述文に関しては、自宅ですべての記述文に目を通させ、4月当初での自己評価をチェックさせるようにしている。

【指導上の工夫や留意点】

本ゼミでは、それぞれの受講者が教職課程での学びや、教育実習などの経験を通して、主体的に学びながら、教員としての資質・能力を伸張させることに主眼を置いている。そのため、文中に登場する専門用語などについては、教員が事前に詳しい説明はせず、できるだけ自分たちで調べたり、授業中に受講者同士で尋ね合ったりする、自律的な学習態度を身につけさせるようにしている。

2.2 教育実習事後指導等での使用例

【利用時期】

3年生は小・中学校の教育実習が終わった10月、11月の2回、「自己評価記述文」に即して、実習を終えてどの部分が成長できたのか、または、課題があると感じたのかを考えてリフレクションを実施した。

4年生は、教員採用試験の結果が出た後の10月と、卒論の執筆がほぼ終了した12月の2回、「自己評価記述文」に即して、2年間の教育学部での学びと、言語教師としての成長を意識させながらリフレクションを実施した。

【指導事例】

3年生は、教育実習を振り返り、自己評価記述文の中で、特に自分が成長した部分と、まだまだ学び足りない部分はどこか？という視点から、一人一人の振り返りを発表させた。以下、表2は、小学校実習と中学校実習の後で、受講者が記述した振り返りの一部抜粋である。

表2

教育実習後の振り返り（○：比較的良好に出来たこと、△：まだまだ学び足りないこと）

3年	小学校実習後（10月）	中学校実習後（11月）
A	<p>○「児童中心の活動や児童間の交流を支援できる」(p.38 C-1) →子どもがやってみようという気持ちを大切に授業ができた。</p> <p>△「児童の反応や意見を授業に反映できる」(p.32 B-3) →指導案通りに進めることにとらわれ、臨機応変に対応できなかった。</p>	<p>○「児童のやる気や興味・関心を引き出すような活動を設定できる」(p.32 B-1) →自分の海外生活の体験を話すことで、生徒の関心を高めた。</p> <p>△「授業の目的に応じて、多様な評価方法を選択できる」(p.49 A-1) →言語活動で行った指導内容と、指導の項目が一致していなかった。</p>
B	<p>○「計画・実行・振り返りの手順で、児童や授業に関する課題を認識できる」(p.14 C-1) →子どもの日常生活の中から興味や関心を見つけ授業を計画できた。</p> <p>△「児童が文字、語句、表現を、書き写したり書いたりすることへの意欲を高めるような活動を設定できる」(p.19 B-1) →書く活動を、授業の中にバランス良く取り入れることができなかった。</p>	<p>○「児童同士のやりとりを促す活動計画を立案できる」(p.34 C-2) →中間交流を2回実施し、より詳しく会話をするためにどうすればいいかを生徒と共有することができた。</p> <p>△「ねらいや目的に応じてプロジェクト学習を計画し実施できる」(p.44 C-3) →最終的にどんな生徒の姿を目指したいかが不明確で、生徒に具体的な力を付けられなかった。</p>
C	<p>○「同僚や授業見学者からのフィードバックを受け入れ、自分の授業に反映できる」(p.14 C-3) →指導の先生からのアドバイスを受</p>	<p>○「児童の興味・関心を引き付ける方法で授業を開始できる」(p.36 A-1) →生徒が興味をもっているディズニーランドを題材にした教材を作り、受</p>

	<p>けて授業改善を行うことができた。</p> <p>△「自分に関する質問に答えたり、相手のことを尋ねたりする短いやり取りができる力を育成するための活動を設定できる」(p. 17-A1-4) →子どもたちが主体的にやり取りをするような活動ができなかった。</p>	<p>意欲的に取り組ませることができた。</p> <p>△「授業の目的に応じて、多様な評価方法を選択できる」(p. 49 A-1) →授業設計の段階で、どの場面で評価をすべきかを考えておらず、指導と評価の一体化ができていなかった。</p>
--	---	---

ここでは誌面の関係で3名の受講者の記述を掲載している。小学校実習で十分に達成することができなかった課題について中学校実習を通して改善することができたり、中学校での振り返りの内容が「評価」や「生徒のモチベーション」などの、より深い内容にフォーカスしたりして成長していることがわかる。

4年生では、教員採用試験が終わった直後10月と、卒論の執筆が終了した12月に振り返りを行っている。以下、表3では、12月に行ったJ-POSTLエレメンタリーを使った学びの総括的な振り返りについて、5名の受講者が書いた記述を紹介する。

表3

J-POSTL エレメンタリーを使った2年間の学びの総括的な振り返り

4年	J-POSTL エレメンタリーを用いた、総括的な学びの振り返り (12月)
A	自分ができていること、できていないことを、観点別に整理することができた。このようにして、何を意思して取り組めば良いか分かるので、指導案を作成する際にもJ-POSTLを見返してポイントを押さえることができた。
B	自分が、その地点で、何ができて、何ができていないのか、認識することができた。それにより、これから何を学ぶ必要があるかわかるので、勉強のやる気が出る。
C	自己評価記述文において、項目自体の内容を理解することが難しいので、「具体的にはどのような場面なのか」などの情報が書かれていると、よりわかりやすくなると感じた。
D	教採や卒論で、外国人児童と関わったり、異文化理解の授業をしたりするのは、どうしたらいいかと言うことを、たくさん考えることができたので、J-POSTLの異文化に関する項目はすごく数字が上がったと思う。
E	教師になりたい目標や理由をたくさん話していくうちに、自分はこういう子供達を育てたいのだということが明確になって、英語学習を通して異文化に関する興味・関心を持つような活動をしたいというのが明確になった。

受講者が、教育実習、教員採用試験対策の勉強、卒業論文の課題研究を通して、教師としての思いや考えの深まりをメタ認知し、指導者のbeliefを確立していく上で、J-POSTL エレメンタリーが有効な手がかりになっていることがわかる。

【指導上の工夫や留意点】

本実践は、2年間のゼミでの学びを通して受講者が教師として主体的に成長していく姿を、長期的なスパンで見取くことを目標としている。そのため、教師が意図的にJ-POSTL エレメンタリーの特定の記述文を取り上げて検討するという指導は行っていない。受講者によっては、教師として成長し、自己を厳しく見つめるようになることで、一時的に自己評価の値が低くなるということもあったが、それもメタ認知の発達過程と考えて、すぐに修正や指導をすることはしていない。

2.3 年度末総括での使用例

【利用時期】

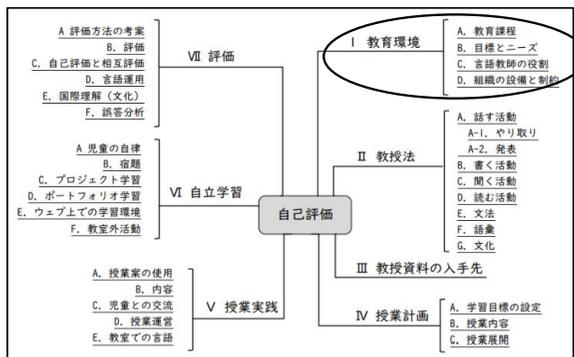
年度末(3月)には、1年間の学びを振り返り、全ての自己評価記述文について、各自で総括的なチェックをする。受講者にはGoogleフォームを用いて全項目をWebで入力してもらい、データの集計を行う。ここで得られたデータを、次年度以降、各学生の教師成長を分析する上で使用する。

【指導方法】

ここでは、2021年度の4年生が、3年生の3月に入力した集計データと、4年生の9月に入力した集計データを比較した一部を紹介する。

J-POSTL エレメンタリーの自己評価記述文は、図1に示されたように、I~VIIのセクションに分類される。それぞれのセクションでの、自己評価記述文の数値を合計し、100パーセント換算した数値を、各項目のレーダーチャートに示した。

図1
記述文の分類



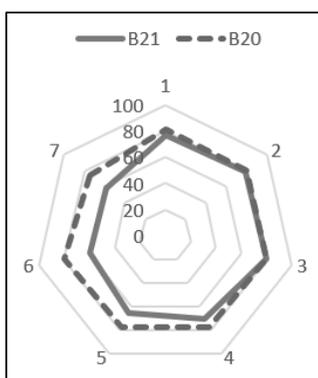
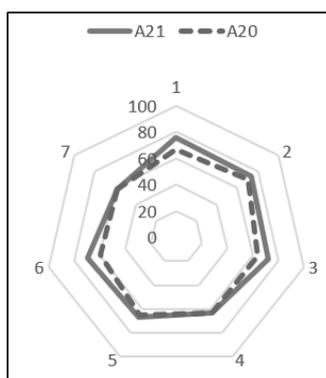
《数値化の例》

Iの教育環境には、A~Dまで、全部で18の自己評価記述文がある。例えば、ある学生の記述文の合計点が54点だった場合、全体の合計点90で割って割合を計算する。54÷90×100=60となり、レーダーチャートに60点と入力する。

図2は2名の個人レーダーチャートである。Aの受講生は2021年にI, II, III, VIの項目で成長が見られたが、VII(評価)の評価ではあまり成長が見られなかった。また、Bの受講生は2021年にIV, V, VI, VIIの項目で、数値が昨年より後退していることがわかる。これらのチャートの変化を見ながら、各受講生と2年間の学びの軌跡を振り返った。

図2

自己評価記述文の個人レーダーチャート



《図2の見方》

実線

2021年9月のデータ

破線

2020年3月のデータ

1~7の数字は自己評価記述文のセクション

〔受講生Aの振り返り〕

授業をやったことがないと不安だったけれど、実習やボランティア先などで指導をしてみたり、周りの先生の指導を受けてやってみたりすることで、思っていたよりも何となくできたことで、成長したと感じ自信が持てた。

〔受講生Bの振り返り〕

自己評価記述文について印を付けていったときに、改めてVII(評価)などの項目について、自分が全くわかっていないことに気づいて、もっと評価について勉強していかなければいけないと思った。

【指導上の工夫や留意点】

このレーダーチャートを用いたリフレクションは、J-POSTL エレメンタリーで推奨された使用方法ではないことをお断りしておく。本実践では、指導者がゼミの学生を指導対象にしているため、長期にわたり受講生の日頃の学びの変化をつぶさに観察できるため、このような分析を実施することができた。

学びの経年変化をレーダーチャートで可視化し、リフレクションに活かすことで、受講生は、個人の学びの変化を視覚的にメタ認知でき、学習意欲の向上につなげることが出来る。また、指導者は教職課程における授業などで、指導が不足している部分

を診断し、次年度以降の指導改善につなげられるものとする。

3. まとめと今後の活用計画

以上のように、J-POSTL エレメンタリーを使って、履修生同士でリフレクションを行うことで、互いの成長や変化から、言語教師に求められる資質・能力について学び合うことができた。また、履修生個人としても、J-POSTL エレメンタリーを使って、学びの軌跡を継続的に記録・観察することで、言語教師としての成長を可視化しメタ認知しやすくなることもわかった。

一方、指導者としては、履修生一人一人の学びの特徴や変化を、経年調査することで、教師の資質・能力を向上させるために、個に応じた適切な指導やアドバイスをすることができた。

本実践は、2021年度の3年生、4年生を対象として行った。4年生は、前年度「教職課程試用版」を用いていたので「完成版」と完全に比較することができなかった。来年度以降も「完成版」を使った実践を続け、履修生が自己調整力を高め、言語教師として成長することができるよう、J-POSTL エレメンタリーを活用した実践を続けていきたい。

謝辞

本論文の作成にあたり、秀明大学の山口高嶺先生には、自己評価記述文のデータ処理のために Google フォームの作成や結果の提供を頂きました。また、実践を進めていく上で、丁寧なご指導もいただきました。改めて、心より御礼を申し上げます。

参考文献

- 澁井とし子 (2019) . 「小学校外国語 (英語) の教員養成コア・カリキュラム ―押さえておきたいポイント―」 『獨協大学研究紀要 マテシス・ウニウエルサリス』 第21巻, 第1号, 129~151.

『小学校英語指導者のポートフォリオ』
J-POSTL エレメンタリー
教職課程における活用実践

令和4年(2022年)2月20日 初版第1刷

発行者 JACET 教育問題研究会

JACET SIG on English Language Education

<http://www.waseda.jp/assoc-jacetenedu/>

代表 清田 洋一

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1

早稲田大学商学学院 神保尚武 気付

電話 03-5286-2081

印刷所 有限会社 桐文社

〒142-0053 東京都品川区中延6-2-22 エボンビル1階

電話 03-3781-4010

本書の印刷費には科学研究費補助金基盤(B)(課題番号:19H01288)が使われています。

英語教師必携：J-POSTL活用書2編



2020年刊行(大修館書店) 現職英語教員による実践事例集

- 教育困難校から進学校までを網羅
- 読解中心から技能統合型の授業へ
- やり直し学習で生徒が生き返る
- 生徒を自立型学習者に育てる試み
- 協同学習・相互評価で生徒が変わる
- 評価の工夫が授業を活性化
- 茶道を通して育む異文化間能力
- 校内自主研修で授業力アップ
- 英語以外の教員にも効果を発揮
- 授業観察のルーブリック, 等々

2017年全面改訂版刊行(三修社) 英語科教育法テキスト

- 教科教育法のロングセラー
- 新学習指導要領に対応
- 整合性のある構成と記述内容
- 使いやすいレイアウト
- J-POSTLの真髄が分る理論編
- 自律的な英語教師を育む実践編
- 豊富な調査で裏付けられた記述
- 側注の用語解説で内容理解を促進
- インタラクション重視の課題設定
- 充実した資料編

